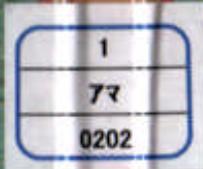


# アマゾンで日本人は ガランチード と呼ばれた

地球最後のフロンティアでの1世紀

山根一眞

アマゾンで日本人はガランチードと呼ばれた



国際青少年自然科学センター  
発売・内田老鶴園新社

アマゾン日本人入植50周年記念出版

0020 20001 0505

980円



## はし が き

南アメリカの五分の二を占めるアマゾンという熱帯降雨林に“緑の地獄”という形容詞がつけられてからも何十年にもなるのだけれど、この形容詞を臆面もなく駆使してアマゾンの恐しさを日本人に訴えた先人は評論家の故・大宅壮一さんであった。それは昭和三十年のことである。

温帯モンスーンという気候帯に棲んでいる日本人にとってさわやかな風と豊かな実りと母なる大地の象徴である“緑”が“地獄”であるとはとうてい信じられることではなく、そこにこの言葉のこわさがあった。

日本のテレビの画面にくり返し登場するアマゾンはまた、裸の原始的な生活（それは文明人からみての話なのだが）をしているインディオばかりで、弓矢と首狩りと入墨に縁どられた戦慄の三十分、六十分のドキュメンタリーと称する番組はまた、アマゾンをして背筋のぞつとするとところに仕立てあげている。

いまから七年前にはじめてアマゾンを訪ねたとき、私を見送ってくれた知人は、「ライオンに喰われないように」と真剣な眼差しで心配してくれた。彼は明らかに少年時代にターザン映画を見過ぎていたのである（アマゾンにはライオンも象も棲んでいないのでお断わりしておきます）

さて日本では昭和五十三年に作家の開高健さんがアマゾン釣り紀行『オーパ!』を著わして偏見のないアマゾン像

を描き、売れゆきもすさまじく、そこには“緑の地獄”というよりもアマゾンの壮大さと、美しさ、ひっくるめて言えば壮嚴さが、はじめて多くの日本人に知らしめられたのであった。

七年目にして二度目のアマゾン行きを控えて、もはや「ライオンに喰われないように」と心配してくださる方もあるまいと思っていたのだけれど、出発の数日前にふとわが家の壁を見ると見たこともない神社のお札が掛けてあるのに気づいた。

どうやらそれは女房が実家の母と相談の上、某大神社で神主様をお願いして、私がライオンに喰われないように祈祷をしていただきちようだいしてきたものらしかった。

地球のちようどこちら側にいる日本人にとってやはりアマゾンはいまだ“緑の地獄”である。

そのアマゾンに日本人が開拓者として生活をしているということはまたいまの日本人にとって新たなる驚きにちがいあるまい。しかも、すでに五十年の歴史を数えていて、アマゾン全域に約一万人の日系人が元気に活躍している、と訊けば、それはもはや別の惑星のできごとのように思えるであろう。

アマゾンが“緑の地獄”であるという表現はたしかに誤謬と偏見に満ちているが、ときとしてここは地獄か、と思わせる性格があることは打ち消すことのできない事実であるようだ。

そのアマゾンで、私たちと同じ日本人が五十年間生活し

てきて、現地のブラジル人から「ジャポネス・ガラランチード」と呼ばれるまでになった。

“ガラランチード”とは英語ならーギヤランティーに相当するブラジル語で「保証つき」とでも訳していいだろうか。日本人である、ということだけで、ブラジル人は全幅の信頼を寄せてくれるのである。

私はその “ガラランチード” という言葉にこめられている重みを解剖したくてアマゾン全域の日本人を訪ねあるいた。本書は、アマゾンの日本人が “ガラランチード” という勲章を得るにいたった生活の記録である。

ゆるりと流れるアマゾン河のようにアマゾンの時間もゆるりと過ぎていく。そのなかをこせこせした東京の暮らしそのままにあたふたと駆け足でインタビューをしてきた私は、ずいぶんたくさんの方に無理を申しあげてしまった。それにもかかわらず山のような冒険談を話して下さったみなさんにここで心よりの御礼を申しあげます。また本書の出版実現にはベレンの北島義弘氏、陣内衛氏、馬淵信宏氏、マナウスの橋本捷治氏、日本にあつては日向博美氏の援助と叱咤なしにはあり得なかった。あわせて感謝申しあげねばなるまい。

一九七九年九月十六日

著 者

## 目次

はしがき

アマゾン略地図

### 第1章 この果てしなき熱帯降雨林 8

人がナマズを食うのか、ナマズが人を食うのか アマゾン河は地球をひとまわり もうワニの輪切りは売っていない イモが猿に化ける距離  
大女を呑みこむ日本人たち

### 第2章 古の夢、そして未来に夢 31

今夜はオウムのスープにピラニアの塩焼き いま アマゾンの日本村  
にデイスコのあかり 食糧が足りない、それに娘も…… 札束の吹雪  
が襲った日 胡椒景気の残したもの 果てしなきピメンタ墓場より  
愛すべきカボクロたち トメアスーのある家計簿 夢ひらく：イモ・  
ガソリン：

### 第3章 絶望の運命をねじ曲げる 65

トイレにはクワが必要だった 神の恵みにより野菜は食べない ア  
マゾン・パパイヤはいかが

### 第4章 アマゾン横断道路の黎明 76

いま、ここで西部劇が ごちそうは大ネズミ 密林壁の谷間は映画十  
戒と同じ ジャングルの大引越し 狩猟一時間、ダニとり二時間

### 第5章 歓喜の山にいま迸る熱情 94

スカイラブが落ちてきた 一カ月に一人しか他人に会えない土地 六  
十頭の馬が行進する結婚式 日本にいたらサラリーマンで終わっていた  
でしょう

## 第6章 大プランテーションの終焉

109

なぜ息子たちは医者になったか 青竜刀を片手に出陣 アマゾンの日  
米大戦争 やぶ医者コンビ多忙の日々 三日日にまたやってきた吸血  
コウモリ

## 第7章 蹉跌は密林大河を越えた

127

インドから種を密輸 毎晩、短刀をつきつける酔っ払い学生 深夜の  
開拓地にきこえる「赤城の小守唄」 飛行機に人が轢かれる アンデス  
おろしに流れる涙 夜半フト目を覚ますと…… 山羊と毒蜂が占拠  
した高拓生の故郷 ジュート成功の陰にユダヤ商人 血を吸うと二十  
センチになるヒル いまも生きる高拓生コネクション

## 第8章 深き祈り川面の果てに届け

165

人間が電話機になる町。 白砂青松と幻の秘薬。 マウエ族の悲恋物語。  
体温計から水銀もはみだした高熱。 海に出たファミリーの子供たち。

## 第9章 一億年の森林圏が沸きたつ

183

遭難と大発見、二つのニュース アマゾンにピラミッド帝国？ ジャ  
ングルで一晩寝てきなさい クワの刃が折れる土 大木が空を舞う。

## 第10章 アマゾンア最果ての新世紀

201

ソ連カゼが四千キロを飛んでくる キナリー卵のニセモノが出現 ペ  
ルー下り老人の誇り マラリアになって一人前 豹の乳をウイスキー  
代り

## エピソード 参考文献

218

写真提供Ⅱ高村正寿氏(143、183)、R・ユーハン 氏(215)、  
汎アマゾンア日伯協会(151、155、167、175、179) ( )  
内はページ。 装帳・表紙本文写真Ⅱ山根一真

## 第1章

### この果てしなき熱帯降雨林

探検家だけのアマゾンの時代は終わった



#### 人間がナマズに呑まれた

「かわいいそうなことをしたなあ。ナマズに呑みこまれたらしいじゃないですか」えっ、と私は身をのり出した。つい二十五時間まえに成田空港を出てきたばかりである。ロスアンゼルスからアマゾン中流の大都会マナウスまでは週に一便、ヴァリグ航空がまっすぐに飛んでくる。約十時間あまり。マナウスはアマゾン中流の都会で人口六十万(人推定)。新東京国際空港も顔負けの靴音が心地よく天井に響

きわたる超近代的空港に降りたつたとき、ここがアマゾン？ と疑いたくなくなった。市内へ出ても、二十階建て以上のビルが林立し、フォルクスワーゲンのタクシーは轟音をあげて走りまわっている。マナウスは町全体がゾーナ・フランカ（自由貿易地域）に指定されているためセントロ（町の中心）には輸入のカメラやビデオデッキ、カラーテレビ（その多くが日本製）を揃えた免税店が目白押し。まさかあるまいと思つたソニーのマイクロカセットのテープを四十本近く購入することさえできた。

七年前にこの町を訪ねたときと比べて格段の発展ぶりだ、とまどつたほどだった。前回、私は下流のサンタレンから船で八百キロさかのぼつてこの町へはいった。港のうす汚れた食堂で昼食をとつたあと、メモ帳に、「このメシを食べたら間違ひなく死ぬのではないかと思うようなものだった」と記したことを覚えている。今回のマナウスの発展ぶりを見て（それは新しいところだけが目についたからなのだが、なにしろブラジル入りしてまだ二時間目である）もうかつてのアマゾンはなくなりつつあるのかといささかの失望をしていたところへナマズの話である。場所はとあるレストラン。ステーキにファリーニャ（マンジョーカの粉）をまぶしながら私を迎えてくれた三人の在アマゾン日本人がさりげなく話している。「一カ月まえですよ。インド人が経営している大きなホテルがあるので、その親戚の子どもがインドからマナウスへ来て川へ遊びにでてね」

― それでナマズですか？

「フルタンチという浮き家のベランダから川へとびこんだらしい。何人かで泳いでいて、ふざけてひとの足を引っぱってやろうともぐったきり、浮かんでこなかったのです」

― どうしてナマズなのですか？（私の頭にあるナマズはせめて手のひらにのる愛敬のあるヤツである。）

「そこはちょうどソリモンエス川とリオネグロ川の合流点に近いところで、そこから下流がアマゾン川というふうになる。合流点にはナマズが多いのです」

― 人を吞めるんですか、いったい？ 私には怪物としか理解できない。

「ピライーバというナマズは大きいので長さ三呎、重さは二百キロ……」

― それではあの、最大の淡水魚というピラルクーより大きい？

「市場によく出てますよ。もつともウロコのない魚は低級魚とみられて人気は低い」

― 口が大きいんでしょうか？

「大きくあけば五十センチ×四十センチ。口の中には何千本という剣山のような歯がびっしりと内側へ向いている。ひとたび咬まれたらもうぬけません」

私は同じ質問をくり返すばかり。

― ナマズが人を吞むんですか？

「ふだんは川底にいますがハラがへると水面近くに上って

くる」

魚に詳しい青年が三枚目のステーキをほおぼりながら補足する。

「いまは増水期でエサの魚が少ないからね。アンコウだつて深海魚なのに水面近くに出てきて水鳥を喰うことがあるんだから。ハラがへれば……………」

でも、それは推論にすぎないでしょ？

「いや昨年七月、アクレ州のブルース川沿いの刑務所から囚人が四人脱走して川を泳ぎはじめたところでナマズに吞まれて……………。ピラニヤじゃありません、あたりは血の海で。新聞に大きく出ました」

そのインド人は子どもでしょ？

「体格の立派な男でね、十九才でした。海軍まで出て探したが発見できず、インドから兄が駆けつけたけれどガツカリして帰国したのが一週間前です」

その場所というのが、マナウスからモーターボートでわずか一時間のカレーロというところと訊いて、もう私は言葉も出ない。

アマゾンの取材にやってきた私は、まず先制パンチをくらわせられた。ナマズが呑んだか否かは誰も知らない。しかし、そうであつても否定できない。よつて吞まれたことにしてあきらめるしかない。日本から来たばかりの私を驚かせるためにこんな話をしたのでもなさそうだし、この人たちはケロッツとして語り続けている。



## 日本十六個分のアマゾン

あるアフリカの観光ツアーでこんなエピソードがある。道端に長さ五十<sup>センチ</sup>のトカゲらしきものが死んでいた。観光客はいたく感動する、高い金を払ってきた甲斐があった、これが見たかった。ところが、もう少し大きいのが出てほしかった、できれば生きたまま、しかもこつちを襲う気配があったほうがいい。帰りの空港でツアーの一行が思い出話に花を咲かせている。すでにトカゲの長さは八十<sup>センチ</sup>になっていて、日本へ帰ると一<sup>匹</sup>をこえている。しかも「危うく襲われるとこでしてね」と、ふくらんでいく。人

間は大きなもの未知なものに驚くと、それを第三者に誇張して語りたくなるという本能をもつ動物であって、アマゾンはそのダシにされるのにうってつけの土地であることは疑う余地もない。ただし、アマゾンはそのダシにされるだけのことがあるところなので、事実は事実としてわきまえ、誇張かな、という部分はカッコにくくっていかない、とんでもないアマゾン像が果てしなく広がって、いつまでもワニとピラニアと大蛇のアマゾンしか理解されないことになってしまう。

ナマズが人を呑んだという話にしても、カッコつきにしたほうがよさそうに思う。しかし、そういう話があってもおかしくない、というところにアマゾンのアマゾンたるゆえんがある。

昭和五十四年七月上旬、私はマナウスで一泊した後、今回の取材旅行のふり出しであるアマゾン河口の町、ベレンへと向った。ジェット機の窓から見るアマゾンは“緑”だけである。地平線まで上等のシャギーのカーペットが敷きつめてあるようにべったりと緑である。木、しかない。地図を広げてみるとアマゾンと呼ばれる密林地帯は端から端までで三千六百キロ、とすれば時速八百キロのジェット機ですらこの単調な景色から逃れるために四時間半飛ばねばならない計算である。

この大森林に流れているのがアマゾン河。アマゾン関係の本では必ず言及されていることだがあえてそれをくり返

すならば本流は全長六千四百キロ、東京が源流とすれば河口はシンガポールあたりに位置する。

一日の流量はイギリスのテムズ川の一年分にあたり、一秒間に8万立方メートル、といってもこのあたりのデータになるともう頭の中で実感としてつかめなくなるこの支流の数は千百本に及び、さらに小さな支流は無限といってよい。支流のうち十七本は長さといっても長さ千六百キロこえる。そのいずれもライン川より長く、マナウスの町はずれから遠望できる支流のひとつリオネグロは川幅が十九キロもある(マナウスは河口から直線距離でも千六百キロである)。アマゾン河全体の河川延長は四万九千四百キロで地球をぐるりとひとまわりしてまだおつりがくる。この世界最大のアマゾン川は、その水面をながめる限り流れているのかどうかわからないほどゆるりと下っている。というのもアマゾンというところがおそろしくまっ平らであるために水は流れ下っていくというより上流から押し出されているためである。

河口から三千キロ(直線距離で)上流でさえ海拔は二百メートルそこそこ。新宿の三井ビル(二百十メートル)といい勝負である。アマゾンには飛行機から見るとまっ平らな緑のカーペットであるけれど、実際に測ってみてもその落差は一キロあたり四ミリしかないと言われている。

河口では川幅が三百キロを越し、直線距離で河口から八百キロ近い上流のサンタレンでも、大西洋の潮の干満の影響をうけ、満潮時には逆流する支流も珍しくない。船が下

流へ向っているつもりが上流へ向っていたという笑えぬ話があるほどである。

このアマゾン河が流れる一帯をアマゾンと呼ぶ。その流域面積はブラジルをはじめ九カ国におよび約六百平方キロ、日本がすっぽりと十六個は収まる広さだ。

赤道直下の熱い日ざしはアマゾン川の蒸発を促し、上流から下流にたどりつく水の三分の二は空へとあがり、雨となつて降り巨大な熱帯降雨林を育んでいるという。

以上が誇張ぬきの事実で、こんな数字を頭の中でころがしながら窓の外を見れば、ナマズの話も真実味がでてくる。

二度目のアマゾンだけれども、七年前の驚き、嘆息はいつのまにか脳の中で乾燥野菜のようにひからび抽象化していた。それがいまお湯をそそがれた乾燥野菜のように、じわじわとふやけ始めてきたようである。

## 百万都市ベレン

「アマゾンは大女のようなだ　どこが股やら乳房やら」アマゾンのとらえどころのない広さを現地の人たちはこう歌うのだそうだが、ベレンの町はその大女の眼か鼻にあたる。

いまからちょうど五十年前の一九二九年（昭和四年）九月十六日、アマゾンへの日本人開拓者の第一陣（四十三家族百八十九人）が上陸したのがこのベレンであった。当時のベレンは人口二十万とはいえ、二十世紀初頭にアマゾン

を襲った空前のゴム景気が破裂した風船のように去った直後だ。市内には路面電車が走る北ブラジル一の町とはいえ、はじめてここを訪れた日本人の開拓者たちは町に漂う寂しい空気に夢も醒める思いをしたと伝えられている。

南緯一度二十八分三秒——赤道直下のベレンはアマゾン河口の町とはいえ、河口からは百三十八キロの位置にある。河口にはマラジョー島というのがあって牧畜がさかんにおこなわれているのだが、その大きさというのが、「九州くらい」あってベレンを訪れる日本人はまずそのへんからアマゾンの大女ぶりを知るきまりになっている(西欧人の場合は、「スイスより大きい島」と説明される)。



アマゾン河の小さな島

ベレンの人口は、いま百万人近いと推定されているが、七年ぶりに訪れたベレンはマナウス同様にめざましい発展

で、たとえば七年前と現在の違いを市内在住の日本人の台所をのぞいてみるだけでもよくわかった。

「市場へ行っても鶏肉なんて売っていないから生きた鶏を買ってきて台所で首をひねって殺してね……………」

と、七年前話してくれたのは東京から派遣で家族ぐるみベレンへ来ていた学者の二十九歳の奥さんだった。もちろん生れも育ちも東京の女性である。今回その奥さんに会ったら、

「鶏肉？ いまは日本と同じ。エビだってこの通り冷凍よ、スーパーマーケットがふえたから」

と、わざわざ大型冷蔵庫から実物をもってきてくれた。あのころは、ベレンの市場にはワニの輪切り（もちろん食用）が転がしてあったりしたが、いまはそんな観光客が歓喜する光景はなくなった。七年前にこの一家が住んでいたところは町の中心に近いとはいえ未舗装のぬかるみの道をはいった一軒家だったのだが、いまや十何階建ての日本風に言えばマンションである。なるほどその窓からベレンの町をながめると、町を緑に覆いつくしているマンゴーの木の並木の間から高層ビルやらテレビ塔がニヨキニヨキ、その向うに大工が使うトノコ色をしたアマゾン川が広がっている。

このベレンの発展は、北ブラジル（南半球ゆえ南とは寒い地方、北とは暑い地方を意味するので念のため）が、農業に加えて鉄やアルミをはじめとする鉱工業が盛んになつてきたことを意味しているし、もう少し昔にさかのぼ

るならば、日本人開拓者が育てあげたアマゾンの二大産業、ピメンタ・ド・レノイ（胡椒）とジュート（黄麻）が貢献すること大であった。日本人が「ガラランチードリ」と呼ばれるのは、ピメンタ・ド・レイノとジュートのおかげといってもよいのである。

もつともこのベレン、一九六〇年代の半ばまでは陸の孤島であった。アマゾンの他の地域同様サンパウロやリオカラベレンへ来るには飛行機か大西洋を船でやってこなければならなかった。それが、一九六五年に首都ブラジリアからベレンに通ずる通称BB街道二千二百キロが開通してアマゾンの経済はブラジル経済の中心地、サンパウロ、リオ圏と直結するようになった。



ベレンのナザレの祭（10月）

はじめアマゾンに開拓ではいった日本人にとって、ブラジルの中心と隔絶されたアマゾンは、ブラジルの一地方というよりもまったく別の国のようにみえたのも当然で、それはまた、サンパウロ圏の人たちにとっても、アマゾンは日本にいる日本人が思い浮かべるアマゾン像とたいしてちがわないものであった（いまも、そういう傾向はあるようだ）。

たとえば、一部のサンパウロの日本人がアマゾンでは、いやベレンでは「猿の汁（スープ）」を飲む習慣があると信じているという話があつてベレンの日本人がいたく憤慨していた。

アマゾンの原始林に生活する人々にとってあらゆる野生動物は食糧の対象となるので、まれには猿も食べる。夕食に、皿に盛りつけた人間の子どもの手の煮つけがでてびっくりした、それは猿の手だった、というエピソードは奥地にいけばときとしてあるが、人口百方のベレンで猿の汁を常食しているというのはアマゾンに対する偏見が生んだ話にちがいない。

ブラジル語で猿のことをマカコという。いっぽうアマゾンにはタカカという汁があつて露店で飲ませている。これはマンジョーカというイモの汁からつくる辛味のきいたスープで、そのピリリとした味が熱帯ボケの防止剤の役目をもつ。マカコとタカカの発音が似ているために「猿の汁」という話ができあがってしまったのである。ベレンでは、猿を食う人はまずいない。

## 「イモ汁」が「猿汁」にかわる距離

「猿の汁」を生んだものはブラジルの気の遠くなるような広さ、アマゾン地方がブラジルの中心地から遠く離れているという事情である。ベレンとサンパウロ間はジェット旅客機で約四時間といっても実際に地面を走ってこない現実感としてはつかめるものではあるまい。

一九七二年に邦字紙サンパウロ新聞の仕事でブラジルを訪ねた私はサンパウロとベレン間を陸路走る機会に恵まれた。サンパウロとブラジリア間の千百五十<sup>キ</sup>は同紙の白石蜜義さんのシボレーに同乗させていただいたが、完全舗装道路であるため、わずか十四時間のドライブであった。

未来都市ブラジリアは、その建築群よりも海拔千<sup>ミ</sup>の高原の上をおおい尽す青空が見もので、「大統領の住むところは空気がきれい」というブラジル人の言うことを信じたくなる。

このブラジリアに首都が移されたのは一九六〇年のことで南の地方に偏ったブラジルの発展を北の地方にも及ぼすという悲願がこめられていた。アマゾン地方の開発が新時代にはいったのがこの時代ということもできる。とはいっても、ブラジリアからアマゾンの玄関ベレンまでは二千八百キロもあって、アマゾンが近くなったとはわれわれ日本人にはとても思えない。サンパウロとベレンは、三千二百三十九キロで東京とマニラよりも少し遠い。こうなる

とどんな例えを出しても、たとえばブラジリア〜ベレン間だけでも山手線を六十周するのと同じといってもピンとくるものではない。そこでブラジリア〜ベレンのBB街道を走ってみることにした。

いまは全線舗装されたけれど、当時はほとんどが未舗装であるにもかかわらず、ちゃんと夕方七時、ベレン行きのバスが毎日出ていた。山手線を六十周するとはいかなるものか、運転手二人乗客三十六人の耐久走行に参加した。

ブラジリアを出るともう暗闇で、何もない大原野の地平線上にいくつかオワンを伏せたような光の半円がみえるのは、地平線の向う側に散在するブラジリアの衛星都市の町あかりであった。

それも見えなくなると、雲が赤く染っているのがときおりあらわれる。やはり地平線の向うで、山焼きをやっているその照り返しである。

夜九時半、アナポリスという町のバス営業所に停車し運転手は毛布や布団、カバンを積みこむ。これから旅の始まりだ。運転席のうしろには交代運転手用の大きめのイスがあつて、二人は交互に仮眠をとりながらベレンまで走るのである。一人あたり千キロ以上の運転だ。未舗装の原野をただ走る。対向車もほとんどない。午前二時上りのバスが故障しているのを発見、その修理を手伝うためにこちらのバスも一時間ほど止まる。雨が降りはじめていてむし暑く体じゅうがベトベトになる。また走り始める。夜が明けると、地平線までの原野はまったくかわらない。

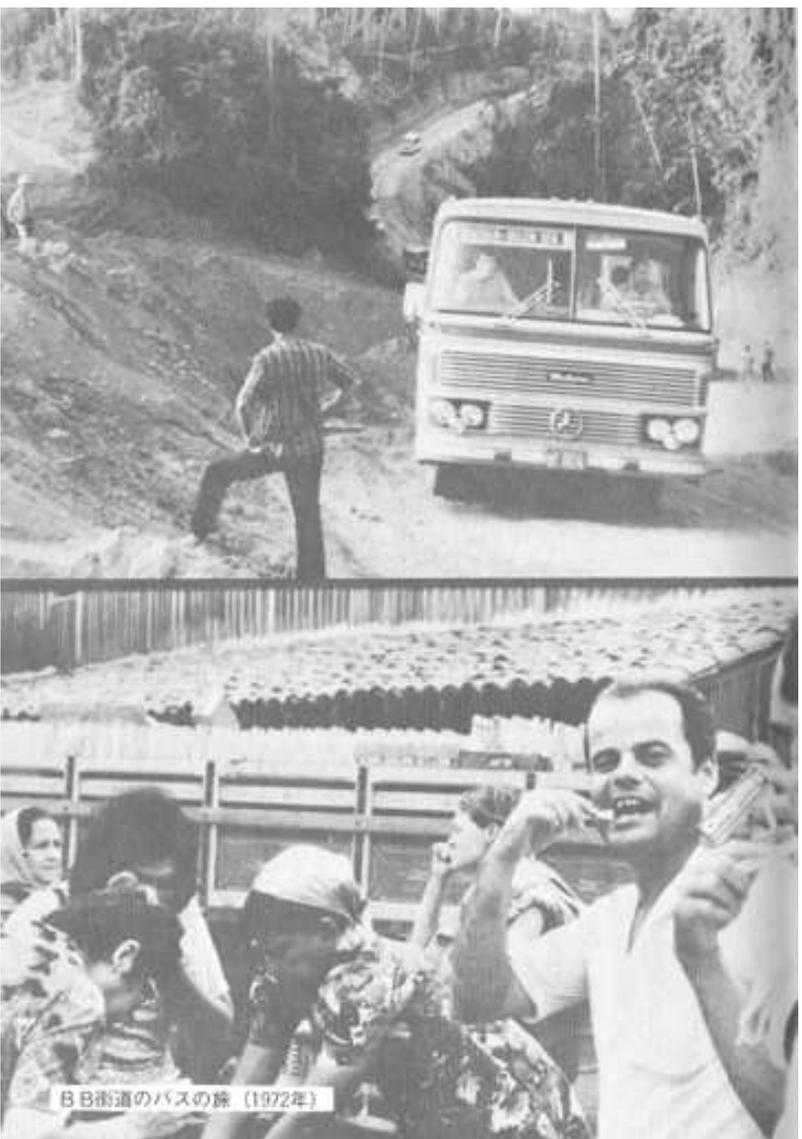
午前八時、アルボラダという村で三十分の休憩。乗客は井戸で顔を洗ったり小さな店でコーヒーを立ち飲みする。すでに出発して十三時間目。しかし時間の観念も距離感も失せはじめていた。遺はひどい冠水で途中トラックが巨大な水たまりに漬って動けなくなっていた。バスははねあげる泥水で赤茶のバスに変じた。ときおり止めては窓を拭く。

十二時半、ファチマという村で昼食。日ざしは格段の暑さ。板張りの食堂では、それでも野菜の煮つけなど十品は出る。

水浸しの道は日射しのために一変して土ボコリの道となる。連転手に続いて私まで四人がクシャミ、土ボコリのせいだ。ベトベトの汗に赤いホコリがよくなじんで気持ちわるいという感覚もなくなってくる。二十時間目、パライリード・ノルテという集落で給油。ガソリンスタンドとはいえ手回しポンプでの燃料補給だ。すぐ出発するが、やがて一日すぎるというのに、まったく景色がかわらない。三百六十度の原野。車内は乗客と同じように一面真っ赤、ホコリのためだ。暑くてぐったりしていたらクラクションの音。外をみると牛の群。牧場地帯らしい。

夕方の五時、単調な原野に丸ビルほどの四角い石が落ちていたのがみえる。と、同時に雷鳴と稲光り、スコール。視界は十路、バスの汚れが落ちるのはいいが、連転手は時速八十キロのペースを落さないで、雨水がバスの床や窓のすきまから車内に吹きこんでザブザブと流れていく。乗

客は総立ちになるが、だれもが、ウワツハハハ、オホホホと笑いころげている。ブラジル人の陽気さにはときとしてついていけなくなる。バスにはまるで羽がはえたような水しぶきがあがっている。二十分後、突然雨はパタツとやんで青空があらわれる。さらに二十分。向うから単発機が道路ストレスに飛んでくる。「飛行機も進路を見失わないように道路の上を飛ぶのさ」と、隣の男。迷子飛行機がよく道路へ降りるともいう。



タクシーが追いかけてきてバスを止めた。テンガロンハットの男がトランクひとつもって乗りこんでくる。「町で手を振っていたのに運転手が気づかずに行ってしまったんだ」と嘆いているので、苦勞さんと握手をすると、「お

まえは紳士だ」と喜んで、キンタマのあたりをむしゃむしゃひっつかきながら「ボン、ボン」（よい、という意味）と言う。

バスは道路に穴があろうとスコールがこようと八十〜九十キロですつ飛ばす。ブラジルでは運転の勇敢さではトラックよりバスのほうが一段も二段も上で、それゆえ日系人はバス（ブラジル語でオニバスという）のことを、オニ（鬼）バスと呼んで敬意を表している。

六時半、夕暮の中に小さな集落があらわれる。ヤシぶきの屋根に泥を固めただけのような家。窓にはガラスもなくポツカリと穴があいているだけなのでランプのオレンジのあたりが外にもれて神秘的。通過。はかり知れない汗とホコリで髪の毛はゴワゴワだが、もうどうでもいいという気持ち。シャツもズボンもまっ赤だ（ブラジルの土はどこも燃えるように赤い）。

七時半、コリナス・デ・ゴイアスという村で夕食。村が真暗なのがふしぎな感じがする。電気がきていない。食堂だけは自家発電らしく二十ワほどの電灯がひとつ。大きな鍋からヨーグルトらしきものをよそって食べる。

ホコリの夜道をバスは飛ばし続けていく。気がつくともう朝の六時、周囲の景色がかわっている。密林が始まっていた。アマゾンにはいったのだろうか。バスが止まった。そこから先は上り坂なのだが、その途中でタンクローリーがエンコし、タンクから油が道路へ流れ出し、赤茶の道を黒く染める。バスの乗客は全員が外へ降りて見物。運転手

は道端にすわって「さあ五時間かかるか一日かかるか」とのん気なことを言っている。密林の上を、キキキ……と鳥が鳴き声をあげて飛んでいく。「ピリキートというオウムのような鳥だ」とブラジル人が教えてくれた。一時間後、地響きがして見たこともない巨大なトラクターがあらわれてタンクローリーをいとも軽々とひっぱりあげて道は開通。村は三十〰百<sup>キ</sup>おきにしかないのだが、たまたま近くの道路工事現場にこのトラクターがあつて助かったということだった。

土の色が赤から少し茶色のようになるころは道の両側はすつかりの密林となった。七時半、「あとベレンまでわずか。五百キロ」という説明を訊く。エンコ車のおかげで朝食が遅れている。うしろのほうのお客は、しきりに運転手に向つて「カフエー、カフエー！」（コーヒーつまり朝飯）と合唱を始めた。

八時半、密林を焼き払ったあとの耕地をみる。一面青い煙がたちのぼっている。九時半、ようやくグラピイ・ド・パラという町で停車。井戸で顔を洗うが石ケンがないので水で顔をこすったら手までもが顔のあぶらでベタベタになつてしまった。売店で五十円払つてミルクコーヒーとパンを食べていたら、同乗のおばあちゃんが「これうまいやね」と、ポップコーンのようなものをミルクコーヒーにザラザラと入れてしまった。ところがそのままいこと！ コーヒーも飲めず。この町に、ブラジリア行きの上りバスも休憩していて、向うの乗客であるブラジル人がしきりに

こつちの腕をとって、「ジャポネスよ、こつちのバスのほうが面白いからブラジリアへ行こう」と誘う。ようやく二千キロ近く走ってきたというのに、これは冗談なのだろうか。

ベレンへ向って再び出発。暑くて気が遠くなる。ホコリと汗と脂で発狂しそうだ。

午後二時。まだバスは時速八十キロで走り続けている。もう何時間このバスに乗っているのか、なにもかもわからなくなる。二人の運転手はおしゃべりが昂じておたがいの頭を叩きあうなど、ふざけがエスカレートしてきた。時速九十キロ、われわれの命はどうなるのだ。と、エンジンがバタバタ唸りはじめる。それみる！ 三十分停車して修理。なんとか出発。

午後三時、トラックがお腹をみせてひっくり返っている、もう何台こういふのを見ただろうか。じきにサン・ミゲル・ド・グアマという町にはいつて昼食。お客のシャツはもうすっかりおそろいの色、赤シャツである。暑く、疲れて食事が終わっても乗客はダラダラしてバスに乗ろうとしない。運転手はイライラしてクラクションを鳴らし続ける。

午後四時、道路はアスファルトになり一同拍手。周囲にピメンタの耕地が見えはじめる。ベレンが近い。四時半、ブラジリアを出てはじめてビルを見る。五時半、ベレンの町にはいり、二千二百<sup>キ</sup>ではじめての信号で止まった。十分後、ベレンのバスターミナル着。

サンパウロから通算すれば六十一時間半。この「タカカの汁」が「猿の汁」にかわってしまう距離もいまではグッと縮まって、ベレン〜ブラジリア間は完全舗装道路をデラックス寝台バスが一日半で走る。ブラジル、アマゾンの変化は超音速である。



## 大女を呑みこむ覇気

かつてのBB街道に思いを馳せながらベレンを歩く。ベレンのかわりようはどうだ、私は浦島太郎の心境だ。夕食のためレストランにはいる。が、ひどい目にあってしまった。カラーテレビが私の頭の上のほうに鎮座していて、お客全員がじっとみつめ、カラーとはいえ画面が緑一色なの

は許せるとしても、すさまじい音量なのである。こつちの頭が割れるかスピーカーが壊れるか窓が破れるかというボリューム。しかも、食事半ばにしてやってきたボーイは手をテレビのボリュームに伸すと、さらに音量を上げた。

道路の整備がすすみ、カラーテレビがベレンを熱狂させていた（マナウス産の日本のシャープ製品が目立った）。はじめて日本人がこの町にやってきたころには、日本へ手紙を出しても片道三ヵ月、返事が戻ってくるのは半年後だった。それは日本から地の果て、いや異なる惑星にでもやってきたような寂しさを味あわせるに十分な条件であったにちがいない。だがそれはもう遠い昔の話で、いまやベレンからはダイヤル即時で日本へ電話が通じるのだと聞けば、あの”冷凍食品” と思いあわせて、東京もアマゾンもかわりなくなったのかと思わせる。

テレビの音量に耐えられず、食事半ばにして外へ出て、未開と超近代、古さと新しさが混雑とした今のアマゾンはどう考えればいいのか（なにしろマナウスのナマズ事件も忘れられず）ふらふらと町を歩いてふと新聞スタンドをのぞいたら、『マンシエツテ』というブラジルを代表する週刊誌が”ジャリー・プロジェクト”の特集をしているのに気づいてさっそく四十九クルゼーロで求めて（三百四十円）開いてみる。ジャリー計画というのは、故・ハワード・ヒューズをしのぐといわれるアメリカの大財閥・ダニエル・ルドヴィヒ（八十二才）がベレン対岸、ジャリー川の両岸

に展開している一大開発計画である。準備に十四年、着工してから十二年すぎるが、今日までの投資額が七・五億ドル、すでにさらに同額の投資が決定しているといわれる（日本円で二千二百億円）。

ジャリーでは巨大なパルププラントが稼動を始めているが、そのプラントは日本のIHIが建設したもので、日本とのつながりもある。何年か前に、日本で巨大な浮き船の上にプラントを組みあげて、それをタグボートで曳いてはるばるアマゾンへ運んでいくというプランがニュースになり、その航海の写真が日本の新聞を飾ったことがあった。現地で組み上げるよりも日本で組み立てたものを現地へ運んで接岸するほうが、コストも低い、といった説明が記憶に残っている。

あの行き先がジャリーであった。

ジャリー計画は、植林二十万畝を目ざし百八十メガワットの発電所を建設し、低湿地四万八千畝に年間四十三万トンの米を生産しようという。ダニエル・ルドヴィヒの胸のうちにはエネルギーや食糧などの人類のこれからの課題を解決しようというものらしいが、土地の所有権などをめぐって賛否両論がブラジルでまきおこっているという。『マンシェツテ』誌は十八ページの特集の中で、ジャリーの所有面積三万七千平方キロは、オランダよりもベルギーよりもアルバニアよりも大きいと、地図で比較して見せている。世界百数十カ国のうち少なくとも三十九カ国はジャリーよ

り小さいのだそうである。BB街道の、大自然と無限の間を切り裂いでいくような旅はもうなくなつたと訊いたばかりだった。アマゾンのむき出しの野生は、このベレンにいる限りもう過去の話なのだと、いささか自分に言いきかせたばかりであった。

ところがひよつこりと、また気の遠くなる話が、町の新聞スタンドからとび出してきた。私はめまいがする。「アマゾンは大女のようなだ どころが股やら乳房やら」あの、いささか品のない歌が頭をかけめぐる。百万都市の、すぐ向う側でとつもないことが始まっているらしい。いったい、アマゾンとは何ぞや。

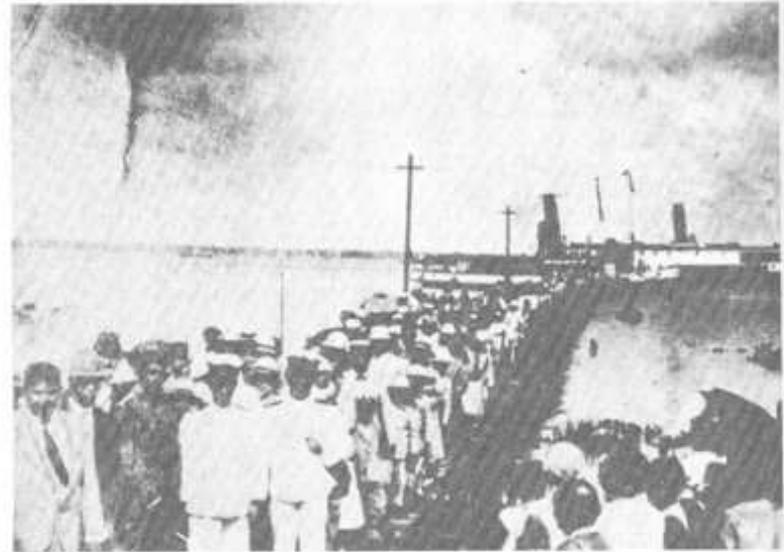
かつてBB街道をバスで走ったとき、私は自分の頭の中のモノサシがめちやくちやに壊される思いがした。それは快感だった。この国のこわさ、おそろしさ、いや、すばらしさはそこにあるにちがいない。五十年目の今、一万人近い日本人が（半分はすでにブラジル人として）このアマゾンで生きている。二大産業を築いてきたという。これは、たいへんなことなのではないか。

私はアマゾンに来て三日目にしてこの大女に呑みこまれている。日本人の努力、勤勉は定評のあるところだが（と きおり、いきすぎるといふことも含めて）アマゾンはそれだけでは生きていけるところではない。この大女を呑みこむ………気迫、覇気、それが必要だったのではないのか。

## 第2章

### 古の夢、そして未来に夢

トメアスーの胡椒黄金時代に何を学ぶのか



1929年最初の日本人移民ベレン上陸

#### オームのスープにピラニアの塩焼き

アマゾンの大女を呑みこむ大ナマズのような人、呑みこまんという覇気のある人に会うのはベレンでも決してむづかしくない。ベレンを出発するまえにあいさつに立ち寄った国際協力事業団ベレン支部の仁科雅夫支部長も、その一人であることを発見した。「百怪の大蛇が出たという話、あれは事実ですよ、私は雑誌で読んでいます。もう二十年も前ですよ」 ーでも百怪もあると動物は自重で身動きで

きなくなるといいますが。

「ですからスクリュージュなんです、水蛇。浮力があるから動ける」

―写其を見ましたか。

「ちゃんと。軍隊一個中隊が出て、機関銃で殲滅した、記念写真が出てました」

アマゾンというと、すぐワニだのへビだのという話になりますね、と、もろもろのアマゾン情報の偏りを話しあっているうちに、もう大蛇の話になっていた。そのうちオンサ（アマゾンの豹）の獲り方にまですすんでいく。

「獣道に果物の実る木があります。そこにはその果物を食べに鹿がくる。オンサは、その鹿をねらってやってくる。そこで猟師はその果物の木のそばの別の木の上によじのぼってオンサを待つんです。動物は匂いに敵感ですから人間臭いと決して姿を現わしません。そこで猟師は食糧とともに石油カンをもって上り、小便も大便もそのカンの中にして決して下へおとさないのです。そうやって何日も待つて、オンサが現われたら上から鉄砲で撃つ。いまはもう禁猟だし少なくなりました」

仁科さんは、ボリビアをはじめ南アメリカの移住地生活の長い人で、長いばかりでなくこの地がいたく性にあっている人といってよい。

トメアスは、ピメンタ・ド・レイノを生んだアマゾン最大の日本人移住地だが、入植三十年を期して第二トメアス―植民地の建設が決まり、一九六二年（昭和三十七年）

から道路造成や密林の伐採が始まった。仁科さんは、その最前線で指揮をとっていた。

アマゾンの開拓はいつでもどこでも、まず食糧の確保に悩ませられる。

「米を植えると、そこにオウムが飛んでくる。必ずつがいでくるのを鉄砲で撃つ。これは肉は硬いけれどもいい味だね。あのころは、オウムのスープにピラニアの塩焼き。移住者に言ったもんです、食いものないって言うな、銀座で食ったら二十万はとられる高級料理だぞって」

食べられるものは何でも食べた。いや、密林や川の旨いものは好んで食べた。

「原始林に道を開いて側溝をつくります。雨が少し降ると側溝に水が溜る。するともう、そこにタマタがいるんです」

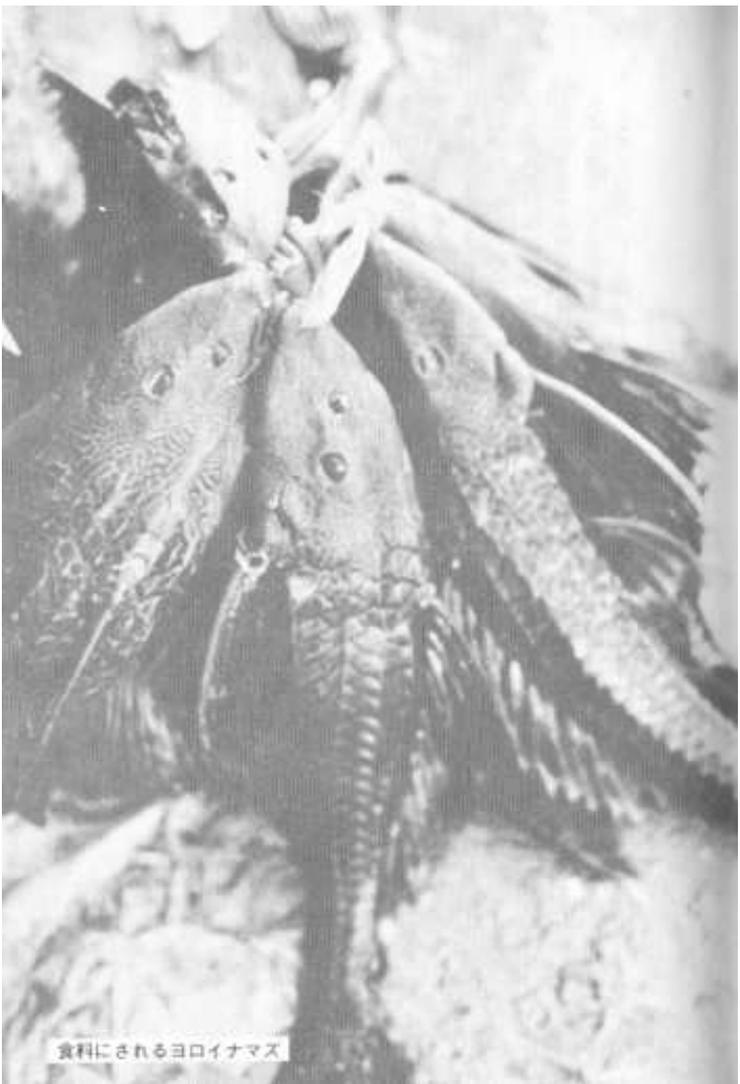
タマタはアマゾン特産のヨロイナマズの一種である。「タマタのミソ汁、それは鯉こくと同じです、いや、鯉こくどころじゃないなあ」

と仁科さんは、ベレンの中心部にあるオフィスの一室で舌なめずりを始める。

「アマゾンの蒲焼というのは、知ってますか。ナマズの一種でマパラという魚からつくるのですよ。ウナギと同じような味！」

仁科さんの奥さんも夫に負けぬ食通らしく、ピラムターバという魚でカマボコを作ると移住地の開拓者たちにわけていた。やがて、カマボコ屋のおばさん、で通るようにな

る。



「猿の汁」の話思い出して、仁科さん食べましたかと尋ねると、「ガリーバ、食べました」ガリーバというのは、アマゾンにはいるはずのないライオンのような唸り声を発するホエザルで、アマゾンに采たばかりの移住者はたいがいそのおそろしい声にふるえ上った経験をもっている。

「必ずつがいできて、一匹が撃たれると一匹は決して逃げないから、必ず二匹獲れます。大きさは小学生くらいある、食べる前に全身の毛を剃って洗うんだが、それは人間そっくりで見えられません。調理は労働者にやらせて食べるだけですがね。砂糖醤油で甘辛く煮つけするのです。煮えたからと労働者がセニョールと、腕を一本もってきた。

ギョツとして食べませんなあ、そのままもって来るな、バラしてもって来いと言ってるね」

昭和二十八年、日本から会計検査院の職員がはるばる第二トメアスーへ監査にやってきた。仁科さんは、食事していきませんかと、怪し気なものを並べる、調査員はいやけっこうと、そこそこに退散していった。

野菜不足は、フェジヨン（ブラジル独特の豆）でモヤシをつくって補った。シカもパツカ（体長七十センチほどのゲツ歯類）もクチア（通称アマゾンネズミ）も食べた。もつともこれらはアマゾンの開拓者のおきまりのメニューで仁科さんがゲデモノ食いなのではない。

憶せずして何でも食べたー少なくとも日本人が五十年目を迎えられる理由のひとつがこれである。

### ディスコまでオープンするトメアスー

仁科さんが猿やらオウムやらを食ったトメアスーは、いまではあまりにも知られたアマゾン最大の日本人移住地である。ベレンから直線で南へ百十五キロ、川や道路では二百七十キロである。一九二九年にベレンに上陸したアマゾン移住第一陣は九月二十二日に、このトメアスーにはいった。

第一次大戦開始までにトメアスーへ入植した日本人は三百五十二家族（二千百四名）だったが、悪性マラリアの猛

威などの前に犠牲者も多く七十八割にあたる二百七十六家族（千六百三名）がトメアスーを去っていった。しかし一九三三年（昭和八年）トメアスー植民地の経営母体・南米拓殖株式会社の社員・臼井牧之助氏がシンガポールから持ち出したピメンタ・ド・レイノがトメアスーに移植され育成されていた。戦時中のトメアスーは、敵国人の集団地としてブラジル官憲の支配下におかれる”捕虜時代”であった。

戦後すぐ、ピメンタ・ド・レイノの相場が高騰し、一九五三年（昭和二十八年）から一九五五年（昭和三十年）にかけては胡椒の相場は最高潮となって”黒ダイヤ黄金時代”がトメアスーにあらわれた。戦後組の移住は、その黄金時代の一九五三年から再開されている。胡椒はその後、相場の急落や病気による枯死被害という試練をうけながらも、アマゾン全域にわたってブラジル人のあいだにも幅広く栽培されるにいたっている。現在（一九七八年十二月）トメアスーの日系入植者は四百二十二戸、千九百九十八名である。

トメアスーへ行くにはベレンから船を利用するかテコテコと呼ばれる軽飛行機のタクシーに頼るしかなかった（トメアスー飛行場のオープンは一九五四年である）。一九七二年に私はテコテコでトメアスーを訪ねたのだが、その後、ベレンと結ぶ道路が開通していた。今では、ほとんどがバス利用だ。朝の四時、ベレン発のバスでトメアスーへ

向う。その走りっぷりは、「この道を飛ばしていたカミニヨン（トラツク）が穴に落ちて後輪をもぎとられた」という話のように、かのBB街道のよき時代を彷彿とさせるものだったが、やたらに穴の多いことは別として全線舗装がなされていた。途中、グアマ川をバルサ（渡し船）で渡る。バスは乗客を降して急な河岸をバルサへ向って下るが、そのとき、バスの後尾が河岸とバルサにわたしてある鉄板に衝突して轟音をあげる。「これが見ものでね」と、楽しみにしていた日本人がいたが、バスの後尾をみるとその“衝突”を予想してあらかじめ鉄のスキーのようなガードが装備してあった。

グアマ川で朝焼けを見て、午前十時すぎにトメアスーへ着く。七年前のトメアスーはアマゾン最大の日本人移住地とはいえ静かな人通りもまばらな村だった。ところが、町と道が通じたことがトメアスーを大きくかえていた。ホテルが二軒でき、さまざまな商店がメインストリートに並び、フォルクスワーゲンのカブト虫タクシーがお客を待っていた。いま、トメアスーは二〜三万人のブラジル人が住む町に成長していた。夜には、ボアッチ（女の子が客を待つ飲屋）もあかりをつける。二日後には、デイスコがオープンするのだともいう。道路ぎわにある住宅には午後七時〜午前一時のあいだ電灯がつく。電気が確保されたので各戸にカラーテレビがはいりはじめた。ベレンの放送がなんとかここまで届くのである。夕方、ホテルにはいってシャワーを浴びていたら、とたんに断水した。石けんまみれの

まま、眠るはめになったが、その日に限って電灯もつかなかった。ホテルでは自家発電をして下の食堂だけには電灯をつけた。

トメアスーでは、そこだけがこうこうと明かるかった。人間は蛾と同じで明かるいところに集まる。何十人というブラジル人の若者が夜更までギターを鳴らし歌い続けた。

七十八割の日本人が、トメアスーの凄惨さに耐えかねて脱耕していったこと、ここからすぐの墓地に悪性マラリアの犠牲者が多く眠っていることなど、彼らはまったく知らない。しかし今日の、この平和なトメアスーは多くの犠牲者を生んでできあがったものなのだ。部屋に電気がつかないので、ロウソクを十二本もつけてその熱で汗を流しながら私は五十年前を思う。

午前〇時、すべての電灯が消える。たちまち、もの音ひとつしない、鼻をつままれてもわからぬ夜の闇である。空には、満天の星。近眼ゆえに星が見えないのだと思いきんできた。が、いま私は天の川の鮮やかなうねりを見ている。南十字星をみる。

東京には星がないだけの話だった。

満天の星空に犬の鳴き声が響く。五十年前のトメアスーと、こればかりはかわりのない静けさである。マラリアで倒れた人々は、この星空の果てに何を想っただろうか。



## 食べものと娘不足のなかで

「あのころの日本の百姓は一汁一菜で、魚を食べられるのはせいぜい十日に一回。それでも生活できず娘を売りとばすという悲劇が続いていた」

大沼春雄さん、七十一才である。トメアスー文化協会の会長で、一九二九年（昭和四年）十二月に単独で人植。山形県尾花沢市宮沢村出身。仲人を引受けたカップル二百組という人情家で、艶っぽい話にかけても右に出る人はいない。「日本から百人出れば、百人が助かるという気持ちで出てきたんだ」田舎を出るときの荷物は柳行李ひとつ。中にはシャツ二枚、ズボン二本、上着一着、着物と浴衣、フ

ンドシ三枚、鎌と鉋と鋏、布団はブラジルは綿の国だからいくらでもあるといわれ綿をぬいてきた。あと毛皮が一枚と農業の本一冊。父から渡された所持金は二百円（女工の日給は五十〜七十銭だった）で、それも神戸で三分の二を使い果し、懐には六〜七十円しかなかった。これが、二十一歳の大沼青年の日本出航時の全財産であった。

さんとす丸はホンコン、シンガポール、ケープタウンをめぐるリオへ向った。移民船は船倉が食堂で、そのまわりにカイク棚のようなベッドがとりまいていた。食堂の天井は格子になっていて、ふだんは空が見える。

「食堂で手紙を書いていたらポタポタとしずくが落ちてきた。女が上で洗たくものを干しているんだ。あのころ船中では女性は着物でね、しかもパンツなんてはいていてないから下から見上げると………」

二〜三十人の青年がいた。いつしか一同上を見上げるのが楽しみの毎日。「それがホンコンあたりで女性集めてのパンツのつくり方の講習会が始まって楽しみも失せてな」移民船には常に暗いイメージがつきまとうが、そこには単独の青年たちの恐ろしいまでの楽天主も同居していた。

母親はアマゾンへ行くと言い出した息子を泣いて止めたが、止められぬと知って「向うへ行ったら食べものに苦勞するだろうが、食べものには文句を言うんじゃないよ」と、諭した。

船は最初、リオ・デ・ジャネイロに入港した。そこではじめてブラジルの食べものに出あう。

「マカロニが出た。指の太さくらいの空洞のマカロニにシヤルキ（干肉）のぶつ切りをいれて煮こんだものだったが、においが鼻について食えんかった」リオからは、ラプラタ丸に乗りかえてベレンへはいる。「植民地では、日本人は米がなくちやならんというので、あらゆる手段を使って米を集めていた。日本では白米一俵が十三円だったのにベレンでは七十円以上した。しかし、南拓は移住者のために”温室移民”といわれるほど金を使った」米は手にいれたが、肉は例の干肉（シヤルキ）であった。トメアスーではトラックをバス代りにしていたが、同乗の労働者の体から干肉の匂いが発散する。

「臭くてかなわなかったが、同じものを食うようになってから何ともなくなつたものだ」それまで半年はかかった。魚は、ピラルクーの塩干しが入手されていた。全長二尺に達する世界最大の淡水魚は、『オーパ！』以来、日本の釣人の憧れの魚となつたが、五十年前のアマゾンでは日本人が口にするこゝろのできた貴重なタンパク源であった。「ピラルクーはシヤケみたいで、日本人の口にあうんだ」

植民地で貴重なものは食糧とともに女性であつた。単独の移住者のみならず、南拓の青年社員たちにとつても若い娘は高嶺の花。「南拓の社員は馬に乗っていた。パリツとした乗馬ズボンに帽子を被り、そのいでたちで娘のいる家族を訪ねてあるいていたなあ」休日の “植民地まわり” を青年たちは競っていた。「単独のわれわれはボロ白転車を

でまわるんだが、たいてい前の奴が訪ねた接待のお茶がそのままになっていてね」競争は厳しかった。南拓の社員であれば、気にいった娘を嫁にもらうことも可能だったが、無一文に等しい単独青年ではそれもむずかしく、「なかによ、事後承諾でいっしょになった者もいたもんだ」娘としめしあわせて農場で働いているときに鏡を使つてピカピカと反射させて合図をして逢い引きするという光景もみられた。

若い女性が少なかったため、南拓は最初の二年は事故を心配してアルコールを禁じたほどであったという。

娘の家を訪ねるには手みやげが必要で、それはたいてい船で運ばれてくる果物だった。その果物を先に手に入れようと波止場には若者たちがいつも待ちかまえていた。

### 札束の吹雪が襲った日

大沼さんは入植一年を経ずして、一九三〇年九月、美津夫人と結婚する。山形県と同じ村の出身であり幼馴染であった。「いま娘が九人に息子が一人、孫は三十六く七人いてわけがわからん」。

昭和十五年ごろまで南拓の社員心得として農場やカカオの試験農場で帳簿つけや労働者の監督をおこなっていたが、おきまりの悪性マラリアにやられる。「三日間意識不明で、三日目に目が覚めてもちこたえたんだ」独立してからはパラ栗（カスタニア）、カカオを植える。ピメンタ・ド・

レイノに手をつけたのは遅いほうだったが、その黄金時代に収獲をあげ、莫大な利益を手にする。  
今も残る 〃大沼御殿〃（建坪百五十坪）はその利益（一説では当時の邦貨で五千万円、いまの五億円相当という）によって完成した。



太陽を求めて40mも伸びる巨木

一九五四年度だけでもトメアスーの組合員が手にした金は一億ドル以上（当時）で、その華々しい景気は、同年母国を訪問した大沼夫妻の”豪遊”にすべてが集約されている。

夫妻は末っ子の瞭君（二才）を連れトメアスー波止場からベレンへと旅立った。美津夫人はトメアスーに入植して

二十五年、はじめてこの日本村の外へ出たのだった。

日本へのパスポート等の手続きは、当時はサンパウロでしか行なえなかった。ベレンから親子三人は飛行機でサンパウロへ向う。サンパウロで夫妻は身づくりをする。指には妻一カラット、夫〇・三カラットのダイヤの指輪、体は長い毛皮のコートでくるみ、夫人はサンパウロの山野美容室でパーマをかける。「東京へ行ったら銀座の店へ行ってください」と、袋いっぱい化粧品を買わされる。

サンパウロの豪遊一カ月。

サンパウロ発の飛行機はボリビア、ペルーのいくつもの空港を経由してマイアミに着いた。アンデス山脈を越えるときには乗客は酸素マスクの使用を命ぜられたが、子ども用のものがなくて、長男が顔面蒼白になってしまったという、たいへんな空の旅であった。飛行機は小さかったが、一部の者たちだけに許された高価な旅であった。

マイアミからサンフランシスコへ向う機内で、夫は鳥の羽のついたボウシを被ったアメリカ婦人が口紅をつけて化粧をしているのを見る。そこで「おい、マネしてみろよ」と、妻をせかすのだが、アマゾンの労働で黒く日焼けした肌には白粉ものらなかった。「日本へ行つて二カ月したら顔の皮がむけてきれいな日本の女になったよなあ」大沼さんはきのうのことにように語り続ける。

羽田空港に着いたとき、彼は写真機二台と十六ミリの撮影機を手にしていた。「いちいち写真を撮るのが面倒で映画ならジーツと撮れるから」と、もっぱらムービーを回し続

けた。三越では、長い毛皮のコートのスソを自分で踏んずけ階段の下へ転がり落ちるといふ失敗はあったものの、日本はまだ敗戦から完全に立ち直ってはいない時代で、人々は、ブラジル帰りの大金持ちに目を見張る。カバンの中には、八百五十万円の札束がはいっていた。同郷出身者八十人から預ってきた金である。故郷へ帰ってこの金を”配達”しなければならぬ。とりあえず東京の銀行から山形の尾花沢の銀行へ送金し、故郷入りしてからその金を引き出そうとした。が、銀行マンから、「一日でも二日でもいいですからもう少し預けて下さい」と、頭を下げられる。

なにしろ公務員の初任給が一万五千円と少しの時代であるから、五百七十人分の給料を運んだ計算になる。

ようやく金をおろして友人の実家へ”配達”に出かけた。友人の兄が刈り入れた稲を干していた。が、不思議な男を見て押売りと思ったのか一時間も口をきかずに仕事の手を休めない。

「あんたの弟から金、預ってきたが」

「弟？ 生きてるか死んでるかわからん」

こんなやりとりのあと、ポンと十万か十五万の金を渡し、受け取りにハンコをもらうときさっさと帰ったが、相手はびっくりしててこまいになり、囲炉に湿った松をくべすぎて煙が出て涙をポロポロ流す。

故郷の村では、新聞を読んでいる人は四〜五軒にすぎず、ラジオも数台しかなかった。”ブラジルの大金持ち”

は、そこで学校にラジオを寄付、自ら使いきれぬほどの金を粹な時間にもふんだんに投資した。

夜更ーガス灯のほのかなあかりにいつそう広く見える大沼御殿の大広間で語り続ける彼の笑顔は、あの時代がつい昨日のことのようにかげりがない。「なあ、あれ以来おちめいっぽうよ」とひとしきりサクセス・ストーリーを語ったあとで彼はいつもこういつて人を笑わせる。

柳行李ひとつで破滅的な東北の村を出て二十五年、だれからも「こんな痩せた土地はない」といわれるアマゾンが突如、天文学的な金産みの大地となった。そういう時代があった。





## 胡椒景気の遺産

胡椒の景気は国際相場に左右される。一九五〇年代の黄金時代は、従采の胡椒産地であったインドネシアやマレー半島が第二次大戦後の荒廃から生産を急落させたためにくってきたものであった。

旧日本軍がアジアを疲弊させたその余波が遠く地球の裏のアマゾンの日本人に及んだとすれば、なんとも皮肉な歴史の巡りあわせではないだろうか。

二十世紀の初頭にアマゾンには空前のゴム景気にみまわれたのち、急速にゴムは衰退し、マナウスもベレンもさびれた。日本人が開発したピメンタ・ド・レイノは、そのさび

れたベレンを活気づかせ、トメアスー、ベレンを擁するパラ州（日本の面積の三・三倍）の租税収入のトップ・ランクにおどり出た。

この胡椒景気は国際相場の好転という“運”だけによるものだっただろうか。サンパウロ大学教授の斉藤広志さんは、『新しいブラジル』（サイマル出版会）の中でこう述べている。「ほとんどの史家は、ブラジルの開発史はサイクル（周期）の継起であるという。サイクルというのは、たとえばゴールドラッシュがにわかに興ってその全盛をきわめ、やがて衰微がやってくるというひとつのブームの周期のことである」そのサイクルにあらわれたものとして、十六世紀のパウ・ブラジル（豆科カエザルピニア属の樹木）、その後の砂糖キビ栽培、十八世紀の黄金ブーム、十九世紀のコーヒーをあげ、大きな経済サイクルの前後におこる副次的サイクルとして、綿、煙草、自然ゴムにふれている。

もつともこのサイクルは、一九三〇年のバルガス革命まで継起した、とされているので胡椒景気もそのひとつとは言及されていない。胡椒景気は国際相場の暴騰によってもたらされたため、とかくゴム景気と対比させられてしまう。また、たしかに経済サイクルのひとつ、とみることもできる。しかし、過去のサイクルのほとんどがヨーロッパ資本と黒人奴隷の導入によってすすめられたと同書で述べられていることを考えあわせれば、胡椒景気は異質のものであった。

アマゾンの日本人のために、日本政府や企業が巨大資本

をトメアスーに投下したわけでもないし、アフリカから奴隷を連れてくる、といったことが可能な時代でもなかった。

あまりにも有名な話だが、南拓社員であった臼井牧之助氏が福原八郎社長の意図をうけて、二十本の胡椒の苗をシंगाポールから持ち帰り、加藤友治、斉藤円治の両氏がこれをトメアスーでコツコツと育成、それが日本人移住者の間にじわじわと増えていったのである。故・加藤友治氏はのちに、「斉藤君と自分は胡椒の草分けかも知れない。しかしこの胡椒がトメアスーの主作物となったのは、野菜つくりで苦しい体験を積んでいた、精鋭な植民者のすぐれた伎倆と、不屈の開拓精神に基くものである。特に、自分と共に直営農場から苗をもってきた、同志斉藤君の研究と努力に負うところが多かった」と語っている。

大資本と大量の低廉な労働力を投入して莫大を利益をあげるとサツと引揚げるそういう古い時代の“植民”パターンはトメアスーにはみられなかった。

悪性マラリアに同志が倒れ脱耕者が続いても、なおふみ止まる人たちがいた。土地にしがみつこうとする日本の農民の気質をマイナス評価する者も多い。トメアスーのように、日本人だけの“村”をつくる性癖を嫌う者もある。しかし、トメアスーの日本人はその良しにつけ悪しきにつけ、きわめて日本的な気質でこの村を守ってきた。のちにトメアスー産業組合となる結束組織がその村の団結をより

強固にしたのである。

焼畑農業しか成り立たず、各自がある一定の密林をひらき火を放ちマンジョーカを植え数年後にはその土地を捨てて別の土地をひらく。そういうアマゾンの土地で、日本人が一カ所に定住してガンコなまでにその土地にしがみついた結果、胡椒景気がやってきたのである。

大沼さんの、あの豪華な母国訪問の旅は、トメアスーの日本人の、いわば個人個人の努力にもたらされた一時の報酬であったと考えるのが妥当であろう。

一九五〇年代半ばの胡椒景気が去ったあと、もう胡椒に手をつける者がいなくなったかといえ、それはまったくの反対で、一九五四年にほとんどトメアスーのみで栽培されていた胡椒の生産高は八百トンであったが、現在ではパラ州全体で年産二万八千トン（一九七六年）にもものぼるのである。実に三十五倍。胡椒景気は、単なるゴールドラッシュのようにみえたけれど、それはアマゾンにひとつの産業を根づかせるきっかけとして働いたのだった。現地ブラジル人の栽培がふえているのである。日本人が現地の日本人のことを書くと、ひいきにしすぎると言われるが、やはりここに「ガラランチード」の根拠があるう。

### 果てしなきピメンタ墓場から

ピメンタ・ド・レイノはアマゾンの日本人の名を高めた。アマゾンに光を与えた。ピメンタが登場するつい十年

ほど前までアマゾンはいいような暗さに包まれていた。「今世紀初めの十年間、それほど繁栄し、うわべは輝かしい未来に満ち溢れていると思われたアマゾン流域は（ゴム景気が去ったあと）、わずかの間に孤立した遅れた地域になってしまった。強い悲観論がこの地域を覆った」「ベレンやマナウスのような都会でさえも、この時期には衰退した。第二次世界大戦中、世界中からベレンを通る旅行者がやって来た時には、イギリスが所有していた町の発電設備は、市電を走らせるための出力も出ないほどの悪い状態にあった。また毎晩のように停電した。ベレンの大通りは穴だらけであり、未完成の下水道は、廃物処理能力を呆たすよりも蚊の繁殖場所として役立っていた」（C・ワグレイ著『アマゾンの町』）

このアマゾンの暗さに光をもたらしたものがピメンタだけだったというつもりはないが、明るさを添える大きな役割を担ったことは確かであるし、トメアスーの人々は、ピメンタによって生活の安定をようやく手にした。密林が次々に伐採され果てしないピメンタ園ができていった。

戦後のアマゾン移住は一九五三年に再開されトメアスーの人口も増え、一九六六年のトメアスー産業組合員は三百四名に達する。戦後移住者は、はじめ契約農として先輩日本人パトロンの農場で働きながら仕事を覚え、やがて独立というパターンをとった。

戦後組も、あのピメンタの黄金時代の再来を夢みていたにちがいない。が、道は必ずしも平坦ではなかった。

一九五九〜六〇年、ピメンタの根が腐る病害があらわれた。一九六七年には、葉から枯れはじめる奇病が襲った。「ピメンタを植えて五〜六年で病気がやってきました。枝がまっ黒になって、まるでなめていくように枯れていきました。私はトメアスーのマリキータ地区の近くで植えていたのですが、この地区から出たというのでその病気がいつしか“マリキータ病”と呼ばれるようになって、どうも腹が立って」

一九五五年（昭和三十年）にトメアスーに人植した石川道喜さん（六十一二才）は当時をこう語る。



病害に犯されたピメンタ園（1972年）

根を腐らせるのは地中にあるフザリウム菌、葉を枯らせるのはビールスだった。ピメンタは、アカプーという硬質

で百年たつても腐らないという木の支柱を立て、そこに蔓をはわせて栽培する（ピメンタ・ド・レイノは高さ三尺に伸びる蔓性常緑樹である）。七年前に私がトメアスーを訪ねたときは、まさにピメンタ病害が猛威をふるっていたころで、あちこちに全滅した胡椒園が散在していた。支柱に枯れた蔓がからまったその姿はまるで墓標のようで、それが何千本と続くさまに息をのんだものである。

そのころ専門家から聞かされた病害対策は「健康な汚染されていない苗木をつくる」「汚染地域から離れて栽培する」「カ所に多くつくらない」「苗の消毒を徹底する」といった、対症療法の域を出ていなかった。汚染地域を嫌って、奥地へ耕地を求めてトメアスーを出ていく人たちも多かった。ウィルス病は風に乗って伝染するのだといわれ、枯死したピメンタ園は焼却し尽さねば他へビールスをまき散らすし、焼却したあとも十数年はその土地は使えないともいわれていた。トメアスーの戦後で、最も苦しい時代であったようである。が、いま日本人開拓者たちは、その病害をすら克服しつつある。

「ピメンタはもともと自然界では半陰性の蔓科植物です。つまり日陰がいるのに、われわれの栽培法はすっかり密林を焼き払い、むき出しにした耕地に、直射日光が当るようにびっしりと植えていた。それが病害の原因です。インドのマラバ海岸やセイロンでは、生の立木に蔓をはわせて胡椒を栽培しているのです」

トメアスー産業組合の坂口常任理事（四十六才）のこの

説明は、ピメンタの病気をいかにして“攻撃”するかという姿勢ではなく、いかにしてピメンタを“自然の状態”で栽培するかというエコロジーに基いた農業の姿勢である。坂口さんは一九七四年にマレーシアへ出かけ、アマゾンのピメンタが二十三品種の胡椒のうち東南アジアと同じクツチング種であるという確認をおこなっている。

いまトメアスーは胡椒一本やりから脱皮しカカオ、マラクジャ（パッション・フルーツ）、パイヤ、メロンなどの多角化をすすめ、ピメンタもさまざまな作物との混成栽培が始まりつつある。熱帯には熱帯の栽培法のあることを、いま体得し始めていた。

トメアスーに入植して五十年、このアマゾンのほんとうの開拓はこれからはじまるのである。

### 愛すべきカボクロたち

アマゾンの日本人開拓者の耕地は広い。五十ヘクタールはごくふつうの規模だ。百ヘクタールといえば、ほぼ皇居と同じ広さである。「三千ヘクタールになりました」という人も珍しくなかった。三千ヘクタールという広さがどれほどのものなのかアマゾンで取材中ピンとこなかったのだが、日本へ帰ってから電卓を叩いてわかったのは、東京の千代田区、中央区、文京区をあわせた面積とほぼ同じで

あった。もつとも今から五十年前にはじめて日本人がアマゾンにやってきたころ開拓する予定だった耕地面積は百万ヘクタールで、ほぼ岐阜県ひとつ分であった。ともかく、日本では考えられないほど広大な農場を経営していくには、もちろん三ちゃん農業ではやっていけるものでなく、労働者を雇わなければならぬ。

労働者というのは、現地の人たちがカボクロなどと呼ぶ人たちで、初期のポルトガル人移民と黒人、あるいはインディオとの混血の子孫である。彼らの祖先たちはインディオの生活技術をとりいれ各地で自給自足の生活を続けてきた農民であるが、アマゾンの日本人がどういうニュアンスでカボクロという呼称を使うかはよくわからない。ときに「土人」という言葉も使われているし、それに抵抗ある人は「現地人」と言うようだ。

このカボクロはまた、アマゾンのジャングルの生活技術を知り尽している人たちで、この人たちの力がなかったら勤勉と努力の日本人といえども五十年間、アマゾンで生活して行くことはできなかつたろう。この人たちの楽天さと素朴さは、アマゾンの風土そのもので、日本からジャンボジェットでやって来たと話したところ、「それにはヘッジが吊れるのか」と尋ねたという話がある。ヘッジというのはハンモックのことで、アマゾンではこれをベッドの代りにしており、何日も航海する船も甲板に人々はヘッジを吊って旅をする。また、あるカボクロは、この世に太陽は二つあるというので、なぜだと尋ねると、「トメアスーを

出てカメラ（百キロほどの地点）へ行ったら、あそこにも太陽があった」という。日本は寒くて雪が降るといって、「では日本には太陽がないのか」と問い返し、日本は地球の反対側だといえ、  
「どうして地球から落ちないのか」とふしぎがる。

ただしこういった素朴さは彼らがアマゾンの奥地において教育の機会に恵まれなかったその結果にすぎない。「ワニの歯を月夜の晩に木にうちこみ三日間おいておくと絶対にへびにもサソリにも咬みつかれない」といった彼らの俗信はインディオからの伝承であろうが、狩猟の技術や薬になる草根木皮の知識は漢方薬も顔負けの豊かさである。



建築工事現場で（アルタミラ）

トメアスーの開拓時代、食糧に不足すると日本人はカボクロに銃と猟犬とを貸し与えた。彼らは密林にはいつて獣

を獲ってくる。そこでその獲物を日本人とカボクロで分配したものである。

猿を食べた仁科さんのあの「猿」も、そうして入手したものだ。ただ、カボクロたちは「よく働かないし忍び者である」という評価がある。その評価に対して河合治さん（アルタミール植民地）という人が、『パンアマゾンニア』（汎アマゾンニア日伯協会会報）の一三三号でこう述べていた。「カボクロが怠け者というのは文明人から見た評価であって、カボクロ達の未開人は決して自分が怠け者とは思っていない。彼らは都会人的義務意識も習慣も持ち合わせておらず、自分たちの「自然」な生活が維持できない時に補助的に働くのであり、不必要に自分の意志に反してまで働くことはないのである。彼らは自然人であり、怠け者の烙印は迷惑なことであろう」もちろん、彼らも文明的な日本人と接することによって「必要以上に」働くようになる。「じゅうぶん食べられて彼らなりに満足しているのに、時計を見ればそれがほしいために、それを買うために、いつそう多く働らかねばならなくなっていく―それが果して彼らにとって幸せなのだろうか」日本人の農園で働くカボクロを見てきたある日本人の発した問い、である。

その問いは、住宅ローンに追われ、新車やステレオの月賦のために働き続けて、いつしか生涯を終えるわれわれ日本人へ向けられているような気がしてはこないだろうか。

この愛すべき労働者たちも出身地によって性格が異なり、農園主としては彼らの特質を知ったうえで雇い入れる必要

があるという。カメタエンセー（エンセーとは〇〇出身の意味

）やアカラエンセーはおだやかな性格でよく仕事をす。後者は密林の樹木をノコギリで見事に製材する。

ブラガンサエンセーはポルトガル系が多く農場の主任向き。マラニョンエンセーとセアラエンセーは気性が荒くけんかっぱやいが人はよく、エネルギーをもつて仕事をする。

彼らの労賃は一日七十クルゼーロ（一九七九年七月現在・約六百円）であった。

### トメアスーのある家計簿

トメアスーもかわろうとしている。作物の多角化で生活の安定をはかるようになった。その農場経営はどういう内容なのだろうか。トメアスーに来て二十四年の石川道喜さんの家計簿を見せていただいた。石川さんは藤夫人との二人暮らしである。四人の子どものうち長男（三十八才）は百ヘクタールの土地を入手して別に農場をもっており、一人はベレンで銀行マンに、あとの二人は大学などの学生でトメアスーを離れている。

耕地はトメアスーの中心から離れているためランプの生活である。土地は五十ヘクタール。作物はピメンタ・ド・レイノが二千本、カカオが六千本、マラクジャ（パツシヨ

ンフルーツ）が九百本である。長男が独立しているために農場の規模は小さいほうだが、トメアスーの暮らしのおおまかな様子はつかめるだろう。石川さんはトメアスー産業組合の組合員であるため、売上げ高の三割は組合費として自動的に支払っている。労賃は月に千八百クルゼーロだが、一年に一カ月の有給休暇と、さらにもう一カ月分の労賃をボーナスとして支払っている。労働は一日八時間で週休二日制。労働者のひとりには、二十ヘクタールの耕地をもっていてマンジョーカとピメンタの栽培をしながら出稼ぎである。パトロンである日本人農園主と労働者の信頼関係がよい場合には、五年〜十年と働くことも珍しくなく、ブラジル人労働者はその農園でピメンタの栽培法を覚え独立、自らがパトロンに成長することも多い。

アマゾン全域にわたってブラジル人の手でもピメンタの栽培がおこなわれるようになったのはこういう雇用関係が寄与するところ大である。カボクロも生活を向上させつつあるとはこういうことである。

さて、石川さんの粗収入は年三十四万五千クルゼーロで日本円にすれば約三百万円である。

参考までに一九七九年七月のアマゾンの物価を日本円（二クルゼーロ＝八・四円）で記しておこう。

ガソリン一リットル八十六円、ハガキ切手代二十一円、上質紙（大学ノート）三百四十円、トメアスー〜ベレン間（二百七十キロ）のバス運賃五百九十円、トメアスーの日本食堂では定食が四百二十円〜五百五十円、ウドン・ソバ百七十円、

ラーメン二百十円であった。

#### トメアスーの石川道喜さんの収支

〔収入〕			
ビメント	2,000本	年産3トン	CR \$ 105,000
カカオ	6,000本	年産3トン	CR \$ 150,000
マラクジャ	900本	年産30トン	CR \$ 90,000
合 計			CR \$ 345,000
〔支出〕			
労働者賃金(5人)			CR \$ 120,000
肥料と農薬			CR \$ 80,000
子弟の教育費			CR \$ 30,000
交際費・クルマの税金等			CR \$ 24,000
夫婦2人の生活費			CR \$ 48,000
合 計			CR \$ 302,000

〔収入〕 - 〔支出〕 = CR \$ 43,000

これは家の修理費、耐久消費財の購入、機械類の修理、燃料費などに支出する。

1979年7月現在 1クルセイロ = 8.4円であった。

#### 夢ひらく"イモガソリン"

トメアスーの将来はどうなるのだろうか。トメアスーの精神的支柱として入植者を指導してきたアマゾン生活四十年の平賀練吉さん(七十七才)を訪ねた。

先回、平賀さんのお宅にお世話になった日、私はちょうど誕生日に当たっていた。そのことをふともらしたら夕食のテーブルに立派なバースデーケーキが用意されていた。夫人の手づくりの立派なケーキで東京でもお目にかかれないう豪華なものだった。恐縮するとともに感激したのだが、ここがアマゾンの奥深いことを知ってそのモダンさを不思議

議に思っていた。最近、夫人は故東宝社長小林富佐雄氏夫人の令姉にあたることを知った。平賀さんは東京帝大で林学を学んだあと農林省の官吏というエリートである。父上は大阪財閥の巨頭であった平賀敏氏であったことはよく知られているし、平賀夫妻のアマゾン行きの手紙もたびたび書かれたことなのでここでは触れない。

平賀夫妻は、トメアスーでも最も多く賞を与えられた方といってよいだろう。藍綬褒章、旭日中綬章、第五回吉川英治賞、夫人ではブラジル地理学会賞など、平賀家には数えきれぬ賞状と勲章の山。「ボクにはネコに小判でね」とおっしゃる。最近、ブラジル人の子どもが泥棒にはいつて勲章を盗み出し、バッチ代りに胸につけて遊んでいたのが発見されたが、平賀さんのこと、怒るに怒れなかつたろう。

そんなことよりも、平賀さんはトメアスーの未来のことで頭がいっぱいである。「五十年祭といっています、恥ずかしいんです。はじめは、百万ヘクタールを開拓するはずだったでしょ。ところが半世紀すぎたのにトメアスーで、まだ四万ヘクタールしかいじっていません。はじめの夢は、千家族連れてくるはずでした。しかし、いまトメアスーは約四百家族（日系人のみ）でしょ、まだまだこれからががんばらにやいかん。まだ夢があるんです、トメアスーを立派にすることです」

農業だけしていたのでは、町の大学で農業以外の分野を学んだ移住者の子弟は、もうトメアスーには戻ってこなく

なる。トメアスーを立派にすることとは、“農”だけでなく“商”“工”を育てなければならない。そうすれば、子弟の働くところが増えてトメアスーも発展できる。――これが平賀さんの夢なのである。が、その夢がいま実現しようとしているのである。マンジョーカ（タロイモ）を栽培しそのイモからアルコールを製造するプロジェクトがトメアスーで始まりつつあるという。

新エネルギーとして核燃料を開発しても石油（ガソリン）に代る液体燃料としては利用できない。ガソリンに代るエネルギーはアルコールしかない。そのアルコールをマンジョーカからつくろうという発想である。農産物はつくりすぎると価格が暴落する。しかしアルコールであれば無限の需要がある。こうなると、農業に大革命がおこることになってくる。

マンジョーカは世界の熱帯地方どこでも栽培されているイモでその生産高は世界で一億トンだ。ブラジルだけでも二千万トンにのぼる。しかも、マンジョーカの育たないところは何も育たないといわれるほど、どんなところでもよく育ち、植えつけてから半年〜一年で収穫でき、試験場段階では一ヘクタール八十トンも収穫できているという。古来からアマゾンの主食であることは周知の事実だ。

マンジョーカ農場とともにアルコール工場をつくれば、アルコール廃液なども肥料として土壤に還元できるので、土地が痩せることも防げる。では、アルコールを製造して

も代用ガソリンとしてすぐ利用できるのかという疑問がおこるのだが、ブラジルではアルコールを大増産中で、すでにガソリンにアルコールが混ぜられているし、フォルクスワーゲンもフィアットも百発アルコール車を発売、近く大統領専用車以下公用車はすべてアルコール車になる予定。アメリカでもアルコール混入車が走り出している。

日本でこの事業に積極的なのは元労相で南拓取締役でもあった千葉三郎氏（八十五才）である。千葉さんはすでにトメアスーに墓を建てた人である。



このイモガソリン構想、土地の広いアマゾンが開発拠点として最上の土地である。この話、夢物語でない証拠に今年の六月、日本に「国際マンジョーカ開発株式会社」が資

本金二億六千万円で発足した。社長は、やはりアマゾンに馴み深い高砂香料社長・甲西健次氏。松下電器、キッコーマン、協和醗酵、キリンビール、三井銀行など十九社が参加し、八月には現地法人も設立されたのである。製造したアルコールはブラジルに売却されゆくゆくは日本に輸出し、日本のエネルギー危機を救うことになるという大構想である。

この事業もアマゾンで五十年日本人が根を下ろして地盤を築いてきたおかげである。

## 第3章

### 絶望の運命をねじ曲げる

グアマ、カスタンニャールの20余年



ベレンの港

トイレにはクワが必要だった

トメアスーとベレンを結ぶ道路は、トメアスーを出てから約二時間あまりで川のほとりにでる。川幅二キロほどだろうか。橋がないので、バルサ（フェリー）で向う岸へ渡らねばならないが、そのフェリーからながめる両岸はびっしりとしたジャングルである。その密林と川は、ときとして朝焼けや夕日に美しい姿をみせる。だが、このグアマ川の少し下流に戦後じきに多くの日本人が人植し辛酸をなめる数年を過しているのである。ほとんどの日本人が脱耕していったにもかかわらず「グアマ植民地」にふみ止まり、

ピメンタをテコに成功している日本人会会長の横山久さん（五十八才）を訪ねた。

グアマの辛酸は、あまりにも有名な話だが、日本人会長の横山宅は二軒目のかなり立派な家を新築、リビングルームにはチーク材の飾り戸棚があつて世界中の銘酒三十本あまりが並んでいた。

来客があると、お好みの酒の栓をぬき、深夜まで語りあかすというしくみ。かつての辛酸時代からは想像もできぬ豊かさを物語っている。

グアマ入植は、独立営農米作移民として日本、ブラジル政府のとり決めのもと、一九五六年（昭和三十一年）の一次からはじまり五次まで続く。場所は、ベレンのすぐ南でアマゾン川に合流しているグアマ川の上流三十八<sup>キ</sup>。河岸に接する耕地で、一家族に与えられたのは二百<sup>ヘクタール</sup>×千<sup>ヘクタール</sup>。河岸沿いの短い辺が二百<sup>ヘクタール</sup>にあたる。日本での“募集要項”によれば、川沿いの半分はバルゼア（湿地帯）、川と反対側の半分はテラファイルメ（両期でも水のこない高台）であり、低地は水田用に整備され高台はピメンタ栽培などに向く、というふれこみであった。

管理は現地に事務所をひらいた“コンパニア”（農地植民改革院）がおこなった。横山さんは第二次として一九五六年十二月にグアマへはいった。荷物は衣類や昆布などを入れたドラムカン二つ、ミシン、ダンスをはじめリヤカー、自転車など。ドラムカンは、風呂として使えるからとそのころの移住者がよく持ってきたものである。十二月

十三日、ちょうど雨期のはじまりである。

夕方に現地へ着いた横山一家はあたりをみまわす。「南の国じゃどこでもバナナがあると聞いていたけど、どこもジャングルばかりでバナナなんてありはしないんです」「コンパニアでピメンタの試験栽培をしましたがね、そこにカゲロウが立つくらい暑いんですよ、労働者がバケツで水をかけてました、日本を出るときは涼しかったのにな」五才を頭に一才まで三人の子どもがいた。「着いてすぐ、子どもがごはん食べんというんですよ。ゴマより小さいブヨのような虫が猛烈にやってきて顔にまとわりつくからです。太陽の光線が強いから、それで眼が充血して目やにが出る、それに虫が群をなしてたかるんですよ。子どもたちは、虫がいる、虫がいると泣いていました」

半月後、ロツテ(耕地)割りがくじ引きでおこなわれた。三十一番地であった。タテ千<sup>足</sup>、ヨコ二百<sup>足</sup>のタンザク型の耕地が川沿いに続いているから、三十一番地は中心地から二百<sup>足</sup>×三十一<sup>足</sup>六・二キロ離れていることになる。密林の伐採はコンパニアがやってくれたが、山焼きは十七番<sup>足</sup>三十三番の耕地の“家長”たちが協力しておこなう。毎日、耕地までは六キロの道を歩いて通った。

雨期が始まっていた。どこも沼のようになり、せつかくもってきた自転卓もリヤカーも使えない。山焼きは雨期前におこなわねばならないのがアマゾンのきまりである。が、ここに着いたときがもう雨期だ。仕方なく、小さな枝だけ集めて焼いた。耕地には大木がゴロゴロ転ったまま

だったが、その大木のあいだに陸稲を植える。とても水田にはならない。耕地には、ヤシの葉でつくった住宅を建てた。六路×四路の広さである。家族も耕地へと引越した。トイレはない。「はじめは、クワをもって行き地面に穴を掘って終わったら埋めましたよ、犬と同じ。私はね、なるべく肥料になるように畑でしましたよ」

川の水をみていると、一日、二日と水量がふえてくるのに気づいた。毎日、雨が降る。昼の十二時から三時、夜中の〇時〜三時になると水位が上ってくる。アマゾン川の河口から百三十キロでベレン、そこから支流で三十八キロである。ーが、ここには大西洋の潮の干満がまともにやってくる。「上流からはどんどん水が流れこんでくる、下流からは潮が押し寄せてくる。その両方がぶつかって、そりやまるで川が上へとふくらむ感じがするのですよ」

三月、水は耕地にまで上り腰のあたりまで水に浸ることになった。

アマゾンには『三月の水（アグア・デ・マルソ）』という歌があるくらい、このころには水量がふえることを日本人は知らなかった。

### 神の恵みにより野菜は食べない

十二月に植えた陸稲は二月から収穫の時期にはいったが、一日に二回水が上っては引くことのくり返し。水は上流からベトベトの粘土を運んできてはそれを置いていく。

これが作物にかかり、水が引いて太陽に当たると重みで倒れるのである。

収穫にも道具がない。ブリキでベルトをつくり、それを右手の指に巻きつけて刃ものの代用として稲刈りをする。刈り取った稲は、耕地にゴロゴロ転っている大木の上に干しておくのだが、野ネズミに食われてしまうし、雨が降ると発芽を始めてしまうありさまだった。水がやってくるので、家は二階にしたが家の中で魚釣りである。トイレはドラムカンを埋めてつくってあったが水がくればプカプカと漂いはじめる。飲み水も、その同じ水をくみ上げねばならず、人間の排せつ物が漂っていると、それを向うへよけてから急いで水をくむのである。

カボクロは、木に上って水中に便を落すのだということも始めて知る。



グァマ川の朝

米づくりは赤字であった。耕地はおろか、川岸から二キロあたりまでが雨期には水浸しになるバルゼアでは、完全な堤防と水門と排水設備のない限り理想的な米づくりなどできるものではなかった。米作に失敗してからグアマの日本人はキャベツづくりを始めた。もつともキャベツを始めるまでにかんりの脱耕者はあった。なにしろ米をつくるのに、粳一俵が当時の金で四百ミル、それが米を収穫して売るときには一俵二百ミルにしかならなかった。

横山さんも、日本から持って来た家財の売り食いが続いた。ちようどそのころ、トメアスーはピメンタの黄金時代で、トメアスーの日本人がグアマ移住者の家財を買ったものだという。

さてキャベツは金になるといわれ、第一次入植者たちがつくり始め、二次以降の人たちもそれに習った。だが、ベレンの消費量はわずかでほとんど売れない。カボクロの言葉に、「われわれには神様の恵みがあるので、まだ“草”まで食べないでいられる」というのがあって、草とは野菜を指すのである。アマゾンの人々は、いまもそうだが野菜の摂取量がきわめて少ない。

野菜を売るためには、野菜を食べる習慣を教えることから始めなければならなかった。そこでベレンにいたかの猿を食べた仁科氏（当時海協連のスタッフ）は、ラジオを通じて「キャベツは美容食である」と訴えたほどであった。グアマの日本人はまた、ベレン市内のバチスタ・カンポやプラサ・ブラジルなどの広場へ出かけて直売をおこなった

が、市場から文句をつけられた割には売れなかった。

いちばん困ったのは、需要が限られているのに生産量がそれを上回わってしまうことで五トンのキャベツができれば二トンの需要にあわせて三トンを川へ流して破棄したという。

「私は船にキャベツを乗せてトメアスーへ売りに行ったもんですよ、五、六年は通いましたかねえ。売れました、でも儲かりませんでした、それでも捨てるよりましですから」

トメアスーの日本人も野菜を食べずパイアを漬物にしたりミソ汁に入れて食べるていどだったので顔色はドス黒かったという。野菜を欲していたトメアスーの日本人にとつて、グアマのキャベツは貴重品であつたにちがいない。

この間にもグアマからは脱耕者が続く。横山さんが、この水漬めキャベツ地獄からぬけ出すきっかけを得たのは、トメアスー通いであつた。キャベツはトメアスーの組合へおろしていたのだが、彼はそこでピメンタの力を見る。キャベツを売った金で、まず二十ヘクタールの耕地を高台に購入し千二百本のピメンタを植えた。奥さんはバルゼアに残ってキャベツをつくり、彼はカヌーに自転車を積んで耕地へ出かけ、週に一回自宅へ帰るといふ生活を続けた。わずか千二百本のピメンタを、毎年千二百本ずつ増やしていったのである。

はじめてグアマに着いた日、虫がいてごはんが食べられないと泣いた三才の息子は、いま十万本をこすピメンタを栽培している。二百キロの胡椒の収穫には、三百人の労働者を動員しても二カ月半かかるのだという。

「若い女の労働者はいつのまにか腹がふくれてくるし、そりや収穫期にはお祭りさわぎですよ」

「住まいも、いまははんとうの”高台”で水をおそれることもなくなった。」

「私はこの土地に愛着があつてね、離れられんです」

清子夫人（五十四才）も、ここがいちばんいい、と、日本を訪問したいとも思わないという。その土地に根をおろすことで成功の道を見つけた、好例であろう。

### アマゾンパイヤはいかが

一九五六年（昭和三十一年）の半ばすぎ、アマゾンのグアマ植民地への「入植募集案内」が、高知県須崎市にまわってきていた。「半分が雨期には湿地帯となり、半分は年中冠水しない高台なので永年作物および牧畜に向く」という土地の説明がついていた。須崎市役所で農林課長をしていた井上勝さん（六十八才）は、その移住手続きの担当で渡伯希望者の世話をしていたが、そのうち自分自身もアマゾンへ行きたいと思いはじめてしまう。

隣の郡からはパラグアイへ集団移住が出ていた。南米へ移住した人が高知県には多い。井上さんは、グアマへ行つ

て、もしよいところであれば、アマゾンに団体移民をいれ  
“高知村”をつくってやろうという大志を抱く。当時四十  
三才、第二の人生としてはふさわしい野望であった。昭和  
二十七年に“米作り日本一”（朝日新聞主催）に選ばれた  
大川義則氏、元高知県会議員の林徴氏らもこの壮大な夢に  
賛同して日本を出発したのだ。第二次グアマ入植者として  
翌年一月八日にベレンに上陸。ベレンからは小さな船で半  
日でグアマに着いた。が、横山さんから先発隊と同じく、す  
べてがうまくいかなかった。田植えというのに、水が六十  
センチもあり、手さぐりで苗を植えねばならず三畝という川の  
干満差の激しさに直面する。

自治会の世話をしていた賢夫人（六十四才）は、常備薬  
購入のために集めた自治合費をカンに入れて炊事場の地中  
に埋めておいたが、水が上ってきてそのカンが流れ出して  
しまうという体験もする。“第二次”の人のなかには、子  
どもを蛇に咬まれて失うという事件もあった。一日にスル  
ククー（猛毒蛇）五匹を退治した日もある。

米作のほか、ゴムやカカオ、バナナなども植えウルクー  
（香辛料をとる植物）も試み、キャベツにも奮闘する。「石  
の上にも三年といえます。三年間、けんめいにやってすべ  
て失敗。キャベツをつくり資金のできた者順に脱耕しよう  
と申しあわせ、私も一九六〇年（昭和三十五年）にグアマ  
を出ましたよ」その後、バルカレーナ（いま日伯合弁のア  
ルミ開発事業が始まるうとしている）に一年、そこで無一  
文同然となり、ベレンからわずか七十三キロのカスタ

ニヤールへ移った。

カスタニヤールは、大正末に北アメリカ在住の日本人が「人種差別のない安住の地」を求めて移住し「南米企業組合」をつくるなどいろいろと日本人とのつながりのある土地だったが、第一次大戦直後はわずかの日本人しか残っていなかった。それが胡椒の黄金時代の到来とともに、この地で胡椒園を開く日本人が増え、また、アマゾン上流の移住地から脱耕してきた人々がこの地に自然に集まり、現在では日本人によって発展した地ともいわれている。カスタニヤール郡の人口は約五万人（面積千二十平方キロ）である（一九七四年）。

ピメンタ・ド・レイノで潤ったトメアスーに次ぐ産地カスタニヤールにも病害が襲う。町に近い胡椒園は六、七年前から全滅に近く、何か別の作物はないかと手さぐりの日々が始まった。

そんなとき、ハワイからパイアの種子が届いた。カスタニヤールには日本の天理教の布教所があるのだが、その種子はその宗教ルートによって運ばれ、現地の信徒により試験栽培に成功した。

カスタニヤールは、例のベレン・ブラジリア街道に面しておりすでに陸路サンパウロと直結していた。三千三百キロ近く離れているとはいえ、ここはサンパウロ経済圏に屈いていたのである。

パイア（ハワイ・マモンと呼んでいる）はサンパウロ

へ送られ好評を博した。

「いままでは週に五十台の大型トラックがサンパウロへ出ていますよ、植付本数も七十五万本、アマゾニカ産業組合（日系人によって組織され組合員三十三人）だけでも一九七九年上半期に三・三億円の売上げになりました」

ハワイマモンだけでなく、カスタニヤールはメロンの産地でもありアマゾンのフルーツ・カントリーとして知られるようになった。

かつてのグアマ時代に、脱耕を計画していたとき高知県から井上さんにこんな公文書が届いた。

「不隠な動きをしているようだが移民としての襟度を保ち海協連の指示に従え」夫人の知人からは、「奥さまが蛇に呑まれてお亡りになられたそうで心よりお悔やみ申し上げます」という見舞状が届いた。夫妻そろって母国を訪問したときには「幽霊じゃあるまいか」といわれた。

すべては過去の笑い話になった。

ピメンタ病害の時代にこの地からの脱耕者も多かったがふみ止まること二十年、運はめぐってきたのである。

## 第4章

### アマゾン横断道路の黎明

アルタミーラにひとつの命が消えても



近日中に全線舗装されホコリも消える

いま、ここで西部劇が

「月から見える人工建築物は万里の長城とトランスアマゾンカだけだそうです。ブラジル人は、これは二十世紀の人類最後で最大の冒険だと言っています」

一九七二年の十月にベレンを訪ねた私は、ある日本人からこんな話を訊かされた。トランスアマゾンカ（アマゾン横断道路）とは、人跡未踏の密林を貫いて大西洋と太平洋を結ぶ全長五千八百キロ（鹿児島からインドにまで達する距離）という開発道路で、一九七〇年に連邦政府が国家統合計画の一環として建設に着手したものである。「なにし

る最前線へ行くと大きなブルドーザーが道端に捨ててあるんですから。故障しても修理する時間もなければ費用ももつたいない、奥地だから新しいブルをもつていくほうがはやいということらしい」

この話を耳にして、私はベレンから朝鮮戦争に使っていたという古い双発機DC-3に乗ってトランスアマゾニカの前線基地の町、アルタミーラへ向った。ベレンとアルタミーラは直線で四百六十キロ。町はもうもうたる赤土のホコリに包まれていた。ピンクやミドリのパンキに塗られた板張りや石づくりの家が並び、私は映画でしか見たことのない西部劇の町を思い出した。

子どもたちは全員とっていいほど胸に「トランスアマゾニカ」という文字を染めぬいたおそろいのTシャツを着ていた。「つい一カ月前（一九七二年九月末）にマラニョン州のエストレイトとパラ州のイタイツバ間千二百四十キロが開通してそのイナウグラソン（開通式典）があったばかり。メジシ大統領がアルタミーラにやってきたので歓迎のため、この地区の子どもたちにTシャツを配ったのです」という語だった。どこに行ってもトランスアマゾニカが歩いているし、ベレンの新聞スタンドに並ぶ新聞も雑誌もトランスアマゾニカの特集をくりかえし、ラジオのどこの局も「トランスアマゾニカ！」と叫び続けていた。

この工事、わずか二年あまりで千二百キロを開通させてしまった。幅百メートルで未舗装、緑の密林をバリバリとひき裂いた筋が一本、永遠に続くような道である。建設工事費は

当初一キロあたり二万五千ドルの予定が第一期工事だけでも四万一千六百七十ドルもかかったといわれる。

アマゾン地方四百八十七万平方キロのうち原始林におおわれた七十九・七九割の開発に、ブラジルの未来を託した壮大な夢である。道路を通したあとは、十〜二十キロおきにつくられたアグロビラ（農業開拓村）に開拓者を送りこみ、一家族に百坪（五百坪×二百坪）の地権を与える。住居と六カ月分の法定最低拾料も支払い開拓の援助をするという計画である。貸付金などは五年後からの二十年返却で、ほとんど無料に等しい好条件である。ただし、密株の伐採、作物の植付けをおこなわないと入植者の資格が取り消される。

アルタミーラの小さな空港には、尾翼に「サムライ」とローマ字で書かれたYSー11がひっきりなしに到着し、着のみ着のままのようなブラジル人家族が続々と降りていた。町のある建物にはその人々が長い行列をつくり、やがてバスで出発していった。

その建物はインクラ（国内農地改革企画院）で、テングロンハットのブラジル人たちは、東北ブラジルなどからアマゾン開拓を目指してやって来た人たちであった。

アルタミーラのインクラの職員二千百人が受け入れた開拓者は、アルタミーラ〜イタイトーバ間ですでに千七百家族であった。さらに年内に二千四百家族、このプロジェクト全体では十年で百万家族を入植の予定と、インクラの広報担当者は話してくれた。

この道路の開通は、その沿線の農業開拓という目的とともに、水路か航空路でしか結ばれていない奥地の町を陸路結びつけることになり、ブラジル中央との経済交流をすすめるというねらいも大きかった。ペルー、ボリビア国内部分の道路と結びつけば、アマゾンの生産物を太平洋岸へ運送できるようになり輸出、外貨獲得にも大いに貢献するといふのである。

道路の開通は、ベレン〜ブラジリア街道の例のようにたとえ未舗装でもその役割りは大きく、カスタニャールのフルーツに町が潤うような効果ははかり知れない。

アルタミーラが西部劇の町であるならば、トランスアマゾニカは、北米の“大陸横断鉄道”の建設に等しい。鉄道の時代から自動車の時代への推移が、鉄路と道路という違いを生んだだけのことと、北米に一世紀遅れはしたが、いまこの地方に新時代が訪れようという期待が満ちていた。

### ごちそうは大ネズミ

トランスアマゾニカはその後、ブラジル国内部分はほとんど開通、かつては陸の孤島であったマナウスも陸路がひらかれていた。

アルタミーラその後を見るため、私はベレン空港からイロンデーレーという大型の双発機で出発した。七年前のDC-3は、塔乗前に体重計に乗ることを命ぜられ、乗客の総重量で乗客数を決めていた。しかし、ターバという国内

航空会社のこの飛行機は、国際線並みの快適さである。

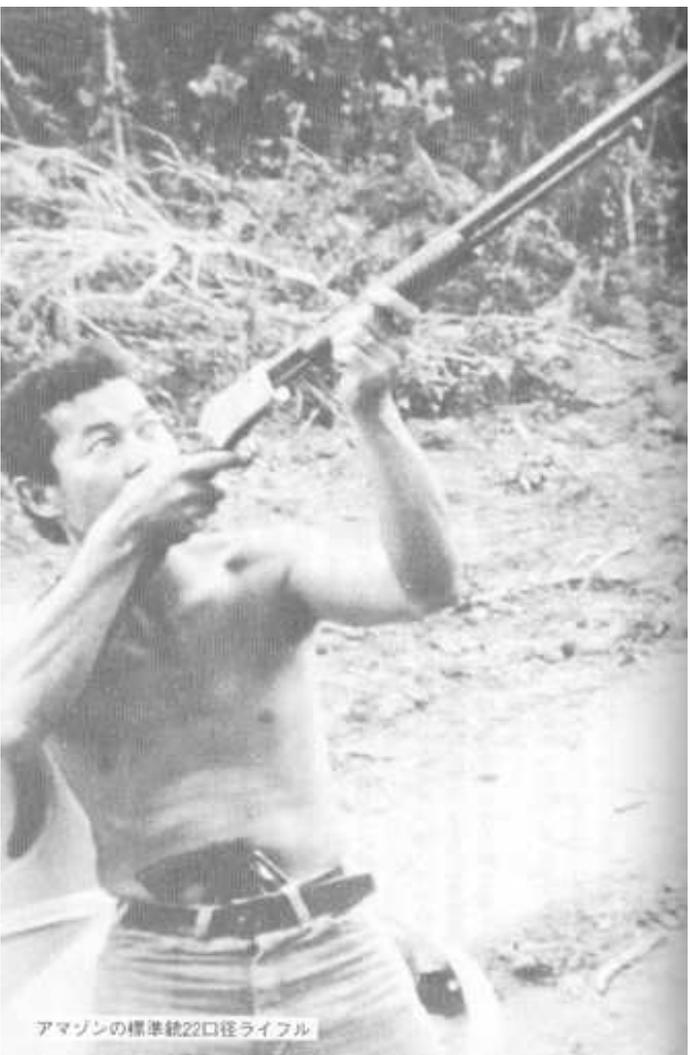
アルタミーラに着いて、私は空港からクルマで十分ほどの北川勲さん（六十四才）の農場を訪ねた。前回、私は北川宅に一週間ほど寄せていただいている。北川さんは、まだトランスアマゾンカの計画もないころにアルタミーラに入植した。

「ベレン近郊のサイタイザベル（グアマとカスタニヤールの間でベレンより四十六キロ）で野菜と胡椒を作っていたが、ピメンタはお金ははいるけど肥料がものすごくかかって自転車操業、そのうちよくなるだろうと思ったけれどくたびれて……どこか、肥沃な土地がないかと探していたらシングレー河の流域、とくにアルタミーラがいいということを知りました」

北川さんは、一九五五年（昭和三十年）、いわゆる“辻移民”でアマゾンへやって来た。そこで、辻小太郎氏にアルタミーラ行きの件を相談すると「それはいい、たいへんいいことだ。アルタミーラの郡長がぜひ日本人に来てほしいと言っている」と、すすめられた。一九六二年（昭和三十七年）十二月にここに来たときは、まだ日本人はひとりもいなかった。空路はできていたが、人口は四千人で、道路はアマゾン本流へ通ずるシングレー河の港町、ビットリアへの五十六キロとイタイツーバ方面への十キロしかない陸の孤島。住民は、魚を獲ったり、自然ゴムやカスタニアというパラ栗の採集などで生活をしていた。

町の肉屋には、その日に猟師が獲ってきた動物の肉が並

べられていた。ただし、土地はテラロシアという南アメリカ有数の肥沃な土地である。北川さんは、現在の場所、町から一・五キロの地点に五十ヘクタールの土地をいまの価格で六万三千元ほどで購入する。



「黒海付近の黒い土、黄河の黄色い土、そしてブラジルの赤い土といわれるくらい肥沃で肥料なしでもコーヒーが二十年つくれるといわれる土壌です。百姓やっていると土は見てわかるもんです。ここは将采のびると直感しました。これはピメンタを植えれば肥料なしで金が儲けられる、のん気に暮らせてアマゾン移民として申し分ない」

と、さっそく翌年ピメンタを植えたが想像以上に乾燥がひどい。四千本のピメンタは、収穫期まえに葉がダラリと

しおれ青い実が落ちた。わずかな収穫を重ねて五年目、乾燥でピメンタが枯れるのを防ぐためトラックで五十台分のおがくずをピメンタ園に敷きつめ、六トンの収穫を得た。しかし、ここにもピメンタの病害は「やってきた」。生活は、トマト、ちしや、キュウリ、ピーマン、ナス、ニンジンなどの野菜で支え、養鶏も始めた。



やがて、トランスアマゾンカが始まり、当初は通る予定ではなかったアルタミエラがその計画にはいり、人口は三倍、四倍と増え前線基地として活気を帯びてきた（現在二万人）。北川農場はその食糧供給基地として重宝がられた。その北川さんを助けてきた青年がいる。元インクラの職員でこの地に日本人の移住地をつくろうとがんばってきた梶原ネルソンさん（三十五才）という二世の青年である。

二人は、アルタミール近郊に入植を希望する日本人の指導者として相談相手としてよく世話を焼いてきた。と、同時にアルタミールの先駆者として “セニョール・キタガワ” の名を知らぬものはいず、私が最初にアルタミールを訪ねることになったときも、ベレンで「空港に着いたらタクシーに “キタガワ” とひとこと言えば連れていってくれる」といわれ、その通りであった。はじめて北川さんのお宅へ着いて、突然の訪問にもかかわらず迎え入れてくれた北川さんはちょうど昼食中だった。私も食事をすすめられたが “怪し気” な肉が皿に山盛りになっていて、いぶかる私に「ま、食べなさい」と促され食後それがパッカというアマゾンの大ネズミと知って驚いたものである。大ネズミといっても体長七十センチの大きなウサギのようなゲツ歯類でアマゾンでは上等な肉であることを後に知る。

### 密林壁の谷間は映画『十戒』と同じになる

北川さんのお宅で、取材という名の居候を数日続けた七年前のある日、ジープに乗った二人の日本人青年がやってきた。佐藤久男（三十一才）、秀男（二十九才、いずれも当時）という兄弟で、全身赤い土ボコリにまみれ、疲れきった表情に眼だけがギラギラしている。

「マラバの関所でひっかかって、インクラの書類がないのはいれないといわれました。僕たちだけ先にジープで来ました。あとから荷物を積んだカミニオン（トラック）

がくるんです、それで、カミニヨンもおそらく足止めをくうからともかくアルタミーラで書類をつくってもらわなくてはと、二人で交代で徹夜で走ってきたんです」

佐藤兄弟は、アルタミーラからイタイツーバ方面に九十キロの地点に入植することが決まり、引越しの途中でトブルにあったのだということがわかった。約五百キロの完成したばかりのトランスアマゾニカを徹夜で走ってきたという。これからまた五百キロ引き返さなければならぬ。

私は、そのトランスアマゾニカを見たくてジープの運転を手伝うことを申し入れ、喜んで了解してもらった。インクラの事務所で書類ができあがったのが午後四時、われわれ三人はアルタミーラを出発した。ここから次の町マラバまでの五百<sup>キ</sup>の間には町はひとつもない。

「おそろしい道です。雨が降ってヌルヌルの道でしょ、大きな坂があつて滑るんです、ゆっくり坂を下つてくると急カーブになっている、その両側が崖になつてゐるんです」

二人は興奮して語った。

開通してまだ二十余日である。交通量も少ないので路面が固まつていないのだ。アルタミーラの出口で「ポルトアレグレ四千八百キロ」と記された道路標識を見る。まっ赤な地肌をみせた道路が地平線まで続く。その百<sup>ミ</sup>幅の道路の両側は、どこまでも密林である。高さ五十<sup>ミ</sup>はあるその密林の谷間を走るのである。その光景に、私は少年時代に見た『十戒』という映画の一シーンを思い出す。モーゼが紅海を渡る場面である。海が二つに割れて、その海と海の

壁の下にあらわれた海底をモーゼにひきいられた人々が歩いていく。――道路をはさんだ密林は押しよせようとする海の壁のように見える、その光景が走っても走っても十時間、二十時間と続くのである。日が暮れると暗闇の中にジープのライトだけが命を支えてくれるような気がする。道端の繁みの中に光る目玉が二つこちらをのぞいている。獣がいるのだ。ライトのあかりに、道路を横ぎる黒い帯があらわれる。「サウバという蟻ですよ」と、教えられる。兄弟は一刻も早く行かなければと焦りの色が濃い。すでに昨日あたりに七十二才になる母と、それぞれの妻、それに二才と半才の子どもの五人はベレンから飛行機でアルタミラに着き、九十キロ地点の住居に入っているはずなのである。布団も食糧もないから、ジャングルの奥でどんな思いをしているかと思うと、一刻の猶予もないという。

夜の九時、密林の中にカボクロのヤシぶきの小屋が一軒あらわれた。ランプのあかりがみえ、その人の気配がうれしい。すでにアルタミラを出て五時間、最初にみる人家である。そこで頼みこんで食事をとる。米に黒い肉片が乗っていたが、あとであれば猿だったかもしれないといわれた。ハンモックを借りて仮眠をするが、屋根はあっても壁はなく、すぐ十時先はジャングルである。その中から、しきりに石をこすりあわせるような動物の鳴声が響いてきて、私はうつらうつらするばかりである。

午前二時、兄弟に出発を促される。ここに来る途中に飛行場があった。と、いつても、道路わきをさらに百時ほど

整地しただけの末舗装の滑走路で、セスナ機が一機止まっていた。マラバの町までチャーターしようとしたが、あたりには小屋ひとつなく、大声で呼んでも人つ子ひとり出てこなかった。ただ、あの猛獣のような声をだすガリーバ（吠え猿）の低音の大合唱がジャングル中に渦巻くばかり。こうなつてはジープで、できるだけ早く行くしかない。

夜のトランスアマゾニカをふたたたび走り出す。兄の久男さんが言う。「アルタミーラに下見に来てテーラロシアを見たんです。百姓をするなら、この「土」で百姓をしたいと思います、それが百姓としての本望だと思つたんです」

### ジャングルの大引越し

ガリーバの鳴き声やんで鳥の声が聞こえはじめ、太陽が上る。三人で運転を交代し、休んでいる者が眠る。シンダー河のほとりに出て、鉄の板を浮べただけのようなバルサ（フェリー）で二キロほどの対岸へわたると、じきにマラバの町だった。マラバからさらに百キロ東へトランスアマゾニカを走るとシンダー河の支流、アラグアイア川に出る。そこでふたたびバルサで渡るとアラグアチンス村である。

兄弟のジープがひっかかった関所はそこにある。アラグアチンスはマラニョン州とゴイアス州の境にある。連邦制をとっているブラジルでは州境に必ず関所があり不審者の

出入りがチェックされる。

兄弟のジープよりも遅れて走っていた、引越したトラックは、すでに三目近く過ぎていたので、そこで足止めをくつているはずだった。アマゾンの太陽が真上にのぼり、だれもが汗に赤土のホコリをにじませていた。アラグアイアのバルサに乗って、ようやく兄弟も安堵の表情で私がどうしてブラジルへ来たのかなどを尋ねてくれる。対岸へ着く。トラックがいない。兄弟は関所の係官に訊いてあるいている。「そんなカミニオン（トラック）は来なかった」とくり返すばかりである。兄弟の顔から血の気が引いた。ジープにとび乗り走り出す。トラックが消えた。――道はいうまでもないが一本である。つまり、ここまで到着していないということになる。すでに三目が過ぎていく。「カミニオン（トラック）ごと盗まれたんだ」佐藤一家はベレン近郊のコツケイロで野菜とピメンタづくりをしていていちおうの生活の安定を得ていた。が、どうしてもテーラロシアで農業をしないと、売れる家財は二足三文で売り払い、必要なものだけトラックに積んで出てきたのだった。ブラジルへやってきたのは一九五七年（昭和三十二年）で、父はすでにブラジルの土となっている。来伯時、兄は十六才、弟・十四才だったから、兄弟は自分たちの時代をトランスアマゾニカに障けたのだった。が、いま、最初の試練が始まった。

トラックには、すべての農耕機具が積んであったし、それなしにアマゾンの奥地で生活することは不可能に近い。

いったい、どこまでトラックを追えばいいのか、奥地で待つ家族は……。

二人は口論を始めている。

「だから値切ってあんな安いカミニオンを頼まなければよかつたんだ」

「それでいいって言ったのは兄さんじゃないか」

モーゼの『十戒』の道を十キロ。「いた！」くだんのトラックが密林際に傾いていた。右側の車輪が三本ともパンクし、落ちていた丸太でつつかい棒をして止まっている。トラックの下から運転手がのそのそと出てくる。パンクしてしまったので、二日間メシも食わずに寝て待っていたというのである。スペアタイヤも持ってこなかったらしい。兄弟は、ホツとしたものの運転手に怒りはじめた。怒っても仕方ない。スペアタイヤを買ってこなければならぬ。

ふたたびジープで十キロの道をアラグアチンスへ戻り、ここにはタイヤはないのでバルサで対岸へ渡り、さらに百キロのマラバの町へ戻る。マラバがいちばん近い町なのである。だが、マラバにも余分なタイヤはなかった。兄弟はやむなく、新たにトラックをチャーターするしかなかった。

だが、ほとんどの運転手は、アルタミーラまで行ったことはなくそんなこわい道は走りたくない、と断った。ようやく、夕方になって勇氣のある黒人系の若い運転手が引受けてくれたので、荷物移しかえの労働者を数人雇って、彼のトラックとともに故障トラックの場所へ戻る。すでに午

後七時である。暗闇の密林の中での荷物移しかえ作業である。ジープのエンジンをかけっぱなしにし、そのライトのあかりを照明にする。だれもが空腹であった。

大型トラックに山のようになった家財道具と農耕機具が、トラックごと傾いている。ひとつずつ倒壊しないよう移し終えたのは夜中の十一時を過ぎていた。疲労と空腹で、新たなトラックとジープがアラグアチンスの村に着いたのは深夜の十二時。川べりで兄弟は素裸かになると川へとびこんで体を洗った。さわやかな沐浴であった。

川べりの宿屋で食事をとり、三時間ほど眠り、日の出とともに出発。その日の夜、われわれはアルタミーラへ戻った。

二日あまりで千二百キロ、兄弟にとっては四日で千八百キロ走ったことになる。買って一週間というジープは、すでに走行距離一万キロ近くを指していた。

### 狩猟一時間ダニとり一時間

「佐藤さんのお兄さんが亡くなりました」

あれから二年後だったろうか、風の使りに久男さんの死が伝わってきた。ジープに乗せていたライフルが暴発し、腎臓に当たりベレンまで運ばれたが手当てのかいなく他界されたというのである。「僕は百姓だ。百姓なら一生に一度あのテーラロシアという土で百姓をしたい」と言った彼の言葉が鮮やかに浮かんで消えなかった。

その後、佐藤一家はどうしたのか。そのことが知りたいためにも私は今回再びアルタミエラを訪ねたのである。北川さんのお宅に一泊した翌日、北川宅にもう一人のお客さんがあった。及川定一さん（三十五才）とって、ベレンのアマゾニア病院（アマゾニア日伯援護協会が運営し、ベレンでは二指にはいる規模）の医師である。ベレンから、日系人の生活する開拓地の巡回診療にやって来たのである。



佐藤一家。右が故久男さん（1972年）

彼自身、十一才のとき両親とともにアマゾンへやってきた移民の子である。その子どもが、ブラジル人医師としてときおり日本人移住地をまわる。アマゾン五十年のひとつの成果であろう。及川先生は、これから百<sup>キ</sup>地点へ行くという。あの、佐藤兄弟が入植したあたりである。すでに二十家族近くの日本人が開拓にはいつているという。

九十九キロ地点（入植者は道路沿いに入植しているため、アルタミーラからの距離が住所代りになる）から久家義堂さん（五十二才）が小型トラックで迎えに来た。私も、及川先生に同行する。

七年前とはうってかわって、道路の両側はきれいに開墾され、どこまでも砂糖キビ畑（カンナ・デ・アスカ）が続いていた。道路の舗装は完了していないが（二年後に全線舗装される）交通も頻繁で、いまでは、サンタレンまでバスで行くこともできるまでになった。

巡回診療のため一軒一軒入植者を訪ねるが、健康状態はよく、むしろ、わざわざベレンから日系医師が来てくれたという精神的な安心感の効果が大きいようだった。及川先生もそのことをわきまえているらしく、一人一人にやさしい言葉をかけ、話相手になっている。

夜は、久家さんのお宅に泊めていただく。壁に、ドクロが飾ってある。猿のものだった。この日、日中は雨が降ったりやんだりでしのぎやすかったが、夜にはいると、エアコンをかけたように涼しくなり、布団がなければいられないほどである。久家さんが記録をつけた気温表を見せてもらうと、午前六時・十六度、午後二時・三十五・五度、午後七時・二十六度、午後十時・二十一度、とある。「アマゾン是一日のうちに四季がくる」とはこのことで、奥地ほど気温差は大きい。

この気温差があるからこそ、日本人は五十年アマゾンに

いられたと何度も耳にした。赤道直下でありながら密林がエアコンの役を果す。ただし、日中の暑さは強い。「ベレンはボイラーの中にいるようだが、ここは地獄の炎のそばにいるみたいですよ。七月九日は四十一度ありました。仕事してますと、汗がズボンのすそからポタンポタンと落ちていきます。一回に一罇の水を、一日十本は飲みます、家内でも五罇は飲むなあ、おい」夫人のカズさん（五十二才）もうなずいている。それでもここが好きだという。翌朝六時に起きると、あたりには乳白色の霧が流れていてそのすがすがしさは軽井沢のような高原を思わせる。久家さんは、女四人男一人の子どもたちがいるが、二人をのぞいてベレンなどに出て勉強中である。日本なら定年近い年齢だが、「まだまだ夢がありますからな、カカオもガラナも植えたいし」と語り続けた。家の中においても照り返しでまっ黒に日焼けすると言いながらワニの手を孫の手代りに背中を搔いている壮年である。

この日、ふたたび及川先生と入植者を尋ねる。アグロビラに着き、佐藤兄弟の住んでいた家を見つけたが、すでにそこには別の日系人が住んでいた。ポルトガル語しか話さない二世の奥さんは、佐藤兄弟を知らないと言った。

この家で、現われぬ兄弟を待った母と妻たちは荷物に見つけ出した釣り針でミミズをエサに魚を獲り、飢えをしのいでいた。夜は寒くて親子、おばあちゃんの五人はふるえながら抱きあって三日を過ごしたのだった。当時、あのおばあちゃんは、「どうして息子たちは好きこのんでこんな

ところへ来ると言ったのか　― 反対したのに」　と、こぼした。

私は佐藤兄弟とアルタミーラへ帰ってきた翌日に、このアグロビラを訪ねたのだが、前日までの疲れをよそに二人は家の前で地面に穴を掘っていた。いったい何をしているのかわからなかった。「水がないのです。で、井戸を掘っているのですが」　アマゾンでは、なにもかも自分でしなければならぬ。

「食べものがなくなつて。お金があつても売っているところがないですよ、ここは」仕方ないので鉄砲持って犬を連れてマツト（密林）へ獲物を探しに行きました。でも、銃を撃つと犬がこわがって反対のほうへ走っていつてしまふ。一時間歩いて戻つてくると、パンツの中にまではいたダニをとるのに二時間はかかるんです」

アマゾンを知らない私は、驚いてアルタミーラへ引き返し、北川さんに、野菜や肉を町で買って持って行ってあげたいと話したのだが、北川さんは、それをしてはいけない、ここはアマゾンなのだから、と止めた。そのとき私は、私にとって単なる冒険心を満足させるにすぎないアマゾンがどういふところかを知った。アマゾンの開拓とは何なのかを知らされたものである。

あれから七年、佐藤兄弟の入植したアグロビラでは、立派なサッカー場でブラジル人の若者たちがボールを追いかけていた。収穫した砂糖キビを処理する工場もできた、工場からは一目に三万トンのアルコールが生産されていた。

アマゾンの変化は早い。「アマゾンは、将来世界の中心になるんじゃないか。電力は水力発電で無尽蔵だし、世界の食糧庫になるかもしれないよ」アルタミーラの先駆者、北川さんのつぶやきである。

佐藤一家はその後、再びベレン近郊へ戻ったという。今回は会うことができなかった。一家は去ったけれど、多くの日本人がフロンティアとしての夢をこの地に賭けていた。

## 第5章 歓喜の山にいま、進む熱情

東京農大生の手で蘇えるモンテアレグレ



モンテアレグレ農協事務所

スカイラブが落ちてきた

巡回診療を続ける及川医師に同行して翌日アルタミーラからサンタレンへ向う。双発旅客機イロンデーレーの機内

で、私と及川さんは一個の物体について話しあう。

「これ、やはりホンモノだと信じることにしましょう」

「町の人はみんな信じていたでしょ、アマゾンにはみんなのん気だね、そこがアマゾンのいいところだね」

及川さんは私の掌の上から二枚角ほどのその物体をつまみあげる。これは、ついさっきアルタミーラで手にいれたばかりのスカイラブの破片”である。色は茶色、硬さといひ感触といいプラスチックのようだが砕かれたような断面、一部に焼け焦げの跡など総合するとあるいはと信じたくなる。臭いはない。

世界を騒がせた宇宙実験室スカイラブの落下危険地域のひとつにブラジル・アマゾンのアクレ州があげられていた。リアマゾンにスカイラブ”のニュースはアマゾンの人々を興奮させた。ベレンでは落下日の二日前、市内中心部の道路の穴に”カイウ・アキ・スカイラビ”という看板が立てられた。「スカイラブここに落下」の意味である。ブラジル人はジョークがうまいと感心していたら、アルタミーラに落ちたという。その話でもちきりなのである。

アルタミーラに住む税務局書記官A・ウシヨアという人の庭に赤い火の玉が落下、夫人が手をのばしたところ火傷をしたという。これはたいへんと、弁護士のドクター・シンバオ氏が破片を持って飛行機でベレンへ飛び、新聞やテレビで報道されたのである。

もうアルタミーラには問題の物体はないのかと思いきや「砕いて何人かで分けたいらしい」という噂があり、やがて

福田さんという日本人が持っている人を探し出し出してくれた。その男、アンジエロ・ジヨゼさん（五十四才）を訪ねるとカバンから大事にとり出した。軍に働いている知人からわけてもらったという。交渉の結果、日本製三色ボールペン（二百五十円）との交換に成功し、いま私の掌の上にあるという次第だ。別の日本人によれば、これは床に塗るワックスが固ったものだと言張していたがアルタミーラの人々は”スカイラビ”（ブラジル語の発音ではこうなる）と信じて疑わず、それを信じることで彼らは楽しい数日が過ごせるのである。



アルタミーラにもカラーテレビの放送が始まっていた。と、いつても番組はすべてベレンから送られてくるビデオ

テープが流されるだけで、しばしば何の断りもなしに放送は休止される。それでも「今日はテレビ局の調子がわるいらしい」ですんでいる。一九七九年七月、アルタミーラ初の新聞『ジオルナル・デ・アルタミーラ』（月一回発行）が創刊されたが、その最終面には奥地でインヂオの矢に胸を射られたブラジル人の写真が、矢が突き刺ったまま掲載されていた。

社会のあらゆる管理化がすすんで、テレビは番組表どうり一秒の狂いなく放送され、朝の通勤電車が魔法のように一分半おきに運行されている日本からやってきたばかりの者には、このアマゾンの町の「不現実性」ほど精神を安堵させるものはない。われわれの想像の領域の外で頻発する事件にはとまどうが、それがアマゾンというものなのにちがいない。日本では、大学を出て就職すれば、もうそれで人生が見えてしまう。かの『青年よ大志を抱け』という呼びかけは、抽象の世界のものと化し、一九八〇年代も、九〇年代も暗い見通しばかりで、日本人の人生の頭の上にはすれすれに天井が下ってきている思いがする。しかし、アマゾンに存在する楽天さたるや、頭の上に天井どころか、青空が大宇宙にまでぬけているようにさえみえる。アマゾンの楽天さには、もちろん発展途上ということがあるろう、教育の問題もあるろう、だが、それが克服されてなおここには人々を楽天的にさせる条件がある。文明と非文明というはざまを越えた何ものかがここにある。

私は”スカイラビ”の破片ひとつに、そのアマゾンをう

つして持ち帰った。日本でそれを知人に見せても、もちろんだれも信じなかった。

邦字新聞も「アメリカ大陸に唯一スカイラブの破片が落ちたところとしてアルタミーラを観光地にしようという案もでている」と報じていると話しても、笑うだけであった。「アマゾンのはのん気だから」と、アマゾンの日本人も呆れ果てた表情をみせたものだが、反面、彼ら自身そののん気さが気にいっているのである。その楽天さは、アマゾンの秘めた可能性からくるもので、無尽蔵の資源と土地がある、あとは自分たちの腕ひとつで未来が拓けると信じていることができるためにちがいない。

### 一カ月に一人しか“他人”に会えない土地

「スカイラブの破片がここには落ちず無事インド洋のほうへ落下したというニュースが伝わったら、サンタレンじやお祝いの花火があがりましたよ」

アルタミーラのみならず、アマゾン中流の人口十六万人という中都市サンタレンでも底ぬけののん気さ、楽天さはかわらない。

スカイラブにはかりかかわってはいられない。サンタレンに午後着いて、及川さんと私は夜八時の船でモンテアレグレへと向う。モンテアレグレは、サンタレンより少し下流にあたる対岸の町である。距離にして百数十キロだが、モンテアレグレの空港が使用不能なので船で行くしかな

い。

対岸といっても海のようなアマゾン河である。しかも無数の島があつて、どこが本流やら支流やらわからない。ベレンとトメアスを結んでいる船ですから、途中で故障して再び走り始めたらいつのままにかもと来たほうへ戻つてい、ということがあつた。素人には、アマゾン河の水面を見るだけでは、どちらに向つて流れているのかもわからない。“海流”を見ることのできないのと同じである。そういう流れに、むちゃくちゃな数の島がある。しかし、全長三十路ほどの二階建ての木造船の船長は、もちろんレーダーも使わず肉眼だけでまっ暗な水面を見つめて船を操つていく。

船長は、「長年の経験よ」と胸を張っていたが、水面に怪しい影があるといきなり強力なサーチライトをつけて確認している。大きな流木がこわい。



アマゾン河を上下する船

アマゾン河が海のように、その水量にもかかわらず流れがゆるやかなのは、地形がどこまで行ってもまっ平らなためであることはすでに述べた。が、そのまっ平らなアマゾンで、河岸まで、「山」が迫っているところがある。モンテアレグレである。この地名は「歓びの山」という意味で、十六世紀にアマゾン河を探険したヨーロッパ人たちが、あまりにも単調なアマゾンにこの地を見つけて命名したと伝えられる。

船は午前一時にモンテアレグレに着いてしまう。お客は、甲板に思い思いにつるしたハンモックに眠ったまま船内で夜明けを待つのである。

港は坂道の下にあり、町は坂道の上へと伸びている。石畳の道を高度差百ほど上ると台地に出る。下にモンテアレグレの町とヤシぶきの民家が点在し、その先に青い川と緑の島（湿地帯）とがいくつも折り重なるようにして地平線まで続いていた。

トメアスーの石川さんも言っていたが「アマゾンは広い広いというけれど、日本より狭い」という言葉をあちこちで耳にした。まっ平らなアマゾンでは、山の上から土地をながめることができず、自力で密林を伐採した空間だけしか見渡すことができない。飛行機に乗らない限り「アマゾンは日本より狭い」ところがモンテアレグレだけは違う。ここは、日本人の生理にあう。そのためだけではないのだが、この地の日本人の歴史は古い。トメアスーの長老・平賀練吉さんや、押切他男さん（六十七才）らが最初に入植

したのがこのモンテアレグレであった。



平賀さんがモンテアレグレに入ったのは一九三二年(昭和六年)で大阪YMCAの青年たちで組織したアマゾン開拓青年団の副団長という資格であった。そのころ、モンテアレグレにはインディオが採集したゴムの樹液を持って、ロウソク、マツチ、火薬などと物々交換にやっけてきていた。そういう人口千人の辺境であった。町から二十六キロ北上した密林の開拓を始めたが、自分たち以外の人間を見るのは月に一人という淋しいところで、見知らぬ人でも発見するとなつかしく「さあ、いらっしやいと歓迎してすぐ仲良くなります。日本にいと友達も蹴とばして生きていかねばならなかったが、こういうところなら人々と仲良く暮ら

せる理想の土地がつかれると思ったものです」と、平賀さんは語っている。だが四十七人の青年たちは、めったに人とも会わず遊ぶところもないこの土地でノイローゼになるものも出て町へ出ようと言ひ出す。

夕方、行水をしていると「おい、おい！」と呼ぶ声がする。誰かお客かと思えば、木の上のカエルの鳴声だ。畑で働いていると、「ベンチビー！」と鳴く青い鳥の声が「しつかりせい、しつかりせい」と聞こえたという。人恋しさのせいであつたかもしれない。

結局、この青年団は団長排斥問題などがあつた末に一九三二年（昭和七年）半ばに解散した。

平賀さんは、一九三九年（昭和十四年）にトメアスーへ移るが、それまで二百頭の牛を飼育して成功していた。トメアスーで失敗したら、モンテアレグレへ戻って牧畜をするつもりであつたという。

### 六十頭の馬が行進する結婚式

アマゾン開拓青年団の団員のうち、現在も残っているのは三名だけである。その一人、上野浩爾さん（六十八才）は、現在のモンテアレグレの長老格である。「団が解散したのは、三十才くらいの団員たちがいて、成功を焦ったため」という。上野さんが残る決意をしたのは、まだ二十代前半の三人の同志がマラリアで死亡しこの地の土になつていて、だれかが守らねばならないという理由からであつ

た。また、モンテアレグレに来て五年目にブラジル人女性と結婚したこともあった。

最初の五年間は平賀さんの三百六十ヘクタールの耕地で牛の飼育やカカオ、綿の栽培をし、その後、隣接するスペイン系の植民地でタバコ栽培を手がけた。

郡政府から七十五畝の耕地の仮地権を無償で得て、五畝ほどひらくことから始めた。かつて、YMCAの団員たちが淋しさを嘆いた土地だったが、スペイン系の耕地にとびこんだおかげで、そののルフエスタリに出ることができた。ルフエスタリは娯楽の少ないアマゾンでは、どこでもみられる土曜の晩のダンスパーティーで、夜九〜十時から明け方まで老若男女が踊りあかす。

「二〜二十人の若者が集まってサンバもタンゴもワルツも踊ります。好きなひとがいると」ルフエスタがあるから行こう」と、誘う。そうすれば堂々とそのひとと抱きあつていられるということですよ」

上野さんには好きな女性がいた。スペイン人だった。家は三〜四キロ離れていたが、洗たくをしてくれたり、飼っていた小犬を洗ってくれたりした。

二年間交際した。ポルトゲス(ブラジル語)もナモラ(恋愛関係)することで上達した。結婚前のブラジル娘は処女を尊重する。カトリックの影響だが、上野さんと彼女も結婚まで肉体関係はなかったから、フェスタで朝まで抱きあつて踊ることが最上の幸福の時間であつた。「東の空が白んでくると、ああ、惜いなあ」と、思えば、また次の週

末が楽しみになる。が、やがて上野さんはマラリアとなつて五く六百キロ離れたビラアマゾニア（後述）の病院に一カ月半入院する。

高熱と食欲不振の無気力のなかで、百姓はひとりではできない、内助の功が必要だとさとり、退院後にプロポーズして婚約。まだ食べていくのがようやくよかったが、相手の両親は日本人であることに信用してくれた。当時、アマゾンには、トメアスーやビラアマゾニアなど何カ所かの日本資本がはいつていたし、モンテアレグレには南拓（南米拓植株）の事業所もできていた。ここにはじめてトラックを持つてきたのも南拓で、日本人と言えば、アマゾンで本気になって尽してくれる人々として尊敬の対象であった。

結婚式の朝四時、新郎・新婦は証人（カピトン・ペレラ）の先導で一頭の馬に相乗りで町へと向つた。あとには、結婚式に出席する親類縁者が、やはり相乗りの馬で続く。その数六十騎。町まで距離は十二キロ、二時間の晴れの道である。

町のイグレージャ（教会）に着き、新婦はエンシヨバウ（花嫁衣裳）に、新郎は背広に着替えて神父の前へ出る。金の指輪が交替され、教会の鐘が”歓びの山”に響きわたる。挙式後、カフェー（コーヒー）やお菓子で一休みし、再び六十頭の馬に乗った人々は、新郎・新婦とともに村へと戻る。この帰り途、独得の習慣がある。

花嫁は町を出ると自分のレンソ（ハンカチ）を馬に乗っ

た独身者に手渡す。渡された若者は「オレがもらった！」と馬を走らせる。と、他の独身者が馬にムチ打って迫いける。ハンカチを持った若者の馬が追い越されたらハンカチは渡さなければならぬ。こうしてハンカチレースがくり返され、最後に手にした者が披露宴の用意されている花嫁の家へ駆けこむのである。そこでは、親類の人たちが、鶏、七面鳥、牛、豚などの山の山のような料理を準備している（平賀さんはお祝いに牛を一頭贈った）。そこで、ハンカチレースのアンカーは、ハンカチと交換にゴルフ（フオーク）に刺したロースト・チキンを受けとり、いま来た道を帰り、花嫁・花婿にこれを贈るのである。さて、南ブラジル産のワインもあけられ、祝宴は夜まで続き、やがてアコーディオン、トランペット、ギター、タイコ、歌手などからなる楽団が到着し、ダンスパーティーの始まりである。たくさんの石油ランプのあかりの中でダンスは明け方まで続く。

あれから四十三年、三才年下のイザベール夫人との間にできた七人の子どもも立派に成長、いま、上野さんは三千ヘクタールの“領地”を持つにいたった。アマゾンに根をおろす、とは上野さんのような人を指すのにちがいない。

日本にいたらサラリーマンで終わっていたでしょう

モンテアレグレに”戦後組リがやってきたのは一九五三年（昭和二十八年）からで、百二十九家族に達した。

熊本出身の斉藤博さん（五十八才）は、金物商を営んでいたが、終戦直後の六十五番という所得税攻勢にいや気がさし、税金のないアマゾンへ行こうと、一族九名とともにやってきた。

衣類、什器、自転車、大工道具、伐採用ノコギリ、脱穀器、精米機、製材機、石油エンジンに補修用部品まで含め十二〜三個の荷物を携えていた。

戦前の人たちと違って戦後組はかなりの“物量”でアマゾンにやって来ている。オート三輪を持ってきた人もいれば、風呂桶持参者までいたという。アマゾンでは何でも役に立つ。戦前は、手製の木製車輪つきの二輪車を運搬に使ったが、戦後組のリヤカーは労働の軽減に役立った。

もつとも、原始林に倒木があればリヤカーも役立たず荷物は人力に頼らねばならない。食料もふだんは町で仕入れた米、塩、砂糖にピラルクー（巨大な淡水魚）の干したもののくらいしかなかったのは戦前も戦後もかわらない。

斉藤さんは現在一万本の胡椒を栽培し牛も五十頭を飼っている。上野さんは、すでに六百頭の牧場主である。だが、モンテアレグレは、ベレンやサンパウロへ通じる道路がなく、生産物は船で出荷するしか方法がない。この交通の不便さから土地が肥沃であるにもかかわらず、戦後組も次々に脱耕していった。現在残っているのは二十九戸のみである。

このモンテアレグレにも一九七〇年代にはいつてから新しい波がまきおこった。東京農大の拓殖学科卒業生数名

が、農場経営者としての教育を受けたのち、この地に移住してきたのである。

すでに一九五七年（昭和三十二年）、モンテアレグレの先駆者のひとり、石黒彙吉さん（六十二才）らによって設立された、モンテアレグレ農協が活動していたが、この組合を農大卒の若者たちが育ててきた。ここは、町の人口が一人にすぎず、ベレンやマナウスのように近郊野菜では農場は成り立たない。付加価値の高い商品を計画生産していかないとならなかった。幸い、モンテアレグレの植民地は、インクラ（農地改革企画院）が指定した連邦植民地である。そこで、一九七六年に組合を改変しブラジル農地法に定められたシーラ（インクラと直接太いパイプで結ばれた特別組合）として、ブラジル人もうけいれて新発足したのである。

一九七七年から、毎年四〜五百万クルゼーロ（大ざっぱに見積って年五千万円ほど）の助成金をうけて倉庫、本館建物の増改築、サンタレンの中継倉庫、百トンの船の購入など”流通の整備”がすすめられている。ピメンタのみならずカカオ、綿、ゴム、ミールヨ（トウモロコシ）、フェジョン豆などの中心作物の開発も始動した。

七十六年に四十一名にすぎなかった組合員も一九七九年末には二百名になる予定である。このうち、日本人は約十五割にすぎないが、七名の理事全員が日本人である。

モンテアレグレはいま、日本人を中心として発展への道を歩み始めていた。アマゾン北岸道路開発とともに幹線道

路の整備もすすんでいる。陸の孤島の時代も、終ろうとしているのである。

また、ここには鉱泉があつて。パラ州は直営の保養地に育てるプロジェクトをすすめている。モンテアレグレが真の「歓びの山」となる日は遠くあるまい。

一九七〇年に入植した農大卒の一人加藤和明さん(三十五才)は組合員の専務理事だが、すでに七千本のピメンタ、九千羽の鶏、二十頭の牛を持つ農場主である。九年前にやってきたとき、自己資金はゼロであつた。横須賀生まれの彼は父も兄も日産自動車の追浜工場勤務。

「ボクは成績は中くらいだったし、あまり技量がないから日本にいたら、きつと父や兄と同じくふつうのサラリーマンで終わっていたらいいほうだったでしょうね。でも、アマゾンへ来て間違いはなかった。日本と比べてアマゾンは十年も二十年も遅れている部分もある。しかし、ここは頭を働かせれば可能性を最大限に発揮できる。自分の手足を動かせば、いつも「主役」でいることができる」

組合事務所で、会議に迫られるあい間に語ってくれた三十五才の「青年」は燃えていた。

市内にダイヤル式の電話が通じたのが一九七六年、テレビは一九七九年六月からサンタレンの放送が見えるようになった。

モンテアレグレ滞在中、しばしば停電があつた。だが、ここには大きな夢があつた。

## 第6章

### 大プランテーションの終焉

フォードゴム園とサンタレンの戦後史



サンタレン～クイアバ街道の起点

なぜ息子たちは医者になったか

「三年前、牧畜経営を学ぶために十九年ぶりに日本へ行き  
二年半過ぎしてきた。だが、同世代の人たちは解決策のな  
い、将来性のないことばかり話していた。サラリーマン  
は、自分の家を持つことが人生の目的であると言った。土  
地が狭いからと嘆いていた。狭いところに閉じこもってブ  
ラジルにでも行きたいと言いながらその勇気もないよう  
だ」

モンテアレグレを離れるとき、組合幹部の高谷利夫さん

(三十二才) はこう言った。腕にデジタル時計を巻いた石井要くん(二十六才)は、一九七九年最初のアマゾン移民だが、東京農大に在学中、ブラジル中をまわりモンテアレグレの組合に魅かれて移住してきた青年である。「ここは常にやらねばならないことがある。来年はこうしよう、その次はと人生が永遠に続いている、日本にはない緊張感がある」と語った。アマゾンは無限の可能性があるためにつつ走ってしまう、そこに落とし穴がある、とアマゾンのこわさを教えてくれたのは斉藤博さんだったが、いまのモンテアレグレはそのこわさをふまえて動き始めていたように思えた。

モンテアレグレ発午後八時。来たときよりも小さい船だ。吹きさらしの甲板につるしたハンモックに横になりながら、私はモンテアレグレの人々の表情を思い浮かべる。それにしてもモンテアレグレと外の世界を結びつける唯一の足がこの船というにしてはかなりきつい。幅五<sup>メートル</sup>、長さ二十<sup>メートル</sup>に満たないこの船に百人以上が乗っていて、しかも全員がヘッジ(ハンモック)をつつている。いたるところヘッジで一人分の「幅」は三十<sup>センチ</sup>ほどだろうか。つるすときには人間は乗っていないからいいが、そこに百人が乗るとどうなるか。私の顔から十五<sup>センチ</sup>のところブラジル人のおばさんの顔があり、横やら隣が動くたびにこちらの目を覚まされることがくり返され、それでもなんともなくなつた明け方、サンタレンに着く。

もつともヘッジは、平面に並べるわけではなく、高く

つつたり低くつつたりできるので空間の有効利用価値は高く、朝になれば乗客は自分のヘッジをはずして持ち去るしくみだから船長としても設備投資が少なくてすむ。また、人々はいたるところ寝台をつくることができるのでジャングルを何日も歩くときにも、船旅にも、自宅でもこのポーターブル・ベッドは手離せない。かのカボクロが、ジャンボ・ジェットにはいくつヘッジがつれるかと問うたのは当然のことと納得した。

ヘッジに眠るには、体を少し斜めにして横になると背すじが伸びてなんとも気持ちよく、その通気性とあいまって熱帯には最上の道具のひとつであろう。

このヘッジ、実はインヂオの使っていたものを初期の闖拓者たちがマネをして一般化させたもので、このアマゾンではインヂオから学ばねばならない生活技術ははかり知れず、カボクロたちがその生活文化を受けついでいることはすでに述べたとおりである。

サンタレンへの船は、帰りは上流へ遡ることになるので時間がかかり、サンタレン港へ着いたのは朝の四時だった。移住地へとはいっていった巡回診療の及川先生よりひと足先に戻ってきたのだが、サンタレンには及川先生の実家があるので、御紹介しておかねばなるまい。

及川一家は、サンタレンの市内で野菜をつくり、その野菜づくりで六人の子どもたちの教育に力をそそいできた。戦前のブラジル移民たちは、とくに南ブラジルがそうだが

、伝染病の恐しさをいやというほど味わってきたので息子を医師にすることが多かったといわれる。だが戦後移住の人たちは、教育をつけておけば裸（無資本）でも伸びていくことができる、という考えから子どもへの投資に必死になってきたという。



移住地巡回診療の及川医師

日本人の教育熱心は地球の裏側でもかわらなかつたようで、大学を卒業した息子たちはブラジル人として指導的な立場を占めるようになる。

及川一家がサンタレンにはいつて二十四年である。十年ほど前、サンタレンの高校には年ごろに成長した日本人子弟が集中していたが、全校一、学年一を日本人で占めてしまったことがある。

だがその陰では、ギリギリの生活費が一クルゼーロかかる時代に、一・五クルゼーロの収入を得るため明け方から野菜づくりに働き始める親たちの姿があつた。及川一家は、最近町から二十五キロの地点にピメンタ園をひらいた。週二回ドラムカン二本分の水を運んで撤かねばならないというハンデイはあるが、ブラジル女性と結ばれた下の息子たちがその仕事にとり組んでいた。医師として日本人に喜ばれる仕事をしている息子もいる。及川一家の第二時代が築かれようとしているのである。

### 青竜刀を片手に出陣

サンタレンの日本人の子どもたちが高校で首席を占めてしまったということは、日本人どうしがよき競争相手であつたことを意味していよう。その結果、医科大学に合格する者が出てきたのだが、サンタレンにはやはり息子を医師に育てあげた一家がある。生田勇さん（六十二才）の一家である。生田さんは、昌夫人（六十五才）との間に二男四女があるが、長男・勇治さん（三十二）が、及川医師と同じ病院で外科医をしている。日本に留学して形成外科のマイクロサージェリー（顕微鏡をのぞきながらおこなう微細な手術）を身につけ、切断肢も接合する腕の持主である。

生田さんも、このアマゾンで波乱の戦後を送りながら子どもを教育してきた。生田一家は、家族そろって声が大きい

い。大きい上に猛烈なスピードで喋る。しかも、家族がいつせいに喋り、たちまち口論のようになるので、その家族に挟まれた者は自分の責任で一家を不和にしてしまったと責任感に苛まれるようになる。だがそれは一家にとつてはなんでもないようなことらしく気にしては話がすすまないのであきらめるしか仕方ない。

生田フアミリーの足どりをざっとしるしておこう。一九五五年（昭和三十年）一月二十六日、サンタレンからタパジヨス川を六十キロほど遡ったベルテラゴム園へは行った。山形県赤湯温泉の出身で、五人の子どもとともに四五包もの荷物を携えてきた。中にはミソ、シヨウユ、ミシンそれに冬もののオーバーも含まれていた。

ベルテラはかつてアメリカ資本のフォード自動車会社が経営していたゴム園で、戦後ブラジル政府に移った。生田さんは第三次まで続いたいわゆる「辻移民」のベルテラ入植の第二陣であった（計百二十数家族がはいつている）。三日の休養ののち、人植者はまずゴム園の下草刈りの仕事を与えられた。その日は大雨であったが、十八才以上は男も女も「青竜刀のような」テルサード（山刀）を手に五趾間隔に植えられたゴムの本の下に繁る草を叩きつけるようにして刈ったのである。慣れてからの仕事量は、女でも一日に五趾×二・五キロにおよんだ。草といつても背丈より高いかん木である。原始林には虫は少ない。だが、この下草のようなカポエラ（再生林）には小さな虫

が多く、その虫を求めるクモや蛇も多かった。



二十才になっていた長女のハマ子さんは、まず砂ノミにやられる。足の小指の爪が痛み出し黄色く腫れた。病院へ行くと、医者も爪を少し切ってそのウオノメのようなしこりをポロツととり出した。その固まりの中にはノミの一種が棲みついて何千という卵を産みつけていた。膿のように黄色くみえたのは、その卵の色であった。アマゾンでは珍しいものではなく、「ハマ子は砂ノミで入院した」と、ブラジル人に笑われる。

生田のおやじさんは、ムクインに悩まされた。ツツガ虫（ダニ）の一種で、とくに下半身の肌のやわらかいところに喰いつく。女はゴム入りのズロースをはいていたのでそ

の心配はなかったが、越中フンドシのおやしさんは、”急所”のあたりにやたらに喰いつかれた。ツマヨウジで、急所のムクインをつまみ出すのが、奥さんの日課となるほどだった。(私も今回の取材で何十カ所もやられて掻きむしりながらこの原稿を書いている)

いまから十二〜三年前、生田さんはその当時を思い出して『アマゾン吸血虫』という歌を書いている。「芥子よりこまいムクイン棲う ゴムの林の下草刈りで 柔肌痺い腋の下 血を吸う芥子粒毛穴に入って 毛を引張って揚子でくぢる」このベルテラで、まっ先に”ゴム切り”(樹液の採集)の試験にパスしたのが生田さんである。続いて、奥さんも娘たちもゴム切りを始める。

ゴムの木についていた、五重の塔をさかさにしたようなハチの巣から音をあげてハチの大群がふき出してきてハマ子さんは百六十カ所も刺され、ふるえと熱で入院したこともある。しかし、一家は着実にゴム切りをマスターしていった。

ベルテラでの契約労働は一年の予定であったが、日伯間のいき違いから日本人はここでの労働ができないことになり、全員が出ることになった。

生田一家はサンタレンの対岸アレレンケールへ移り、二年間パトロンの元で働くが食べられるだけで将来の見込みなく、交渉の結果、再びベルテラへ戻ってゴム切りの生活を始める。そこに一年七カ月。

その後サンタレンへ出たので、ベルテラは一家の第一

の故郷となった。

## アマゾンの日米大戦争

モンテアレグレの斉藤博さんも、サンタレンの及川陸郎さんも、いずれの家族も最初ベルテラ・ゴム園に入った人たちである。

フォード社は、アマゾンにその資本力をもって初めて百万鈴規模のプランテーションをひらこうとした。日本の南拓も同じ百万鈴ひらく予定だった。六十万鈴がトメアスーで四十万鈴がモンテアレグレであった。が、平賀練吉さんが嘆いていたようにトメアスーだけでもまだ四万鈴しか手をつけていない。

フォード社のゴム園（当時はフォード王国とも呼ばれた）が建設を開始したのは一九二九年のことで、それはちょうど日本人が百万鈴を開拓しようとはじめてベルンに上陸した年である。（フォード社の地権交付は一九二四年）つまり、フォード社のゴム園も今年五十周年を迎えたはずなのである。

ー 同じ年に開拓の火ぶたを切り、同じ百万鈴をめぐらしたお願いしてベルテラへの案内をしていた。サンタレンからはクルマで一時間半ほどでベルテラへ着く。こは、一九四五のクリスマスにフォード社がブラジル政府へ譲渡し、いまはエンブラツパ（パラ州農務局）の管轄

下にある。ほそばそとゴムの採液がおこなわれていると聞いていたので、半ば再生林に埋もれたプランテーションを想像していた。だが、ゲートをはいると、道の両側には見事な白樺のようなゴム林がうつそうと続いていて、四百坪の碁盤の目に走る道路も整然としていた。中心部まで走ると家並みが見えてきた。アメリカらしいコロニー風の木造住宅が続き、整備された公園や大きな教会、ゴムの精製工場では、ブラジル製の機械にまじってアメリカ・ウエスティングハウス社製の機械も稼動していた。病院では、生田さんの長男と同期生という外科医が忙しそうに患者を見ていた。

アマゾンで、このような清潔で整然としたプランテーションがあることには驚かされる。往年のベルテラーは、さぞ活気に満ちていただろう。当時のベルテラーの様子を建設開始三年目の一九三二年、『フォーリヤ・ド・ノルテ』紙がこうレポートしている。

「すでに千四百<sup>ハツ</sup>の原始林を拓いた後に、八十五万本のゴム苗木が植付けられた。百万<sup>ハツ</sup>の全耕地には、すでに縦横に幹線道路が閉設され、排水溝渠が掘さくされている。附属する産業として製材工場および南米一という木材乾燥装置があり、家畜屠殺場も模範的設備である。中央本部には近代的建物が並び、大レストラン、理髪店、店舗群、倉庫の他一軒の貴金属店すらあった。また遠からずして一人の文盲者もなくなるであろう。フォード学園には二百八十名

の児童が在学し、病院の診療投薬はすべて無料、中央市街地などに配布される上水道の配水タンクの貯水量は五十万ガロンであり、公衆に開放されている水泳用プールは四万ガロンの水量をたたえている。全労働者数は千八百名、間接にフォード事業に携わる全人口は約五千名を越える」

これらのデータは、一九三二年十一月に当地を訪問したブラジル国労働大臣の報告を元にして描かれているが、今日でもそのレポートの面影は十分に残っていた。

かつて南拓はモンテアレグレのムラタ地区に日本庭園までつくったが、今日では本部跡にマンゴーの並木が残るのみである。しかも、ピメンタの黄金時代を迎えたトメアスーの今日でも、ベルテラーの整然さには残念ながら及ばない。

生田さんの説明によれば、ベルテラーは百万鈴のうち四十万鈴分で、残り六十万鈴（フォードランジャ）はタパジヨス川の対岸であるという。また、ベルテラーだけでも、四百<sup>以上</sup>四方の一区画に五<sup>以上</sup>おきに九千六百本のゴムが植えられていて、その区画が五<sup>以上</sup>十<sup>以上</sup>の道路を隔てて六百五十近くもあつて、日本人入植者たちはその六百五十区画にちらばつて「ゴム切り」をしたのだというのである。

私は、このフォード王国と呼ぶにふさわしいプランテーションを見て、ふとひとつのことを思いついた。

福原八郎、上塚司、辻小太郎、崎山比佐衛といったアマゾンに壮大な開拓地をつくろうとした人たちは、この

フォード社ゴム園の計画を意識していたにちがいない。第二次大戦前のことである、アメリカへの対抗意識を燃やしていたのではないかと思う。『フォーリヤ・ド・ノルテ』紙も、その記事のタイトルを「アマゾンに対立する日米植民地」と書いているのである。

### ヤブ医者コンビ多忙の日々

終戦の年にフォード社は、フォードランジャおよびベレテラの二大プランテーションを安い値段でブラジル政府へ転売した。

十五年間に、数百万本のゴムの木を植え、設備も含め数百万ドルを使ったあげくの失敗であった。

その理由を、『アマゾンの町』（C・ワグレイ著）では、「フォードのプランテーションでの大きな問題点は、熱帯の病気でも気候でもなく、野生のゴムの木をプランテーションの条件に適應させる問題と労働力の安定した供給を維持する問題とであったように思われる」と、述べている。

“ゴムの木”については、耐病性のゴムの木を確保するためにフォード社は、野生のゴムの木に東洋のゴム林から輸入した品種を接木せねばならず、手間と金がかかりすぎたのだという。

“労働力不足”については、「アマゾンのゴム採集人は、放浪的な生活を送るといふことで知られている。普通ゴム

採集人は、一シーズンか二シーズン働いて手早く金を作ろうとして、自ら進んで、或いは仕方なくゴム採集の仕事に入ってくる」「彼の半放浪的な性質と」「一山当てる」という姿勢とは、商業的なプランテーションに長い間雇われるということにはつながらない」と述べている。さきの『フォーリヤ・ド・ノルテ』では、「労働者の収入である日給はまれな高率」と報告しているので、両者を照らしあわせると、「金だけでは労働者を動かすことはできなかつた」ことになる。

安易な判断は控えをければなるまいが、フォード社は、資金力と物量で大プランテーションを築こうとして失敗した。資本の投下だけではアマゾンには動かなかつた。

ほぼ同じころに事業を開始した「フォード社」と「日本の移住事業」の五十年目をみるならば、いまアマゾン流域にはアメリカ人はほとんど姿なく、日本人は根をおろして約一万人になろうとしている。

かつてのアマゾンは、資本の投下↓利益の拡大が教科書通りにおこなえるところではなかつた。フォード社は、成果を生むのに性急すぎたのではあるまいか。また、アマゾンへの進出を「アメリカの利益」のためにおこなつたことは言うまでもないだろう。

私はさらに上流へと取材を続けるなかで、少なくとも初期のアマゾン移民の指導者のなかには「日本の利益」のために移住することを戒めブラジル人として活躍することを

唱えていた人たちのいたことを知った。

日本人移住者のアマゾンへの「根づき方」の好例は、いまサンタレンへ帰るトラックのハンドルを握っている生田さん、その隣に座っている小がらな昌夫人の話にもいくらでも見い出される。

「ここからずいぶん離れたところから人が私たちを呼びにきてね、はるばる出かけたら梅毒の患者で、背中には骨がみえるほどの穴があいてたんだ。その穴に砂糖をいれるサッコ（布袋）をつめてバラの葉をのせて、ヘッジ（ハンモック）で寝てた。背中穴にはウジがわいていた」生田夫妻は、そのブラジル人のところに三週間留まって “治療” をした。「三週間目にはよくなったよ、そのあと歩いてサンタレンにくるまでになったからね」

いまから十数年前の話だが、生田夫妻はペニシリンの注射などで梅毒から流行性脳脊髄膜炎まで治してあるいた。

「三十才くらいの女の人が頭がへんになって、パンツまですいで窓からとび出そうとしてるっていうんで呼ばれたのね。二人で相談して “衝撃療法” に決めてスーハ・ジアゾーラのアンプルを五cc 静脈に打ったのよ。そうしたら、ひっくり返って脈が止まっちゃって。あわててカフェ（コーヒー）を口に入れたらゴックンと飲んだので、あ、助かったと思ったわね」

この女性、翌日にはベッドに起きあがり、生田夫妻に「ムイト・オブリガード（ありがとう）」と言うまでになり、さらに二回の注射で完治した。

昌さんは、東京で斉藤茂吉氏の青山脳病院の看護婦をしていたことがあり、おやしさんは戦争中に南京で衛生兵。二人は、日本から持ってきた家庭医学書を開きながら何百人という病人を助けてきた。”イクタのヤブ医者”として有名だった。

ついさっきも、ベルテラで生田夫妻の顔を見るや”肩が痛い、みてほしい”とやってきたブラジル人がいた。その姿をみて、この二人はアマゾンに根を下しているな、と思っただけである。

### 三日目にまたやってきた吸血コウモリ

「素人が医者マネをして間違があると困るから」と、ホンモノの医者になった息子に注意され、ヤブ医者は廃業した。だが、かつてのアマゾンにはすべての問題を、医療も含めて、自分たちの手で解決しなければならなかった。日本では、最近サバイバルなどといって「自分で命を守る」ことがスポーツのように言われているが、アマゾンでは毎日がサバイバルであった。

十五年前、生田さんの次男（当時十五才）が悪性マラリアにかかり、人事不省に陥った。脳に症状があらわれて幻覚と記憶喪失にみまわれた。巡回診療の日本人医師はショック療法しかないと言い、ブラジル人の医師にまかせて去って行った。だが、カルジアゾールという強心剤を一日の許容量の五倍も打つ危険な賭けを医師は手がけてくれた

かった。

夫妻は、注射と同時に全身硬直とけいれんで体が紫色になるこの療法を自らの手で、三週間続けた。さらに、毎日五CCのインシュリンを三週間打ち、次男はぶくぶくに肥ったがついに健康を回復したのである。

危険な賭けだったが、その賭けに親が手を下さねばならなかった。――自分たちで命を守る、その話を聞いてみると、この人たちは”生きていく”という実感が迫ってくる。

アマゾンの日本人が五十年間生きてくることができたのは、ささやかな「力」でも、それを何十倍にも発揮してきたおかげである。

サンタレン市内で、電気店を営んでいる矢野勝大さん（四十八才）もその一例であろう。千津江夫人（四十四才）とともにアマゾンへやって来たのは一九六二年（昭和三十七年）であった。兄弟がみなブラジルへ来ていた。

ベルテラ、モンテアレグレと移り、アレンケールで写真屋を始めた。日本でその商売をしていたからである。だがお客は写真を撮っても、出来あがったものを見るだけで金を支払わず写真も持たずに帰ってしまう。サンパウロから取り寄せる薬品や印画紙も高温多湿にあいすぐダメになる。

六カ月後にサンタレンへ出る。幸い手先が器用だった。人に頼まれたのがきっかけで、万年筆おもちや、井戸ポン

プ、タイプライター、水道と何でも修理を引きうけるようになった。それが商売になったのである。日本にいたころはオーディオ・マニアでその “技術” が生かされた。

一九六三年にラジオ修理の店を開く。いまは、ラジオ・テレビの修理と部品販売を営む。日本へ行き東芝でICテレビの研修も受けた。三人の子どものうち一人は、電子工学を学んでいま父子共同経営である。

サンタレンはカラーテレビ放送が始まって間がなく、これからの成長株である。

「いまはようやくやくひと息つきましたけどね、店をひらいた当時は売れるものは売れるだけ処分して食いつないだんですよ。日本を出るとき、夏ものの衣類は三年分持って行けといわれてそれが役立ちました。そのころ、ここには女性用のナイロン・パンティもありませんでしたから」

(千津江さん)

時計、指輪、ラジオ、商売道具でもあったカメラも三台のうち二台を売った。

「ちょうどそのつらい時代に、下の子(英樹くん・十五才)が吸血コウモリにやられてねえ。まだ生後五カ月でしたが、急に熱が出て原因がわからなくなって三日目、明け方に子どもがギヤーツって泣き出したので見ると足にモルセーゴ(コウモリ)がうずくまっていたんですよ。足の指から血を吸っていたんですね。よくみると反対の足も同じところに小さな傷があつて。あれは一度血を吸うと味を覚えていて必ず戻ってくるって、いいますね」

サンタレンは、人口百万近いベレンと七十万といわれるマナウスのほぼ中間に位置し、国内線のジエツト旅客機が一日に何便も発着する交通の要衝となった。町のすぐ近くまで原始林が迫ってはいるが、クイアバ径由サンパウロへ通ずる道路も開通した。

現在日本人は四十三戸・百九十四名で野菜中心から胡椒園経営へと移りつつある。

二十階建てのアパートも建ち始め、豪華なリゾート・ホテル”トロピカル”のオープンは観光客を集めつつあり、作家の開高健さんもここに遊んだ。人口が二十万になるのも間近かであろう。

ゴム園での労働も、ヤブ医者も吸血コウモリも過去の話になりつつある。これからは二世、三世の時代である。

日本人移住者の生活も、いまようやくひと区ぎりつこうとしている。

## 第7章

### 蹉跌は密林大河を越えた

高拓生とジュートを育んだ低湿地アマゾン



高拓3回生の横浜出港（1933年）

### インドから種を密輸

「むかしの日本では、長男は跡取り、次男は分家、三男は養子ときまっておりました。僕は三男で、小さな頃から親類の娘の家へ婿にはいることに決められていましてね、それがいやでどこかよそへ出たかった」

サンタレンの町はずれ、青黒いタパジヨス川が“トノコ色”のアマゾン川に合流したばかりの河岸である。

外の気温は三十五度を下るまい。河岸に建つ大きな倉庫

の一部につくられた活潑な事務所の中は、カラカラと音をたてるクーラーのおかげで汗もひいていく。

河面に向っている大きなガラス窓の向うには、二つの川がまじりあわず二本の白黒の帯となって川を二分しているのがよく見える。ときおり川面をイルカが跳びはねる。

事務所には一人のブラジル人と一人の日本人しかいない。静かだ。

大正十五年生まれ、六十七才になる辻小平さんはアマゾン生活四十七年、ジユート（黄麻）ひとすじに生きてきた人である。

事務所と河岸の間には、ジユート（黄麻）の織推がカーペットのように敷き詰められ天日に乾されていた。裏の倉庫には米俵のように縛りあげられたジユートの固まりが高い天井まで積みあげられている。「兄がアマゾンの話をよくしてくれて、狭くなるしい日本を早く出たかったこともありましたな」



ジユートひとすじの辻小平氏

滋賀県彦根市、琵琶湖畔の生まれである。「兄」とは、戦前・戦後を通じてアマゾン移民にはかり知れない影響を残した故・辻小太郎氏（明治三十八年生まれ）のことである。

小平さんは、アマゾン行きを実現するため、東京世田谷の国士館高等拓殖学校（昭和七年、国士館財団にその理念を受け入れられず分離独立し神奈川県登戸へ移転。日本高等拓殖学校として再発足）に入学する。通称「高拓」とアマゾンの日本人に呼ばれるこの学校は、元・高橋是清・農商務大臣の秘書官であった上塚司氏が設立した「海外移住指導者」を養成する機関であった。

上塚氏はこれより先、アマゾナス州の州有地百万畝の譲渡契約を結び、パレンチンスに近いビラアマゾニアをその根拠地を選び伐採を始めさせていた。

旧制中学卒の青年は高拓で一年間の教育を受けたのちビラアマゾニアで一年の実習をすませ、家族移住者の指導に当たるといふ構想であった。

ブラジルは当時すでにコーヒーの主産地で、その豆はジュート製の袋に詰められて出荷されていた。しかし、ブラジルでのジュート栽培は失敗をくり返し、インドからの輸入に頼り、多額の外貨を費していた。この事実をブラジルで知った辻小太郎氏はジュート栽培に熱中する。帰国後、高拓の主事に迎えられた彼は一貫してジュートの夢を生徒たちに吹きこんだ。

一九三二年（昭和七年）の暮、高拓三回生の卒業より一

足先に小太郎氏はアマゾンへと出発した。このとき、三回生だった小平さんも兄とともに卒業を待たず日本を出発したのである。

すでに一、二回生がビラアマゾニアにはいつていた。が、ジユートの栽培は成功していなかった。十八、九才の独身青年たちは、失敗のくり返しのなかで不満をつのらせる。そのはけ口もない。女性の姿もなかった。

最寄りの町、パレンチンスまで遊びに行くにも手こぎのカヌーで一時間半はかかる。町へ夜遊びに出て、夜更けにカヌーで帰る途中ついいねむりをして気づいたら、ずっと下流まで流されていた、ビラアマゾニアへ戻るのに一週間もかかった、という者もいた。

赤フンドシ姿でピंगा（砂糖キビからつくる強い酒）を飲んだあげく裸踊りをする者が出るいっぽうで自殺者も数人出ている。

こういった現地の混乱を收拾するために小太郎氏はビラアマゾニアの現地支配人を命ぜられ日本を出発したのである。

船はインドのカルカッタに寄港した。そこではインド産のジユートの種子を入手する手配がついていた。小平さんは、「種子は輸出禁止だったんですな。それを、おそらく三井物産の尽力で集め、領事館員が外交官特権で種子をいれたカバンを船に運びこんだのでしよう。僕は見えます、六十<sup>キ</sup>ほどのものでしたな」という。その後も、さまざま

なインド産の種子がビラアマゾニアへ送られ、ついに一九三四年（昭和九年）栽培に成功、アマゾンに日本人の手によってジュート産業が興された。以来、一度もジュートから離れていない小平さんは、いまジュート商社の社長で、年二千トン扱っていた。

### 毎晩、短刀をつきつける酔っ払い学生

高拓生の故郷はパレンチンスに近いビラアマゾニアである。私は、サンタレンからパレンチンスへと向うのだが、その前にサンタレン在住の高拓一回生、飯田義平さん（七十三才）に会うことができた。

「僕たちは、きれいな家に住もう、金儲けをしようという夢で来たんじゃない、僕たちの理想はまだ続いているんだよ」

昨年、夫人の世杖さん（一九一一年生まれ）をガンで亡している。すでに、何人かの孫のいる老人である。その飯田さんが、夢を語り続けている。

高拓生はみなそうだった。「夢」「理想」この二つの言葉を私は会った高拓生から必ず聞いている。また、アマゾンの日本人たちは六十才をこえる高拓卒業生たちを、いまだに“高拓生”と呼んでいる。それは、早稲田大学を卒業した七十才の老人を“早大生”と呼ぶのに等しい。いつからそうなったのかはわからない。だが、高拓卒業生自身も、周囲の日本人たちも、高拓卒業生を、まだ“卒業”してい

ない青年たちとして理解し自覚しているのである。つまり、高拓の理想は未だ成就せず続いている、ということなのである。

飯田さんが、四十七名の高拓第二回生とともにピラアマゾニアへ渡ったのは一九三二年（昭和六年）であった。「すでに職員が二十一名はいつていた。一年間、僕らは密林の伐採なんかをしていたんだ。男ばかりで殺風景だったな」

朝は六時半に起床しラジオ体操。そして、二回生の指導者であった越智栄氏が一日の作業計画と部署の配置を告げて朝食である。朝食はコーヒーにフアリーニヤ（マンジョーカの粉）をなめるだけだ。

私は、ベレンで越智栄さん（七十四才）に会っている。越智さんは「ピラアマゾニアがどういところかわかっていなかったから、ブラジルへ向う船の中では道路計画や学校、病院の建設など植民地計画に花を咲かせていたものですよ。でも、現地では校舎もできていなかった」と語っていた。

サンパウロからは日本人の農業指導者がやってきてエンシャーダ（クワ）やテルサード（青竜刀型の山刀）の使い方をお教えた。

あとからやってくる家族移住者の“指導者”になる教育を受けるのだが、高拓生には農業経験者などほとんどいなかった。都会の子息である。「貴様ら、たるんどる、オレがひとつオノの使い方をお教えてやる」と、オノを振りあげ

た教官が、空振りして自分の脛を傷つけてしまったという話も残っている。学生も教官もまだ二十代になったばかりで、理想だけが先走っていた。

ビラアマゾニアの主眼たるジュートの栽培テストは続いていたが成功の見込みなし。密林の開拓は、この何も知らない若者たちにとって理想だけで立ち向うには過酷すぎる面もあつた。とくに、娯楽の欠如、女性の姿のないことが、彼らを悩ませた。

そのはけ口は、地酒・ピングである。教官すら、酔つたあげくに飲めない者に短刀をつきつけて「おまえはアマゾンに来てまで酒も飲めんのか」と、短刀で歯をこじあけて、ピングを流しこむこともあつた。

一年が過ぎて二回生はビラアマゾニアを出てワイクラツパへ移る。実習が終了して、いよいよ本格的な開拓である。ジュート栽培はくり返してもくり返しても失敗である。越智さんのところへは、ピングを飲んだ高拓生が毎晩のように押しかけてきた。「先生、どうしてモノの育たるところへ寄りこしたんだ」と、詰問する手には、短刀が握りしめられていた。その越智さんですら

「アマゾンへ来て一年四カ月目に、飯田さんと大石隆人さんの奥さんが日本からやって来た。僕はその二人を見て、こんなにすごい美人が日本にはおつたのだろうか、とまぶしくて仕方なかった」

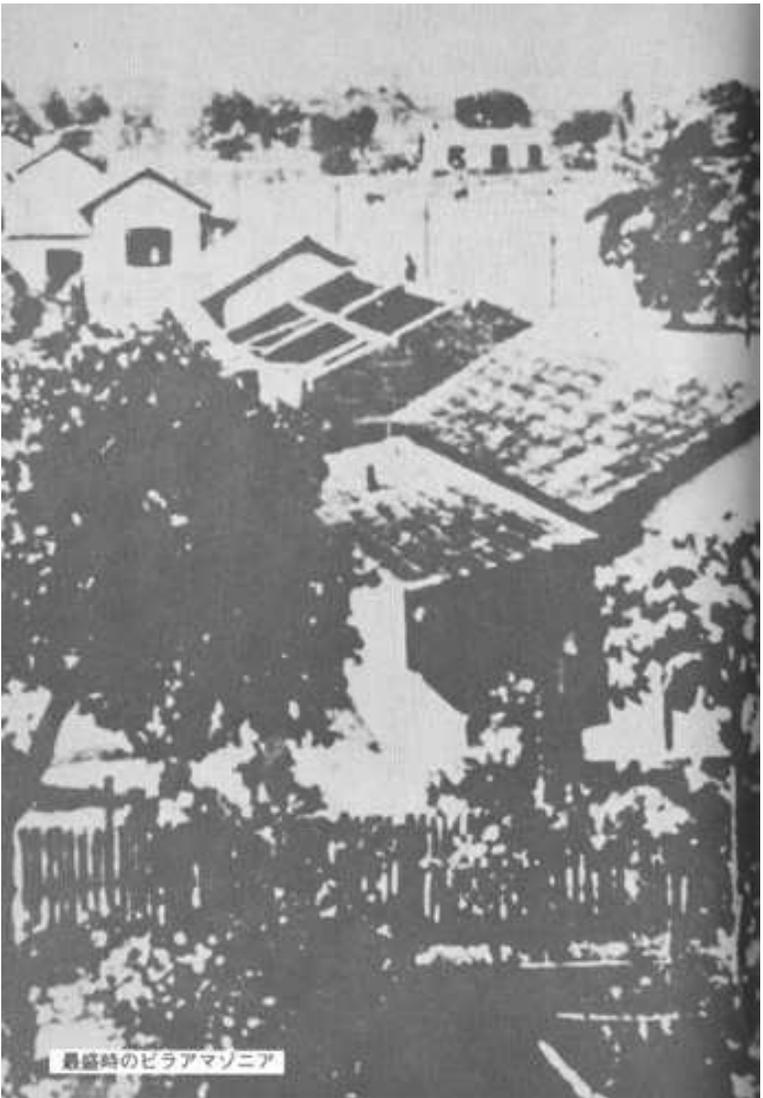
という精神状態であつた。

三回生が到着したとき、越智さんはアマゾンへ来て始め

てキツコーマン醤油を手にした。「その醤油でタンバキ（タイに味が似ている体長六十センチの川魚）の刺身を食べたとき、何と旨いものかと思ったもんです」米の飯は食べていた。が、おかずの漬物はまだ青い。パイヤの皮をむいて作ったものだった。代用ヌカは、フアリーニヤに塩と水をまぜて作った。パイヤの根をすりおろして、大根おろしの代わりにした。

銃で、カピパラ（ミズブタ）を撃って塩漬けにしたり、クチア（リスのような小型獣）を食べたり「毒でないものは何でも食べた」という生活であった。

「あれはアマゾンの戦国時代でしたよ」と越智さんは語ったものである。



最盛時のピラアマゾン

## 深夜の開拓地にきこえる「赤城の子守唄」

自殺した高拓生も何人かいた。その一人、山本紀雄という一回生について、越智さんはポツリポツリと話してくれた。

「山本が鉄砲で人の奥さんを撃ち、子どもも即死した」

という電報がベレンへ出かけていた越智さんの元に届いたのは一九三三年（昭和八年）九月のことであった。三回生が到着してやがて半年、一般の家族移民もはいつていた。「山本紀雄は、熊本県出身の良家の息子で、父親は校長だといっていました」

軟派の不良タイプの青年だった。が、不良少年じみたのが好きだった越智さんはこの青年を気にかけていて、彼も越智さんの言うことはよくきいた。

門限は九時である。越智さんは点呼をとっていたが、いつも山本がいない。カヌーでパレンチンスへ遊びに行っているのだ。

「度重なるのでとつつかまえてやれと、カヌーで戻ってくるのを浮き桟橋でカンテラを下げて待っていると、アメリカの歌を口ずさみながら戻ってきましたよ。何人かいっしよでした。と、向うで」越智先生がいるぞ「なんていう声が聞こえました。怒鳴りつけようと思ったら、山本はサツと懐からビンをとり出して」先生、ピンガ！ピンガ！”と突きつける。そういう憎めない青年でした」

商用でベレンへ出ることになった越智さんは、山本青年

を呼びつける。机の引き出しをあけて、「ここに鉄砲の弾がある、何かあったら出して使え、ふだんは鍵をかけて、絶対に使っちゃいかん」と念を押して出かけた。ところが冒頭の電報である。

日曜日だった。山本青年は鶏を撃った。それた弾はヤシの葉でつくった家を貫き、渡辺さんという大工一家にとびこんだ。一才にならぬ子どもは即死し、奥さんが負傷した。

警察があるわけではない。越智さんが警察署長であり校長を務めねばならなかった。罰するといっても方法はない。「越智さんはどうして改心の情のみえないあの男を放っておくのか」と、人々は非難した。だが、山本青年は良心の呵責に耐えきれず歌っていたのである。殺してしまつた赤子への鎮魂歌が『赤城の小守唄』であつた。越智さんは、山本青年をこの植民地から出すことにし、本部のあるビラアマゾニアへ移した。

本部社員として働かせた。

だが間もなく、山本青年はビラアマゾニアの病院に近い社宅で首をつつて自殺した。

二十才であつた。

鶏を撃つために何故、鉄砲を持ち出したのかは定かではない。

だが多くのアマゾンの日本人移住地でもそうであつたように、銃を撃つことは、ひとつの楽しみでもあつた。

狩猟は、食料を得る手段であつたし、今日でもピスト

狩猟は、食料を得る手段であったし、今日でもピストルやライフル、ショットガンをほとんどの移住地で見かけた。町には必ずガンショップがある。

トランスアマゾンカでもベルテラでも鉄砲を肩に歩いているブラジル人を多く見た。詐欺にあつて巨額の金を奪われたので復讐のために買った、と三十八口径の大口径ピストルをこっそりと見せてくれた人もいた。

もつとも、今日ではワニやオンサ（豹）は禁猟となっているし、よほど奥地へ行かない限り銃は必需品ではなくなつた。

それでも多くの人が銃を所有しているのは、楽しみとしての目的からだろう。四十数年前のピラアマゾンアでは、まだ銃は必需品ではあつたのだが、山本青年の撃つた一発は、娯楽の少ないアマゾン奥地ではひとつのストレス解消の手段であつたにちがいない。

そしてそのために彼は他人の子どもを殺し自らの命を絶たねばならなかつた。

アマゾンとはそういうところだったのである。

こういう環境の中で、いわば島流しにあつたような高拓生たちが悩みながら、やり場のない不満を抱きながら、理想だけは持ち続けてきたというのは何故なのか。

なぜ、その「夢」は消えてしまうことがなかつたのか。私は、それを知るためにもピラアマゾニアを訪ねなければならなかつた。

## 飛行機に人が轢かれる！

サンタレンの空港から、私は再びターバのイロンデーレ機でパレンチンスへ向う。便数が少ないせいだろう。数日前に乗ったときと同じスチュワードが「また来たね」と握手を求めてくる。

大型双発機は、タパジヨス川に沿って南下する。川の両岸は、吸いこまれるような緑が地球を塗りつぶしていた。その緑に私はめまいを起こす。

イロンデーレ機は、トランスアマゾニカ沿いの町・イタイツバ経由である。乗客は約十人。

私は、イタイツバに着陸した機内で離陸を待っていた。と、例のスチュワードが「おまえだけ降りろ」という。パレンチンスへはここで乗り換えるのだということを始め知った。

機外へ出ると、肌が痛み出すほどの暑さだ。かって、トランスアマゾニカがこの町まで開通したとき、集まった新聞記者の一人が暑さで気絶した場所だ。スチュワードが指さす方向をみるとさらに小型の双発機が止まっていた。出発を待つ七く八人の乗客はみな翼の下へ集まって目射を避けている。気温は四十度を超えているだろう。

気絶するのを耐えて三十分出発を待つ。「空港では必ずパイロットを見ていなさい。彼が乗りこんだら出発だから乗り損じないように」とアドバイスをしてくれた人がい

た。気絶などしていられないのである。卒倒寸前によくやくその双発機・ブラジル製のバンデランテ機に搭乗する。だが、炎のような太陽に数時間炙られていたらしい機内は、新宿のサウナ風呂である。「あの暑い飛行機に乗るのが辛くって、私は日本へ帰るのがいやなんです」という日本人の奥さんの証言を思い出す。

離陸してパレンチンスまでの四十分、機内の温度はわずかしか下らず、だれもが汗まみれだ。とはいっても、バンデランテ（探険者という意味）はエンジンこそ国産ではないが世界各国へ輸出した名機なのである。

パレンチンスは、アマゾン本流の南岸沿いにある人口四万五千という美しい町である。空港は町の真中にあつた。いや、真中になってしまったといったほうがいい。人口が増えて、空港が町にとり囲まれてしまったのである。町の人たちは、そのためにまるで大通りを歩くように勝手に滑走路を横切っていて、よく人が飛行機に轢かれそうになる。

この日も、午前中に危うく子どもが着陸してきたバンデランチにはねられそうになり、パイロットは「こんなところには二度と来ない！」と怒った、という話を耳にした。それでも、以前は飛行機の発着時には係員が赤い旗を振って通行禁止の合図をしていたが、もう手におえなくなつたということらしい。近々、空港は移転されるのだそうである。

到着したバンデランテに、ドラムカンの燃料を手押し

ポンプで給油している姿を横目にして、フオルクスワーゲンのタクシーに乗りこんだ。パレンチンスには、高拓六回生の川上顕三さん（六十二才）の他、近郊も含めて十二家族の日本人が住んでいる。川上さんは、サンパウロに本社のある商社の当地支店長で、辻小平さんと同じくジュートの商いを主としたビジネスマンである。



河岸通りに面した川上さんのお宅を訪ねると、実子夫人（六十一才）が対応してくれた。かつて、本田靖春さんがアマゾン・レポートの中で「まるで東京の山の手で出会う上品な感じの奥さんそのままである」というような表現で評した女性である。私は、始め夫人がヨーロッパ人かと勘違いした。室内のインテリアも垢抜けしてい

て開拓者の妻とはとても思えなかった。

夫人は愛媛県川之江市の出身である。大きな果樹園や山林を持つ富裕な家庭の一人娘。

「おじいちゃん、おばあちゃんに大事に育てられていたでしょう。高等女学校を卒業してから主人とお見合いして、東京世田谷の牧師さんのお宅で家事見習いをさせられたの。赤ちゃんをおんぶしなさいといわれたけど、きたないネンネコじやいやよ、って断ったのよ。おしめのウンチを洗うのも気持ちわるくって」

まったくのお嬢さん育ちであった。

「移民なんていう言葉も知らなかったし、高拓生は指導者になるっていわれていたので町にでも住むものと思っていたのよ」

出発の荷造りのとき、石油ランプを見つけた。そこで始めて、電気のないところへ行くのだと気づいて、母と声をあげて泣いた。

一〜二回生を独身のままアマゾンへ送り出したことが高拓生に混乱をおこしたので、三回生からは妻帯が義務づけられ、卒業生たちはみな、あわただしく結婚して出発するようになっていた。

## アンデスおろしに流れる涙

一九三七年（昭和十二年）四月十五日、川上夫妻は横浜を出航する。お見合い、結婚、出発準備と息をつく暇

もなく”夫婦”になる機会もなかったことを知っていた  
実子さんの母は移民監督に「二人用の船室をとってくれ  
るよう」頼んでいる。だが、部屋は四人用で、スリルに  
満ちた新婚旅行となった。

移民船には、南米へと出ていく農業移住者が多かった  
が、その地味な人々の中で高拓生だけは暗さの片鱗もな  
く、彼らの妻たちの華やかさは「まるでダンサーみたい」  
と囁かれるほどだった。

アマゾンへの三カ月の船旅は気持ちが悪くなるような  
日々であった。だが、七月十五日にようやくたどり着い  
たビラアマゾニアは密林と大河にはさまれた辺境であっ  
た。

日没時にビラアマゾニアの船付場に降りた夫人は、大  
木がまるでイルミネーションのように輝いているのを見  
る。ホタルの大群であった。本部建物の二階に一同は  
泊った。

翌朝、ふと外を見ると独身高拓生が上半身裸に近い姿  
で本部建物をとり囲み、じつと新参者をみつめている。  
「日本の女」を見に来たのであった。実子夫人は体がふる  
えて、外へ水を飲みに行くこともできなかつたという。  
この日、小さなハシケでサンタルジアの河岸へ運ばれ  
る。すでに三回生からはビラアマゾニアでの “実習”  
は省略して開拓地へと直行させられていた。

河岸から歩いて四キロのノーボ・プレツソには木の壁  
の家が用意されており、男たちは荷物の運搬、妻たちは

各家で許物を片づけ始める。

赤道直下のアマゾンでは、一年を通じて午前六時に日が昇り、午後六時に日没となる。日が昇り没するときには、まるで太陽がポンと音をたてて上下するように、突然あかるくなり暗くなる。

日没。夫はまだ戻らなかつた。ランプに火を灯さねばならない。だが、日本でもランプなど使ったことがない、どうやって火をつければいいのかもわからない。ホヤが動かない。「電気のないところへ行く」と知って母とともに泣いたことが鮮やかに思い出される。

食事も作らねばならない。飯ごうでお米を炊く方法も知らない。なんとかやってみる。水が足りなくてできたご飯はカチカチに固い。

ブラジルの米はなんて固いのだろうと、もう涙が頬を伝う。ご飯も炊けないことを知ったら夫に叱られると考えた実子夫人は、土に穴を掘ってそのご飯を完全に埋めて隠す。ようやく戻ってきた夫に向つて、「あたし、もうこういうことできない」と訴える。夫二十一才、妻も船中で二十才を迎えたばかりであつた。

四十二年前のその日のことを実子さんは、まるで昨日のことのように語り続ける。「何もわからないで、女学校を卒業してすぐ来てしまつて。いまもまだ娘時代そのままの気持ちなの」

一年を通じて日中は三十度を越すアマゾンに、ときおり冷めたい風が吹きすさぶことがある。南極からアンデ

ス山脈沿いに北上してくる寒気が、アマゾンにも達するのである。それを中流の日本人はアンデスおろしと呼んでいる。気温は二十度以下に下る。真夏日が突然、日本の晩秋の気候となるのである。

「アンデスおろしが吹くと、いまでも急に日本が恋しくなつて泣いてしまうのよ」

一冊の古いアルバムを見せてもらう。夫人の若いころの写真が貼られている。昭和九年の女学校時代の夫人が晴着姿で写っている。その写真の横に、私は赤インクで記された文字に気づいた。

「思い出はつきず、なつかしきふるさと」

アマゾンへ来てからの数十年、夫人は幾度となくこのアルバムを開いたことであろう。

だが、夫妻はアマゾンに留まった。

夜十時をまわったころ、パレンチンスの商工会の会議から川上さんが戻ってきた。川上さんは商工会の会頭である。町の厚生施設の建設計画をすすめる会議であつたという。川上さんは、すでにブラジル人社会の一員として、リーダーとしてここに根をおろしていた。高拓生の「アマゾンの指導者となる」という理念は、型こそちがったがアマゾン各地で実を結んでいる例を私は多く見ている。「いまもアマゾンに残っているのは、バカ正直か、上塚さんの理想に共鳴したか、ズルズルというグウタラの、いずれかでしょうね」陸軍技師の息子であつた川上さん

は、新天地のアマゾンに自分たちで新社会をつくるのだという理想に燃えていた、自分たちのあとには続々と日本人が来るのだと信じて、その先遣隊という気持ちでした、と語る。

第二次大戦が勃発しその高拓生の“基地”は消滅してしまうのだが。



夜半フト目を覚ますと……………

いま私の手許に高拓同窓生の「一九七九年度会員名簿」がある。職員も含めて百四十九人の名がある。そのうち、日本へ帰国した者はわずか十九名にすぎない。ほとんどがブラジルへ根をおろした。パラ、アマゾナス、マラニョ

ンの各州、つまりアマゾンから離れなかった者は六十六名四十四割にもものぼっている（あとはサンパウロ州など）。

第二次大戦の開戦と同時にビラアマゾニアがその活動を終焉させ、二度と高拓生が組織化されることがなかったことを考えれば、これはかなり高い定着率である。

彼らを支えてきたものは何だったのだろうか。その理想とは、どういうものだったのだろうか。高拓生は、百姓も知らないお坊っちゃんにすぎないじゃないか、と評される反面、六十才になっても夢を抱き続ける永遠の青年であるとも言われる。

その高拓生に夢を抱かせたのは、ビラアマゾニア・プロジエクトの経営者である上塚司氏であった。私は今回の取材で、その上塚氏の未公開書簡を閲覧することができたので、上塚氏の情熱を知るひとつとして一部を御紹介しようと思う。

この書簡は、東京の本部から上塚氏がアマゾンの高拓一回生へ宛てたものである。まだジュート栽培の成功という目的を成就していなかった時代である。初期の混乱から高拓生が荒れていた時代である。その混乱の原因について、この書簡は多くの知られざる真相を伝えているが、その部分の公開は後日にせねばなるまい。

『私は幾度か天を仰いで時運の非なるを嘆ひたでしやう。然し之れではいかぬと思ひ返しては、毎朝太陽が輝かしい光を投げると小生は希望に満ちて飛び起き、今日こそ

はと、自ら鼓舞し激励しつゝ、一日の戦闘にかゝりました。然し世の中は決して暖い手を以て我々を迎へません。殊にアマゾンの如き万里の異城に対しては無理解です。唯小生は人事の尽すべきを尽して、夜遅く眠りに就きます。それでも夜半フト目を覚まして万寂たる所、小生の頭を占領するものは何であるか、熱汗を奮つて原生林に突撃して居る諸君の姿です。その姿は走馬燈の如く小生の眼をかすめ強い責任感に小生の胸を圧します。(略) 而して今日第一回生諸君の悲壮なる決意を承知し又第二回生諸君も漸く自覚し其の本来の面目に復帰せんとするの報道に接し欣快に絶へません。私は諸君が飽くまで、今日の心境を保持し、之れを益々美化し善化し、以て所期の目的に邁進せられん事を熱望して止まないものであります。

一言胸中の磊塊を述べて諸君に敬意を表します。(略)

一 模範植民地の目標に就いて (略)

我々のアマゾン進出の目標は我が大和民族に依る新文明の建設であらねばなりません。(略)

独逸のフンボルトが叫びし如く、「嘗てユウフラット、ガンヂス、ナイルの沿岸に世界文明の発祥したるが如く、廿世紀以後の文明の発祥する所はアマゾン流域なり」との説を是認するならば、アマゾニアの新文明を建設するものは、我が大和民族以外には無いのであります。(略)我等はアマゾン開発の使命のここに存するのを覚る時実に勇躍禁じ得ないものがあります。(略)

### 三、模範植民地の指導原理

模範植民地は、広大無辺の愛を根幹とする隣接扶助、協調協和の大精神を以て指導原理とせねばをりません』

(昭和八年三月十四日付)



上塚司氏とお孫さん(年代不詳)

この理想植民地がビラアマゾニアであった。私は高拓生の夢の跡を見るため、パレンチンス在住の尾山多門さん（六十才）の船でビラアマゾニアに案内していただいた。

約四十分アマゾン川を下る。カヌーに穀物の袋などを積んだ現地人がすれ違う。パレンチンスにはまだ外の世界から通じる道路はない。交通は船か飛行機に頼るしかなく、その点では四十数年前と変わらない。自家周車代りの小型船を、ここでは“モーター”と呼ぶ。エンジンはヤンマー製のディーゼルが人気を集めていた。マナウスが自由貿易地に指宝され日本製の家電製品やオートバイなどがその免税品の大半を占めるようになってから、アマゾンの日本人に対する評価が一層高まったことも忘れてはならないだろう。戦前戦後の日本人移住者の農業開発と、ここ十年ほどの日本製工業製品の普及とがあいまって、日本人への信用 “ガランチード” は決定的なものとなったのである。

### 山羊と毒蜂が占拠した高拓生の故郷

ビラアマゾニアは巧ち果てていた。

本部建物は、土の壁一枚だけが残っているだけだった。職員用住宅や病院などはその姿を残していたが、住む人もいない。

後に、集会所や事務所に使われた神社のような木造日

本建築がある。高拓に貫かれていた「八紘一字」（世界をひとつの家とする）の思想を象徴するものとして“八紘会館”と名づけられていた建物である。

尾山さんは、その建物に近づくなど、私を制した。危険な教会蜂の巣が多いのである。建物の内部は間仕切りひとつない講堂のようにガランとして、ヤギが数頭寝ている。床に一面すきまなく敷きつめられているような黒い小さな玉は、ヤギのフンであった。



昭和十六年十二月八日の日米開戦を、高拓生たちはここに据えられた短波ラジオで聞いている。日本からの“浪花節”の放送もよく聞こえた。その“浪花節”は、日本軍がニューヨークへ攻めこむのだと唄っていた。

開戦前、このビラアマゾニアへ日本の陸軍の軍人がやってきたことがある。西某と称したその佐官はこの八紘会館で、「世界には日独伊のみが残り、ロシアも消える。日本は神国であり、戦争には負けない」と演説した。そして開戦である。「ああ、アメリカと戦争して勝てるわけない、と家内と笑ったもんですよ」

マナウスで会った元・高拓三回生の引卒者、高村正寿さん（七十七才）はこう語っている。

開戦後、ここにブラジル陸軍の一個小隊が采た。船付場と発電所の入口に機関銃を据えて全ての建物の家宅捜査を行った。兵隊たちは船に寝泊りして、険しい表情で敵性を警戒していたが、危険人物のいないことを知ると日本人と友達のようになり、酒を飲みあうようになった。

翌年、支配人の辻小太郎氏はビラアマゾニアをブラジル人の医師、ビパルマ・リーマ氏に売却した（文庫編集部注？）。それはさらに州政府を経て、ジョッタ・ゼ氏へと転売され今日に到っている。

一九三〇年（昭和五年）、この土地で原始林の伐採が開始されてから十二年の間に、農事試験場発電所、職員住宅、気象観測所、学校、病院、八紘会館などが建設された。ゴム園は四百畝、カスタニア・ド・パラ（パラ栗Ⅱプラジルナツツ）の植付けは百畝にのぼっていたし、食料自給のため飼育されていた牛は五百頭、さらに商品（売店があった）だけでも二千コントス分もあった。

ジョッタ・ゼは、それらをすべてひっくり返してわづか七百コントスで買ったと伝えられる。

アマゾンでは、木造建築は高温多湿のために二十年はもたないと言われている。だが、八絃会館は四十年経つた今、毒蜂とヤギの巣とはなっているが「修理可能な状態にある」という。記念館として保存しようという話も出ていた。

尾山さんは、ここがメイン・ストリート、この病院のあの部屋に戸田医師が座っていました、と、往時のにぎわいを説明してくれた。

いま残っている“遺跡”と、尾山さんの話を総合すると、ここに整然とした植民地の姿が浮かびあがってくる。私の頭には、その姿にベルテラのフォード・ゴム園のプロジェクトが重なってきて仕方なかった。上塚氏の情熱には、アマゾンの開拓をアメリカ人の手ではなく日本人の手ですすめたいという競争意識もこめられていたにちがいない。このプロジェクトの資金をアマゾンへ送っていたのは上塚氏だが、それは政府の補助金と、上塚氏が財界から集めた金であった。

一九三二年（昭和七年）の上塚氏の書簡には、次のような記述がある。「……………東京本部の処置は誠意を欠くところありましたが、当方より昭和七年度分研究所及練習所経費として九月末までに粟津君の手許まで送った総額は別紙明細の通り第一回生預り金五千円は別途送金として、

諸機械購送費まで通算すると、合計百八十六コントス余になつて居ります。今日の為替相場にすると邦貨六万五千円近くになります。之れ丈の資金を調達するのに本部がどれ丈苦心をして居るか、……本部が政府より今年度に受けて居る補助金の額は僅かに二万三千二百円に過ぎません、其の残部を作るのに小生は全く心を焦し身を碎いて居ます」。この書簡によれば、一年間に現在の貸幣価値で三億円近い資金を集めてアマゾンへ送金しているのである。

巨額の資金と「八絃一字」の理想と、数百人の若者を送りこんだビラアマゾニアは、いまここに朽ちている。だが、高拓生たちはそれぞれの道を歩み、理想の火はいまだ消えていなかった。

### ジュート成功の陰にユダヤ商人

川上夫妻がビラアマゾニアに到着した前年に、失敗を続けていたジュートの試験栽培が成功した。それを成し上げたのは、私を今回ビラアマゾニアへ案内して下さった尾山多門さんの父・尾山良太氏であった。

尾山良太氏は、ちょうど五十才のとき、一九三三年（昭和八年）十一月のモンテビデオでブラジルへ渡つてきた。

岡山県後月郡井原市の出身。資料によれば「農業新聞を発行するいっぽう、三蘭農協組合理事岡山県憲政会遊

説部長」であった。

多門さんが、良太氏宛の犬養毅首相の直筆の書簡を保存しているように、良太氏は政治家を目指していた。自分の田畑を売却した資金で、市議員や県議員に立候補するが落選。「それで、アマゾンへ行ってひと旗上げてやるという気だったんじゃないですか」と、多門さんは言う。



故・尾山良太氏（年代不詳）

犬養首相との政治ルートを通じてだったのだろうか、高橋是清農商務大臣の秘書官であった上塚司氏と知りあい、アマゾンア研究所岡山県支部長を務めていた。

良太氏は、長男の数馬氏（現在・カスタニャール在住）を高拓に入学させ、数馬氏は二回生としてビラアマゾン

アへ入っている。「父は上塚さんからアマゾンへ行かんかと言われてずいぶん悩んだようでした。父の兄弟が上海にいて、そこまで相談に行っているんです」

兄弟は、支那もいいが戦争になると危ない、むしろ南米のほうがこれから発展するだろうと賛成した。

五十才という年令での家族移住にかなりとまどったのだった。良太氏は、妻と多門氏をはさむ二人の娘とともにビラアマゾンニアからアンジラ模範植民地へと人植した。多門氏にはもうひとり兄がいた。二年後にアマゾンへ呼び寄せたが、その一年後、二十二才でマラリアで死亡している。

アンジエラ植民地（本部から十<sup>キ</sup>）に入った尾山良太氏は、十二月にインド産のジュートの種を播いた。高拓生はジュートを半ばあきらめていたようで、六組の家族移住者のうちでもジュートの栽培をおこなわない者もいた。

二月には川は増水し刈り入れが始まった。植付けたのは五畝である。このジュートを刈り、繊維をとる仕事は五〜六人の労働者を使って三カ月かかる。「父は刈り入れの資金がなかった。それで支配人の辻小太郎氏に相談した。でも、そういう予算はないと断られて、パレンチンスのアブロンというユダヤ商人に借金を申し入れたんです。ジュートのインビラー（繊維）を見せて頼んだら一コント借してくれましたよ」

借金といっても現金ではない。労働者には生活必需品

を「現物」で支払う。その商品を一コント分借りたのである。砂糖、塩、マッチ、石油、コーヒーなどである。

この年の十月、現地へ来た上塚司氏に対して良太氏は借金のことを話した。それを聞いた上塚氏は、「そりやいかん、そんなことをしては日本人の恥になる」と、ユダヤ商人にポケットマネーですぐ返済している。ジュートに情熱を傾けていた辻小太郎氏が、なぜ尾山良太氏を助けなかったのかはよくわからない。二人の仲がよくなかったことは事実のようである。

さて、刈り入れが始まって間もなく、他のジュートより三十センチほど背の高い株を発見した。まだ伸びそうであった。

「おい、これは変わっているぞ。それだけは残しておけ。おまえたち、他にも探してみる。気をつけて刈れ」

尾山氏は二人の息子に命じる。それまでの試作ジュートは背の高さが一・五尺ほどで、その繊維推は商品価値がないわけではなかったのだが、よい繊維推をとるためには四尺ほどの背丈が必要だった。

探した結果、もう一本長いものが発見された。わずかに二本である。インド産の種子に異種が混っていたのか、あるいは突然変異かはわからない。川の水は増水が続けているが、その二本のジュートは伸び続ける。尾山氏は、流木に倒されないよう、密林から木を切ってきて丸太を四本、ジュートの周囲に立て、シッポー（かずら）で巻いて添え木とする。

尾山氏は、同じ家族移住の中内義正氏を呼んだ。「中内さん、こういうのが出たんだ。刈るときは注意したほうがいい」中内氏は、南ブラジルへ転ずると言っていたのだが、尾山氏は「何とかなるから待て」と引き止めたのだと、多門さんは語っている。

ジユートは、増水してきた水に漬ったまま伸び続けたが、二本のうち一本は流木に倒されてしまった。

### 血を吸うと二十センチになるヒル

「朝になると私がカヌーに乗って釣りザオをもって見張りに行きました。流木から守るため、一日魚釣りをしながらの番です」

こうして、四月になって四畝のジユートから種がとれた。水面下の茎は死んでいて、水際にわずかな白い根が出ているだけであった。実は、十二個。その実の殻の中に、ゴマのような種子がそれぞれ四十〜五十粒はいつているのである。合計五百粒あまり。

この種が元となって、アマゾンにジユート産業が確立した。この種子は、後に尾山種と名づけられた。

山崎太郎氏（高拓四回生・六十三才）がまとめた資料によれば、第一回ベレン向製品の出荷は一九三七年（昭和十二年）の八・九四一トンであった。この成功を知った高拓生および一般家族移住者は、アマゾン川の上流と下流千キロに分散してジユート栽培を開始した。

戦争中も、日本人はジュート栽培を中断しなかった。その種と栽培技術はアマゾンのブラジル人にも伝えられていった。彼らは日本人のもとでジュート栽培、収穫の労働をおこないながら技術を身につけて、独立していった。ちようどピメンタ・ド・レイノがブラジル人の間に広がっていったのと同じである。

一九七七年の資料によれば、ブラジル人の栽培家族数は九万あまり、作付面積十万余、年間生産高は三万五千トン（邦価三十五億円）になっている。

一九七二年（昭和四十七年）五月十五日午前七時、尾山良太氏はパレンチンスで亡くなった。九十才であった。パレンチンスの生徒数五百五十人の小学校は、尾山氏の名を永遠に残すため「リョータ・オヤマ小学校」と命名された。

尾山氏の出身地は、蘭草の産地である。日本では畳表の原料となる蘭草だが、これは水田などの湿地帯に栽培される「繊維作物」である。ジュート（黄麻）との関連は大きい。

尾山氏は、日本でこの蘭草から敷物をつくる家業を営んでいた。ジュートの栽培種の発見は偶然ではなかったのである。

数年にわたって試験栽培がくり返されていたが、早くからその中に尾山種”がいくつか出ていたのではないかといわれる。だが、だれも発見しなかった。尾山氏にして初めて発見できたといえるかもしれない。彼には、そ

の素地があつたからである。

今日、このジュート栽培を続けている高拓生、一般家族移住者は十家族あまりにすぎない。戦後「ジュート移民」が日本からやってきたにもかかわらず、一九六〇年代半ばをピークとして、牧場経営などに転じてしまったためである。

マナウスの高村正寿さんが「ジュートもぐりはいやだな」と言うように、この仕事は肉体を酷使する。

雨期には川の水が浸水してくるバルゼア（低湿地の新沖積土地帯）がジュートの栽培適地である。刈り入れ期が冠水期に重なる。一日でも刈り入れが遅れると水との戦いが増す。「水が出れば鼻だけ水の上に出して手探りで刈る。日本人は、それで下駄をはいて呼吸を確保した」ものだという。ジュートは刈るだけでは仕事は終わらない。皮を腐らせて中の繊維だけをスツと抜きとらなければ商品にならない。刈りとった茎を、再び水に漬け、上に重しを置いて数日間放置する。その間にも水はどんどん増えていく。刈り入れが遅れると皮は固くなるので、腐らせるのにいっそう時間がかかる。ますます水は増えていく。耕地は海と同じになる。

「そうになると、どこに漬けたかわからなくなって、三ヶくらい水にもぐっては腐らせたジュートを抱えて浮びあがるんです」

上では女、子どもがイカダに乗ってそれをうけとる。水は、ジュートの腐敗であおくドロドロとなり、腐臭も

ひどい。アンデスおろしが吹いて気温が二十度以下になつての水中作業は寒さで耐えられないものになる。体を温めるため、ピンガ（酒）を飲みながらもぐるぐると大酒飲みになる。一日一本飲む。



仕事が終わって体を洗っても、ドロドロのあおい水は皮膚にしみこんで、朝起きるとシーツが人型に緑色に染まってしまう。水中には、スクリユージュ（水蛇）や二趾半もある電気ウナギもいる。体を衣類で覆っておかないとヒルがつく。頭と尾で逆U字型に吸いつくヒルは、血を吸うと二十秒にふくれあがる。無理に引きぬくと舌が体内に残って化膿する。「舌は体長と同じだけ体内に入っている」という人もいた。背中に何百という子どもをのせているヒルがいて、それがバラバラと肌につくこ

ともあるという。尾山良太氏は、ジュート栽培の機械化の必要性を説いていた。が、そのジュート新時代はまだ訪れていない。

### いまでも生きる高拓生コネクション

高拓卒業生は、一九三七年（昭和十二年）の第七回生まで計二百七十二名がアマゾンへ渡った。だが、第一次大戦の勃発とともにアマゾニア産業株式会社は解散させられ、彼らはアマゾンに放り出された型となった。高拓生は、アマゾン川の沿岸にちらばってそれぞれジュートや牧場の経営者となった。見かけはバラバラであった。だが、同窓生の高拓コネクション、高拓ネットワークは強く生き残った。

山崎太郎さんは、七人の高拓生と「共同農園」を発足させていた。すでに一九三七年（昭和十二年）のことである。最終的には、サンジョアキン（パレンチンスの下流）に三千畝の土地を持ち多くの労働者を雇ってジュートや牧場の経営をし、それは一九六七年（昭和四十二年）まで続いた。

農園の経営と平行して「船」を使った商売を始めたのは一九三九年（昭和十四年）である。もともと二十五トンの船で、小さな規模だ。幅四・五呎、長さ三十呎の鉄造船（百二十トン）を使ってベレンからマナウスの近くまでにわたる広範囲の商売を開始したのは一九六二年

(昭和二十七年)で、一九七七年(昭和五十二年)まで十五年も続いた。この交易をブラジル人は「レガトン」という。レガトンは、少し金ができればだれもがしたがった。山崎さんたちが始めようとしたとき、すでに三百隻のレガトン船がアマゾン川を上下して、「おまえもやるのか」と冷笑された。すでに飽和状態であった。

商品をベレンで積みこみ、町に寄港しながら物々交換をしていくレガトンはふつう年に四航海であった。一航海三カ月である。

山崎さんは、年八航海にした。商品の回転を早くすることで価格を下げ、また、スケジュールの正確な航海をおこなうことで信用を得る。レガトン開始四年目で、売上げ高は三百隻の中で一位になってしまう。船でしか行くことのできないアマゾン沿岸の町では、生産物売るにも生活必需品を入手するにも「船」に頼るしかない。そこで、レガトンはその両方の役割を兼ね備える。生活必需品を売り、産物を買う。その商売はしばしば貨幣を必要とせず、物々交換になる。あるいは、商品を先渡しして、後に金利分をのせた産物で支払いをうけるという掛け売りシステムも多くおこなわれている。「船の大きさは限られているので、できるだけ嵩が小さくて値段の高い商品を積む、そこが頭の使いようだね」といえば次のような商品である。

砂糖(四百俵)、コーヒー(三十俵)、ピング(二百箱  
|| 九千六百本)、機械油(二千<sup>リットル</sup>)、コミニョ(肉料理用

香辛料六俵)、ハンモック (五百個)、火薬(四百キロ)、散弾銃用鉛玉(四百キロ)、医薬品(マラリア薬、抗生物質など二十種類)。このうち、火薬や銃弾は山崎さんのみに許可された独占商品だったし、医薬品は重量に対して値段の高い割のよい商品で許可された者だけが扱えた。あと、嵩に余裕ができた分だけ塩を積む。

燃料は二十タンボール(ドラム缶)。帰途に十五タンボール買う。エンジンは百五十馬力のジーゼル、ダイヤ(三菱製)。

乗組員は、プロピレタリオ(船主〓山崎さん)、そのアジユダンテ(助手)、コマندانテ(船長)、マリネーロ(操舵手二名)、マキニスタ(機関士と助手で三名)、タイフェール(給士)、コジネーロ(料理人)、コンベスタ(労働者二名)。

航海は夜に限り、朝、町に着くよう時間のロスを省く。さて、ベレンを出港して寄港する町は三十七。町ではない川沿いの開拓地も多い。各地で買ってくる商品は、ピラルクーの塩漬け(一匹八〜十キロのもの三〜四千匹分)、ワニの皮(二〜四千枚・現在は禁猟)、カスタニア(パラ栗〓ブラジルナッツ)、ガラナ、スクリュージュの皮(水蛇。合計の長さで二千分。長いもので八・五分ある。ベルトなどにする)など。四十七の寄港地のうち、三分の一は“高拓生の土地”である。

必ず、麻雀をつきあわされる。各地の高拓生の信用は大きく、そこを基地にすることで商売は著しくはかどる。

取引き相手をフレーゲスと呼ぶが、ひとつの町に何人フレーゲスがいるかが、レガトン船の力となる。ふつう船主は船から降りてセールスして歩くのだが、山崎さんの場合は向うから買いにきたという。

レガトンは、商品と情報を運んでくるアマゾンならではのビジネスで、山崎さんのサンジョアキン号がトップにランクされたのは、やはり全アマゾン高拓生ネットワークのおかげであろう。

高拓生はアマゾンに根づいたのである。



## 第8章

### 深き祈り川面の果てに届け

崎山ファミリー、マウエス湖畔の団結



マウエス川の落日

## 人間が電話線になる町

最近では日本からアマゾンへやってくる人が増えて、年間五〜六百人にのぼるといふ。魚釣りをねらってくる人も多い。が、そのほとんどがベレン、サンタレン、マナウスとそれぞれの近郊でお茶を濁して、アマゾンの探険をしてきたなどと吹聴する。これでは、アマゾンの一割もわかったことにはならない。マナウスより上流につい

ては後に報告するが、ベレン〜マナウス間で、日本人なら見落せないところがある。マウエスだ。マウエスを見ずにアマゾン語る資格はない。泥色の水の多いアマゾンで、ここばかりは鮮やかな青い水が流れている。

マウエスは、パレンチンスから上流へ直線距離で百二十キロの、マウエス川沿いの町である。アマゾンに詳しい人は、ここをアマゾンで最も美しい土地といい、また、日本人のメンタリテイにぴったりのところという。マウエスの風景が白砂青松（松はないが）と形容されて久しい。アマゾンが好きな私としては、ここを観光客と釣客に荒されたくないのでもあまり書きたくないのだが、マウエスには四十九年にわたる日本人の歴史があるので報告しなければなるまい。

パレンチンスから再び例のバンデランチ機に乗りこむ。機内の暑さに加えて気流の加減でゆらゆらと揺れるので、もはや下の大原始林に感動している暇などない。アマゾンでは小型プロペラ機の墜落の話をよく耳にする。幸い、墜落＝死亡ということが少ないようで、それはプロペラ機が多いことと、下が一面の森林であることによるらしい（落ちたが死ななかつた人にも何人か会っている）。また、船か飛行機しか“足”のない地方が多く、飛行機の利用率が高いため事故率も上昇するということなのだろう。もつともそれは七年前の話で、トランスアマゾニカなどの開通によって、交通機関は自動車が主力になりつつある。と、いつてもパレンチンスやマウエスは道が通

じていないので、バンデランチに頼らなければならぬ。パレンチンスくマウエス間は船だと十時間ほどだが、東京の山の手線のように便数が多くないので、よほどの暇人でないと利用できない。

マウエス空港は原野の只中だった。” 空港ビル” は、私の住む東京のささやかなすまいよりも小さく、降りたお客は二人。タクシーもない。ウロウロしているとターバ航空の当地支配人が自分のフォルクスワーゲンで町まで連れていってくれるシステムになっていた。彼も、バンデランチが飛び発てばもうここに用事はなく町へ帰るのみである。

パイロットは、「空港ビル」の隅にあるアイスボックスからコカ・コーラをとり出し、喉をうるおすとふたたびバンデランチに乗りこんで飛び去っていった（パイロットでも機内は暑いのだ）。

マウエスには、崎山忍さん（六十七才）が住んでいる。運転する支配人のおやじに”ジャポネス”（日本人）と

いうだけでOKである。町の人すべては、私のような”よそ者”が来るとすぐ察知し、あれは誰だと噂は広がり、翌日にはどこに泊っているかまで全町民が知ってしまう。

崎山家でフォルクスワーゲンを降りるとき、**フ** 出発の便の日時を告げる。支配人は時間通りにちやんとここまで迎えに来てくれるのだという。（もつとも四百二十円の前払いである）。

この町にも、カラーテレビがはいっていた。にもかかわらず、地方通話のできる電話は一台しかない。それは電話局にある。たとえばベレンから崎山さんにかけてようと思えば、マウエスの電話局を呼び出しその旨電話局員に伝える。そこで、局員は近ければ走って（遠ければバイクで）崎山さんを探しに行く。つまり、人間が電話線になるのだ。少々時間はかかるが、相手が出るまでの待時間は無料で、たいへん良心的だ。

仕事から電話から手が離せず、早朝でも真夜中でも電話にかじりつく生活をしている私にとって、ここは天国である。電気によるコミュニケーションではなく、町ぐるみ人間と人間のコミュニケーションが生きている（もつとも近々、各戸に電話がはいるのだそうである）。

崎山さんは、美和子夫人（六十一才）と二人で、立派な一軒家に住んでいる。庭の先をおりていくとマウエス川で、そこに商売用の小型船・大洋丸が停泊している。”大洋丸”という命名は、ベレンにあるコンパニア・デ・ペスカ大洋（大洋漁業の現地法人）で、長男の忍美さん（四十二才）が副支店長を務めていることに因む。

「子どもたちは町（都会）へ出てこいというが、僕はここが面白いものですからね」といいながら崎山さんは半ズボンにツバのあるスポーツ帽といういでたちで、ホンダのバイクを操って、バタバタバタ……と、町を案内して下さった。私は、崎山さんの腰にしがみつく。



## ” 白砂青松”と”幻の秘薬”

マウエスの美しさは、川の美しさである。アマゾン川は、薄茶に濁った “トノコ色” ときまっているが、支流によっては黒っぽい水も、青い水も多い。しかし、概してトノコ色だ。その水について、マナウスの高村正寿さんはこんなことを話していた。

「マデイラ川の増水期の水なんていうのは味噌汁どころじゃないね。コップに入れておくと水は澄んでくるが、下三分の二は泥。中にはときどき小さなペッシ（魚）が泳いでいるんだが、まあ、それでもけっこう飲めるし、泥水のほうがかえって腹をこわさないものだよ」

マウエスではこういう体験はできない。

マウエス川の水はあくまでも清く澄んでいる。水が引けば河岸に白砂まであらわれる。川幅一<sup>キ</sup>ほどのマウエス川をながめる。釣人がカヌーに乗って糸を垂らしている（お断りしておくが、それは道楽の釣りではなく、今晚のおかずを待っているのである。かの釣りの大先生が、道楽の釣りのためにこの地へ来られませんことをお祈りします）。さて、その釣人のカヌーのまわりの水がまっ白なのだ。青い川の一部が、ポツカリと白く染っている。空を見上げる。彼の頭の上には白い雲がある。その雲が川面に姿を落していたのである。

崎山さんは、小型のモーターボート（船外機）を出して、私をそのマウエス川の只中へと連れ出してくれた。小さな支流にはいつていく。といっても水中林のなかをぬけていくので、ジャングルを歩いているのと同じだ。小鳥が頭上をかすめていく。どこが “道” なのかかわからないが、ときどきすれちがうカヌーがあるので、この水びたしの密林にも道はあるらしい。木々の緑と、白い雲と、青い空が波ひとつない水面に写って、まるで足の下が空である。私は空中を漂っているような幻覚にみまわれる。また、ガヌーが采た。二<sup>ギ</sup>半のカヌーいっぱいに白く輝くものが腹をみせている。獲れたてのピラルクー（最大の淡水魚）である。これから市場へもっていくという漁師だ。食料が足りないマウエスではたちまち切り身が売りきれるといふ。

モーターポートはスピードを増す。空と雲とをきり裂いていくようだ。この、マウエスの美しさこそ、四十数年前に日本人がここに開拓地を設けた最大の理由であった。モーターポートを降りると、私は崎山さんのタバタバタのうしろに乗っかってガラナ園に向う。ガラナは、日本人がマウエスへやってきた、もうひとつのねらいだった。

桑の木の枝葉が張りすぎたといった感じの植物である。半蔓性植物で房状の果実を採る。果肉の中に漆黒色の種子がある。重さ〇・五g。日本や欧米では、この秘薬を飲めば眠っていた体はたちまち怒り狂い、天を睨んで暴れまわると信じられている。ちなみに、すべての薬品にはブラスボー効果というのがあって、効くと思うと効いてくるという要素が五十割はあるそうである。

ガラナには、コーヒーの五倍近いカフェインが含まれているので、興奮作用はないと否定はできないのだが、といって、コーヒーのようにガブ飲みするものでもない。ブラジルでは、日本でみるジンジャエールそっくりの炭酸飲料「ガラナ」が広く飲まれている。ほとんどが人工香料しかはっていないというが、マナウス製は天然エキス入りだそうで、たしかにひと味ちがう。と、そこで満足してマウエスにやって来ると嘲笑されかねない。当地では、ガラナの実をつぶして棍棒状にカチンカチン固めた純生を用いている。右手にまっ黒の棍棒、左手にピラルクー（たびたび登場する全長二mを越す大魚）の

舌を持ち、舌のザラザラをおろし金代りにして粉末化する。それを砂糖とともに冷水で割って飲み干すのである。とくに、インヂオの作った棍棒が最上であるけれど、マウエスでもめったに入手できない。町で売っているものはまぜものがあるのだという。風格もちがう。比べてみる。

町で売っていたもの Ⅱ 直径二センチ、長さ十五センチ、重さ百グラム。色はチョコレートそっくり。

インヂオ製 Ⅱ 直径四・五センチ、長さ二十五センチ、重さ五百グラム。色は黒光りと呼ぶにふさわしい。

簡単に外観を比較するならば、インヂオ製が一升ビンなら他は試験管である。鼻に押しつけると、特上品はツンとくる香りがあるのに、一般品はいささか弱かった。効能は、まだ試す機会に恵まれていないが、アマゾンではいかがわしい目的ばかりに使っているわけではない。

万病に効く長寿薬として、インヂオが大切にしてきた薬なのである。カフェイン以外の成分、ガラニック酸（百グラムに八・五グラム）にその秘密があるようだ。

## マウエ族の悲恋物語

ガラナにはマウエ族の悲しい伝説がある。

マウエス河畔に住むマウエ族の酋長にオニウムサベという娘がいた。黒味がちな大きい眼をもつ魅力的な美人

で、頭もよく動物や野生の草木に精通していた。病人があるとき、薬草を与えて喜ばれていた。

ある祭りの日に、隣の部落の酋長が息子のノソケンを連れ嫁探しに来た。ハンサムなノソケンが美人のオニアムサベと恋仲になり、夢のような祭日を過ごした。河辺に白砂の出るころを結婚日と定めて二人は別れた。だが、娘の兄弟は、娘が嫁に行くとき薬をつくってもらえなくなるというので、ノソケンの家へ送ろうとせず、ノソケンも迎えに来なかった。

悶々の日々を過すうちオニアムサベは恋人・ノソケンの子を産み落した。その男の子はノソケンそっくりだったので、娘は愛し育てた。少年となった男の子は、パラ栗の木が好きで、ある日その実を食べてしまった。

マウエ族ではパラ栗を食べることは厳禁されており食べた者は殺されることになっていた。少年は母の哀願も届かず殺される。オニアムサベは泣きながら埋葬した少年に向ってこう祈り続けた。「おまえは賢い子で自然の力なる力をもっているから、多くの人が苦しむ病を救っておくれ」

すると、少年の両眼から二本の木が生えて花を咲かせ、実を結んだ。オニアムサベは、これは少年の生まれかわりだと喜んでさかんに食べたところ、悲しみに弱っていた体がたちまち丈夫になり、病人たちにも与えると、やはりすぐ元気になってしまった。これは、他の種族にも広まっていった。この実がガラナである。

いまでもそうだが、ガラナはもともとインヂオのマウエ族の特産品であった。いまから五十年前、マウエスのブラジル人はガラナの栽培をおこなっていなかった。

いっぽう、需要は大きく商品価値も高いという条件があった。だれかが先にリ栽培リすれば、事業として十分に成り立つ。

このことに気づいたのが大石小作氏であった。大石氏は、大正末期にアマゾンを視察しガラナ事業を企てる。帰国後、アマゾン興業株式会社を設立、一般移住者を募集した。

一九二九年（昭和四年）大石氏は再びマウエスへ渡り、ガラナの植付を開始。翌年から家族移住者、独身青年などが続々とマウエスへ到着し、一九三二年（昭和七年）までに職員も含め九十家族が入植する。だが、経営は発足時から計画性に欠けていた。第一回入植者到着直後に、大石氏は会社を辞職してしまう。現地の指導には、第二回入植者の引率をしてきた同社の柳沢猛雄専務があたったが、事業は挫折し、結局一九四〇年（昭和十五年）に上塚司氏のアマゾニア産業株式会社に吸収という推移をみせる。

入植直後に放り出された移住者たちは茫然とするが、二年目の一九三二年（昭和七年）崎山さんの一族がマウエスへ到着し、元気をとり戻す。すでに四十家族が残るのみだったが、彼らはガラナ園（四万五千本）の復興に力をそそぎ収益をあげた。

一九三三年（昭和八年）には、崎山グループとともにマウエス日本人会も設立した。

さて、崎山さんの一族とは、私を案内してくださっている忍さんの父上・比佐衛氏を指導者としてマウエスへやって来た人々のことである。アマゾン興業とは組織も理念も異なる一団であった。

比佐衛氏は、東京・世田谷にあつた海外植民学校の設立者で、大正く昭和初期にかけて海外へ青年を送り出す指導者として信望の厚かった人である。一八七五年（明治八年）高知県に生まれ、北海道開拓を経験。のち、東北学院、青山学院に苦学した熱心なクリスチャンであった。

一九一四年（大正三年）に十四カ月にわたる北南米視察をおこない、これからの青年は海外へ出るべしという結論を得て、この学校を設立した（一九一八年・大正七年）。顧問や評議員には当時の大物が名を連らね大きな期待を寄せられていた。

たとえば、財界の大御所、渋沢栄一、森村市佐衛門、三井財閥の団琢磨、のちに首相となった浜口雄幸、文相の鎌田栄吉といった人々である。

比佐衛氏は、一九二八年（昭和三年）に再度南米を訪問、マウエスに分校を設置することを決定し、自ら移住したのである。

## 体温計から水銀もはみ出した高熱

アマゾンへ出発する前、比佐衛氏は講演会で熱弁をふるっていた。

「南米の父と母とにことといて そのひめぎみに婿やおくらん」

父というのはアンデス山脈、母とはアマゾン河でございます。姫君とは即ち父なるアンデス、母なるアマゾンによって出来ました広大な平野でございます。この大平野に大和男子を婿として送ろうというのでございます」  
だが「白砂青松」のマウエスも、密林を伐採したあとの耕地は決して肥沃な大地ではなかった。

開拓地は、マウエス川の対岸で町から六キロの地点だった。すでに、サンパウロへ渡っていた卒業生が耕地づくりの準備をすすめていた。比佐衛氏は、マウエスへ入る途上、ベレンの日本人からアマゾンでの農業が簡単にはいかないことを知らされる。マウエス到着後に母校に宛てた書簡で、こう述べなければならなかった。

「私は日本に於て考えた時は私共一家十人が四、五年後には半日働けば生活出来るだろう。そうなれば後の半日で勉強する自給自足の其の植民学校にする積りでしたが、ベレムを始め此地方の先輩の話によると其はなかなか難かしいとの事で御座います。実際出采ないものならば五年計画は十年、或は二十年かけてやる外ありません」

「重ねて申します。南米特にアマゾンに来ようという人は、信仰の人、祈りの人でなければなりません。それから鍬を執り斧を執って自ら働く人でなくてはなりません。而して倦まず怯まず、余り経済々々といわず、暑さに耐え粗食に甘んじ、百年の将采を夢みつつ現在といえる我を、アマゾンといえる祭壇に献げて喜び感謝し得る人でなければなりません」

朝は五時半に起床、讃美歌を唄い、祈祷ののち朝食。朝食は、フアリーニヤにカボチャの汁をかけたものであった。労働は十一時まで続き、昼食は、朝食に米飯が加わる。午後は一時にガラナ水を飲んで働きに出て、五時半から六時まで働いた。

作物はガラナが中心であった。八年目から収穫できた。「でも、日本人がマウエスへ入ってからマウエスのブラジル人がガラナの組合をつくって、この商人を通さなければ輸出できなくなってしまうて……」

忍さんによれば、初期の日本人がポルトガル語に精通していなかったことも躓きとなったようである。いっぽう、日本では大陸進出が最優先という時代になり地球の裏の南米への関心は薄らいで、海外植民学校も閉鎖された（一九三四年・昭和九年）。美しきマウエスを「健康な土地であることは確かです」と比佐衛氏は語って、百年の将采を目指していたが、まったく予想しなかったマラリアの猛威が襲う。健康に暮らせるという最後のよりどころが崩れた。ほとんどの日本人がマラリアに犯された。

比佐衛氏も例外ではなかった。が、連日三十九度の熱でも休むことをしなかった。

「おばあさんや（田鶴子夫人）、俺の生命も余り長くないぜや、一鍬でも打ってくるからの」。その日も比佐衛氏は働きに出た。しかし、二百以離れたガラナ園で熱は四十度を越し倒れる。比佐衛氏は、涙を流しながら神に感謝切祈りを捧げていた。家へ戻るのに一時間以上かかった。

田鶴子夫人も高熱で床に伏していた。そこへ比佐衛氏がようやく帰ってきた。「おばあさんや、今日は疲れたぜや、歩く力がないもんやけに這って来た」それから四日後、一九四一年（昭和十六年）七月二十四日未明、比佐衛氏は息を引きとった。六十八才であった。



岡山比佐衛氏の墓

母校の閉鎖とともにマウエスを本校として学校、教会などを建設する計画も実現することはできなかつた。「一九四一年から二年間、悪性マラリアが大流行しました。ビラアマゾニアから戸田医師もまわつてきてくれて注射器やキニーネのアンブル、パルダンという薬もありましたが、全然効きませんでした」

二十人以上の崎山一族は、ひとり残らずマラリアに犯されていた。少し元気な者が食事をつくり、ひとりひとりに注射を打つてあるく。一族は腹ばいに並んで尻を出す。全員が百本以上の注射を打たれた。忍さんの長男は注射の跡が腐つて穴があき、毎日ガーゼを詰めていた。いまも、腎部には二ツ目玉が残っている。三男は注射針が神経に触れたためか片足が不自由になった。体温計の水銀は、四十度の目盛をはるかに越えてどれだけ熱があるのかわからない。大木をくりぬいて作ったオケに水を張り、熱がひどい者はそこに体を浸して熱を下げるしか方法がなかつた。

近くのブラジル人の部落は全滅した。ハンモックに寝たまま死亡、死体が腐っているのが後に発見されるといふ話も珍しくなかつた。マラリアは、八年間も続いた。

### 海に出たファミリーの子どもたち

マラリアの猛威にアマゾン興業系の移住者たちは次々とマウエスから脱出していったが崎山一族のみはここに

残った。マウエスから六キロの開拓地（ボン・ジエズー  
ス）から、バルゼア（低湿地）のある土地へ移る。マウ  
エスから十キロのここは、川沿いがバルゼアで後がテー  
ラファイルメ（高台）という理想地であった。ベレンに近  
いグアマの横山さんたちが夢見た土地構成である。テー  
ラファイルメでガラナを栽培しバルゼアではジュートを植  
えた。

ここに集まったのはすべて親戚で、崎山、神園、大川、  
横山などの五家族である。クリスチャン・ホームだ。そ  
れぞれの子どもたちだけでも二十数人に達していた。成  
長してから日本へ教育に出すつもりだったため、日本の  
教科書、文房具は十分持つてきてあった。

そこで神園敝氏が学校の先生代りを務めることになる。  
敝氏は崎山家から迎えた精子夫人を結核で亡しており、  
のちのちまで一族の子どもの教育に尽した熱心なクリス  
チャンである（現在・サンパウロ在住・六十九才）。授業  
は朝七時に始まる。国語と算数が主であった。一年生の  
国語の教科書は「さくらが　さいた」で、各学年にあわ  
せて午前十一時まで勉強。毎週土曜日には試験があった。  
戦争中も授業は続けられたが、日本が敗戦したため日  
本へ教育に出すことは断念、マウエスの学校へ編入する。  
子どもたちは崎山学校の特訓のおかげで年令よりも高い  
学年にはいった。

一族は町に家を一軒借りて、女が交代でそこに住んで  
通学する子どもたちの面倒をみた。五家族がすべてにひ

とつとなつて、仕事をし、子どもたちを育てたのである。子どもたちは、ブラジル式のコマをつくったり、川で泳いだり、カヌーで釣りに出たり、マウエスの美しい自然の中で元気に育っていった。マラリアももう来なかった。敝氏をはじめ一族はひとつの夢を持っていた。アマゾンは大河である、ここで活躍するためには船が必要だ、やがては大きな汽船を一族で持とう、そのために船を動かせる人間を育てなくてはならない。アマゾンを開拓していくには海運業の発達が必要ならぬ、そういう時代が来るといふ信念であつた。

子どもたちが中学校へ進学する年令になつて、敝氏は六人の子どもを連れてサンパウロへ出て、洗濯屋を営みながら中学から大学にまで進学させた。子どもたちとの共同生活で自分が手本にならなければと、霜のおりる寒い日でも一日と欠かさず水による斎戒沐浴を続け、神の守護を祈り続けた。

大川家の伝氏は敝氏に代つてマウエスの町で小学生たちの面倒をみていた。また、トメアスーに入植していた遠戚に当たる岩間家はピメンタ・ド・レイノの好景で得た利益をサンパウロへ送金し続け、子どもたちの教育をバックアップしていたのである。

子どもたちはリオ・デ・ジャネイロの商船大学などへ進学する。こうして現在、一族の子どもたちは世界の海を巡る大型タンカーの船長や、ペトロブラス（半官半民のブラジル石油会社）所属船の船長、大型商船の機関長、

大洋漁業の副支店長など海と水に生きるブラジル人となった。

崎山比佐衛氏の甥・崎山盛繁氏（在東京）は、

「子どもたちの教育ができたのは、だれかれの差なく一族がひとつになったからです。マウエスの夢は実現できなかったが、ブラジル社会に貢献できる人物を育てあげることはできました」

と、述べている。盛繁氏も比佐衛氏とともにアマゾンへ入った一人である。入植してからも、夜は勉強を欠かさなかった。

「ウエルスの『文化史大系』トムソンの『科学史大系』どちらも全八巻ほどの本ですが、当時、これを読まねば一人前といえなかった。敵さんがもって来ていたので、夜になるとランプの下で、蚊にくわれて血だらけになりながら読んだものですよ」

家族の一致団結とおとなも含めた向学心、それに強い信仰――あのアマゾンのマラリア地獄に負けなかった理由はこの三つであった。

「いまも毎年九〇十月になると、一族は一カ月の休みをとってここに帰ってくるんです。私が、ここを守っているんです」

忍さんは子どもたちが、ブラジル人の妻、孫たちを連れて一年に一回帰ってくる日を待つ間、“大洋丸”でガラナを集めるレガトン船の商売をしている。生活必需品との物々交換だが、ピンガなどの酒とタバコは売らず、

アマゾンではあたりまえな”前貸し”（高い利子をとる）もしていない。が、きめ細かな商品販売で現地人に喜ばれている。ときにはインディオの部落にも出かける「楽しい」生活である。

## 第9章

### 一億年の森林圏が沸きたつ

古代文明も永遠の生物界も秘める緑の海



密林の伐採そして山焼き

## 遭難と大発見、二つのニュース

「山根さん、大ニュースが二つありますよ」

マウエスから再びバンデランチ機でマナウスへと出てきた私は、一カ月前にここで会った日本人から現地の新聞をつきつけられた。

ひとつは、マナウス進出の日系企業に関するもの。日本からの派遣社員とその家族が船に乗ってアマゾン川の対岸へ遊びに行った帰途、川幅十九キロの真中で船の転覆という事故にあったというのである。幸い、深夜までに漂流中の全員が奇跡的に救出されたとのことで、ひと安心した。

これが、ピラニヤやカンジュル（食肉ドジョウ）にでも襲われていれば日本でのアマゾンに対するイメージがいつそう悪くなる。大ナマズ話を訊いていたので、二才の幼児も助かったと知って（私にも同じくらいの子どもがいる）胸を撫でおろした。こちらは解決済。

「ベネゼエラ国境に近い奥アマゾンにピラミッドが発見されたんです」

もうひとつのニュースがこれだった。とつさに私はペルーのインカ遺跡・マチュピチュ城砦を思い浮かべた。

若い考古学者ハイラム・ビンガムがインカの秘都の存在を信じてウルバンバ川の上流を歩き、肌に吸いつくヒルに悩まされながらついに密林の奥にマチュピチュを発見したのは、一九一一年のことで、つい六十数年前のことにはすぎない。私もマチュピチュを訪ねたことがあるが、壮大さは筆舌に尽しがたい。

むかしから、アマゾンのどこかに黄金境があるという伝説が広く残っている。グアテマラのティカルの遺跡はうっそうたるジャングルの中にこつぜんとピラミッドをそびえ立たせていて、まだ、このアマゾンにも知られざ

る遺跡があるのではないかと思わせる条件はそろっているのだ。

そこにピラミッド発見のニュースだ。私はピラミッド関係の情報を追った。新聞は連日このニュースを報じていたが、一枚の写真もないのが不思議だった。そのうち日本の新聞もこのニュースを伝え、その後、「ピラミッドは山を誤認したもの」というニュースでしめくくられたということを知った。だが、マナウスではその確認がなされないまま「ホンモノだ」「山にすぎない」という議論がくり返されていたのである。日本へ「山にすぎない」と打電されたニュースは、しかもマナウスの事情がわかるはずのないサンパウロ発のものであった。

私の情報収集に協力してくれたのは、ポルトガル語がペラペラの高松ジョージ君（31才）で彼がどういうコネクションをもっているのかわからないが、たちまち、その日のうちに「ピラミッドを見ている」という飛行機パイロットが現われた。彼は、アマゾン上空を二千五百時間も飛んだ経験の持主ですでに一九七二年ごろに見ている、というのである。

この日、マナウスでテレビが上空からのピラミッドの撮影フィルムを流した。だが、パイロット氏によれば、その場所は間違いで山にすぎないという。ホンモノのピラミッドのあるところをインヂオは知っているが、たたりを恐れてだれも近寄らない、とも言う。自分の飛行機で現地へ行ってもよいと進言してくれた。

翌日、高松君から私のホテルへ電話がかかってきた。すぐ来てほしい、発見者である考古学者二人が現われたというのである。

私が、情報を集めていることをどこかで知って、向うから来たのである。

ロルドン・ブランドン氏（五十五才）とリョーク・ユーハン氏（四十二才）の二人はすでに二十五年間、アマゾンの考古学研究をしている人たちで、フィールドワーク専門の在野の研究者であった。すでに彼らの元には、イタリアの自然・歴史博物館からこんな至急電報が届いていた。「ピラミッド発見の報に接し今後の成功を祈る。当方は貴殿の成果に強い関心を抱いており、八月末に貴地へ着く当方の研究団と至急連絡とられたし」という内容である。

では、いったいなぜ彼らは私のまえに現われたのだろうか。それは、資金不足のせいらしいということがわかった。

彼らは、まずボートで川ぞいに奥地へはいり、そこから人跡末跡のジャングルを伐りひらきながら現地へ向った。しかし、数キロ手前で広大な湿地帯へ出くわした。そこから、確かにピラミッドが見えたが、食料などの資材が底をつき、引き返してきた。すでに三回挑戦しているが現地へ到達できない。資金も少ない。私が飛行機で行くというのなら、案内をするので便乗させてほしい、まず、上空からの観察をしたい、というのである。

アマゾンに大帝国があった!?

その日、私は深夜まで二人の考古学者の話を読んだ。テレビで流されたフィルムは、山にすぎないことがわかった。新聞に写真が載らなくなった理由もわかった。彼らは、私に一枚のカラー写真を見せてくれた。未発表のリョークー・ユーハン氏が撮影したピラミッドの遠望写真である。

手前に広大な密林がひろがっている。地平線とともにうす青い山脈が横たわっている。その、山かげに、たしかに二つのピラミッドが認められる。はつきりと三角である。だが、地平線にちかく、ぼんやりとガスがかかっているようで、新聞や雑誌に印刷したのでは認められなくなってしまうのである。だが、このプリントに肉眼では識別できる。「これがピラミッドとは私たちも言いきれない。五分五分だ」と、二人は慎重であった。

彼らは大胆な仮説をもっていた。

かつて奥アマゾンには、モングララーラという帝国があった。現在のインディオが「肌の白い人が統治していた」という言い伝えをもっているその人種で、黄色人種と思われる。

モングララーラはインカの祖先を奴隷に使っていたが一萬二千五百年前にはその統治範囲はきわめて広がった。モングララーラはピラコーシャという直轄の国を持っていた。

たが、それは皇帝の直系の者たちが統泊した。イースター島もそのひとつだった可能性がある。というのは、イースター島にはアクア・クー（水曜日という意味）という言葉があり、今度ピラミッドの見つかつたあたりのインデオも同じ言葉を使っているからだ。

ピラミッドがあるのは、ベネズエラ国境に近いパダワリ川の上流である。背後には、グルピーラ山地が迫っている。その、パダワリという言葉の意味を、インデオは知らない。アマゾンの古い地名はほとんどインデオの命名したものなのに、である。

アクレ州に、モングララーの子孫と思われる非文明人が住んでいる。インデオと大きく異なる社会組織をもち、顔もインデオと異なるし肌の色も黄色っぽい（写真を見せてもらったがヨーロッパ系の顔だ）。この人たちがパダワリ川に親戚がいるはずだ、と語っている。しかも、パダワリという言葉は「いろいろな色をもつ」という意味だ、と説明した。

モングララーは、アカニシ、アカコ、アカヒンという三つの町をもっていた。これはモングララーの言葉で、第一の町、第二の町、第三の町という意味。アカニシがどこにあるかは不明だが、アカコはアクレ州にあるらしく、ピラミッドがあるというのはアカヒンであるようだ。彼らの話はエンエンと続いた。

三千年前にヨーロッパからアマゾンへはいった人種がいてモングララーを助けて、インカの先祖をアンデス山

脈の上へ追いやった、ともいう。リョークー・ユーハン氏のフィールド・ノートには、アクレ州のモングララーの子孫と思われる非文明人が書いた象形文字が記されてあった。

ところで、ピラミッドはさして重要ではなく、その近くにあると思われる廃墟の町（アカヒン）を彼らは探しているという。現地のインヂオによれば、透し彫りのある城壁もあるらしい。ただ、ここに近づく者は必ずアカヒンの人々の魂に触れてたたりにみまわれる。別の考古学者は舟が転覆して危うく死ぬところだった。ブランドン氏の右手は、手首から肩近くまでひどい傷跡があった。二年前からたたりにあう、と言われていたそうだが、その通り猟銃の暴発にあい、現在は字を書くことも困難である。

アカヒンの近くで発見されたという土器片を見せてくれた。それには、ガラスが使われており、インヂオはガラスの技術はもっていない、という。

南アメリカの考古学の知識のない私には、彼らの仮説の可能性もわからなかった。ただ現地上空へ行くには大型の双発機でないと危険であること、できればヘリコプターで上空から降りられればよい、ということなどがわかった。そのどちらも、私の資金力では無理であった。それに、遺跡やピラミッドを確認するためには大量の資材とともに一〜二カ月間、八十坪もの木が密生するジャングルや広大な沼地を進んでいかねばならないのである。

駆け足取材中の私は、どうしても行くことができなかった。高松ジョージ君は、私の断念を叱責したが、現地訪問は次回に譲ることとし、私はその代り一年間有効の東京〜ベレンの航空券を入手して再来を約束したのである。

ピラミッド発見の報は、アマゾンにまだ神秘的な夢があることを教えてくれた。彼らはいまあの大密林の只中だろうか。

### ジャングルで一晩寝てきなさい

「日本人の歩みを取材している？ そりや、話を訊いてくれるだけでは何もわからないね」

「いや、私はトランスアマゾニカへも行ってますし、船旅もし、アマゾン・ネズミも食いました」

「ダメダメ。マット（ジャングル）にヘッジ（ハンモック）を吊って、一晩寝て来なさい」

私を強迫する人があらわれた。

翌日の夕方、私はマナウスから百数十キロ離れたジャングルにいた。ここに数週間いても、人には会うことはないという。この奥は、二十数キロのところにインディオ部落があるだけだ。

強迫者は、私に大型ピストルと弾丸を五十発渡し、自分の命は自分で守れという。彼のそばには、ショットガンと二十二口径ライフルがある。

野営地の近くに獣の足跡があつた。「ここは獣道だ。よく見てごらん、これがビアード（鹿）でこれはオンサ（豹）。ビアードをオンサが追いかけている。三日くらいたっている。こつちにもあるな、かなりいる」

オンサはアマゾンでは少ない大型獣のひとつで、オンサ・ススアラナ（豹）とオンサ・ピンタダ（斑豹）の二種類がある。

オンサ・ススアラナは、体長一・三<sup>メートル</sup>、高さ六十<sup>センチ</sup>、頭は小さく、体の上部と側方は黄褐色で他は白っぽく、耳の外側と鼻の両側に黒斑がある。オンサ・ピンタダは、アマゾン最大の獣で体長二<sup>メートル</sup>。背中と両側は灰あるいは黄褐色で黒斑が目立つ。全身黒いオンサもいるが、それはチャグワレーテ・ピシューナと呼ばれている。

いずれも、簡単に樹上にのぼりよく泳ぐ。視力、聴力もすぐれて力も強い。が、強迫者は私を脅しているのだ。アマゾンの日本人開拓五十年を通じて“オンサに食われた”という話はひとつもなかった。オンサは人の姿を見れば逃げる。むしろ、人がオンサを襲い乱獲されたため今日では禁猟となり保護されているのである。ピストルはオンサに貸してやりたい。

この密林で、私ははじめてテルサード（青竜刀型の山刀）を持たされた。ヘッジ（ハンモック）を吊るために丸太をつくれ、というのである。適当な木を見付け、テルサードをうちこむが、たちまち汗で眼鏡はくもり、ねらいも定まらない。ようやく切断しても木が倒れてこな

い。蔓が巻きついてきているのだ。木としか思えない蔓をひとつひとつ切って、ようやく木を引きずり出す。この丸太を二本作り、次に薪を探さねばならない。枯れた倒木のあるものは、ブカブカに粉のようになっていた。蟻が巣くっている。もし、それがトツカンデーラだったら、痛みと熱に一日人事不省に陥らねばならない。

だが、そんなことに悩んでいては今晚の薪を入手できない。枯木を転し、引きずってくる。安全のため一晩中火をたいていなければならぬから、かなりの量である。私はムキになって倒木をひきずりまわす。

「それじゃアマゾンでは通用しないね」

私のシャツは水を浴びたように汗でずぶ濡れである。強迫者が言うには、私のような力の使い方ではすぐにバテて、体力が続かないし、テルサードも腰がはいつていない。

とつぷりと日の暮れたマットは、ターザン映画とちがつて何の物音もしない。実に静かだ。螢が飛んでいる。つかまえてみるとコメツキ虫だった。両肩に光るところがある。ヒカリコメツキ虫というのだそうだ。

夕食はコーヒーとフアリーニャ、それにわずかな鶏肉である。

ピストルを握りしめたままヘッジで眠る。蚊もムクインも何もいない。月が浮んでいる。密林がある。音もない。それだけである。

明け方、寒さで目を覚ます。たき火に薪をくべ、体を

温めてから再びヘッジにもぐりこむ。

朝、遠くで鳥の音がきこえるが、姿を見せたのは、三十路もの梢の上を飛び去っていった緑色のパバガイヨ（オウム）だけである。つがいだった、まるで手をつないでいるような愛らしさだった。強迫者は、突然、それに向ってライフルを発射した。はずれ。私はホツとする。

マットは清潔そのものだ。原始林のこのもの静かなたたずまいはどうしたのだというのだろう。それに比べて文明地のいら立つ雑踏と、騒がしさ。原始の清潔に対し、文明には不潔という言葉しか与えられない。

苦労を重ねてきながらアマゾンの日本人はアマゾンが好きだ、と言った。それは、アマゾンの清潔さにあるにちがいない。

### クワの刃が折れる土

気持ちが悪くなるほど静かだったマット（ジヤングル）。「清潔」という形容詞しかつけない密林も、ひとたび人間が「開拓」を始めると秘めたエネルギーを大爆発させる。

アマゾンでの戦いは、水と森林との戦いであった。マナウスで、その森林のエネルギーを話してくれたのは、出田務さん（五十五才・マナウス日伯文化協会会長）であった。

マナウス近郊で日本人が始めて入植した土地はマナカ

プール（現在のベラビスタ入植地）であった二九五三年（昭和二十八年）から一九六二年（昭和三十七年）までに百四十二家族が入ったが、百人戸が脱耕したという”緑の地獄”で、大宅壮一氏がその形容詞を使ったのが、ここである。出田さんは、そのマナカプールに一九五四年（昭和二十九年）入植し、一年間ここで辛酸をなめている。現在は三十四家族が定住して”緑の地獄”は懐古談にすぎなくなっているが。

その年の十一月十一日、マナウスに着いた出田さんら二十三家族は、リオネグロ川対岸のカカオペレーラ港へと向う。

「港からカミニヨン（トラック）に乗せられて出発したが、道がすごい急斜面で四十五度もあった。奥さんたちはべそをかき出してね、まあすごいところだと……」  
四十五度ということはないだろうが、トラックは坂を上れず止まってしまう。雨期にはいつていた。入植地の手前四キロ地点からは、ぬかるむ道を所帯道具を背負って歩かねばならなかった。ミシン、脱穀機、タンス、柳行李六個……その運搬だけで二週間かかった。

この開拓地は、連邦政府の植民院の管轄だったが、準備が整わぬうちに日本から移住者が送りこまれてしまったのである。植民地建設の予算も不足していたといわれる。「まず家を建てなければならなかった。板が配給されたが、生の木でえらく重い。長さ四尺の板が重さ三十キロもある。とりあえず自分たちで食べる野菜を植えよう

と種を何種類かまいたが、芽が出てもすぐ枯れてしまう、いくら水をやってもだめ。土の酸度が強すぎたんだ。食べないで放つてあったフアリーニヤがあつた、雨期でカビが生えていてね、カビが出て腐るくらいなら肥料になるんじゃないかと二俵分を腐らせて土にまぜて種をまいたら、大根やキュウリ、トマトができて嬉しかったなあ」作物は米とゴムを植えることになっていた。

ゴムの苗を楯付けるには、タテ、ヨコ、深さ三十センチの穴を掘らねばならない。

「穴掘りが始まったが、まともに掘った者はいなかったですよ。土が固くて固くて、クワを入れるとはね返って、クワの刃が折れるんです。まるでレンガだったですよ」

だが、ここは密林地帯である。最高で三十センチもある木がなぜ生えていられるのだろう。「直根はないんだ。比較的軟質の表土は十センチ二十センチ。そのうすい、わずかな表土にだけ根が張っていましたよ。根は横にしか生えようがないから、表土は根だらけで、まるで大木が横にうねっているようでね、伐採しても地面を網の目のように張りめぐらしている根をすべてとり除かなくては、耕地にできないというところですよ」

大木は、生命を維持するため密生はできない。一畝(三、四坪)に、大人十人が手をつないでようやく抱ける大木は三、四本、あとはひとかかえの木が三、四十本、さらに小さい木がその間を埋める。

根が張れないため、大木はちょうど三角定規のような

支えを生え際にいくつかもっている。それを板根という。  
熱帯降雨林特有の植物生態である。



「それでもね、木はあるていどの大きさになると自らを支えきれなくなつて、生きたまま倒れます。とくに雨期には枝葉もグングン生長するので重くなり、突風でも吹けばたちまち倒れるのですよ。バリバリバリという音が響きわたつて、それは恐いものです」

熱帯降雨林の生態系の新陳代謝は激しい。日本なら倒木が完全に分解するのに二十年かかるところが、ここでは四〜五年で跡形もなくなる。その養分を待っていたように次の木が生長する、そして自然に生きたまま倒れる。

高温多湿、土壤が肥沃でないためにおこる特異の生態である。

アマゾンにはまた、一億年も環境が変わらなかつたため、生物はどんどん進化を続けて無数の種を生んだ。植物は四千種以上あり、あの大密林の中では何キロ歩いて同種の木を発見することが不可能といわれるほどである。それは他の動物でも同じで、ヨーロッパで百五十種、コロンゴ川で五百種といわれる魚類がここでは千五百種以上も棲息しているのである。

### 大木が空を舞う

さて、開拓の第一歩は太古そのままの森林を伐採して耕地をつくることである。

「下刈りから始めます。アマゾンの木には、直径五十センチもある太い蔓がまきついていて、木なのか蔓なのかわからないほど。この蔓が二、三十センチ上へ伸びていつて十本以上の上の木にからみついていますよ。それで、蔓を切り枯らしておかんと木は下で切っても倒れないのです」

「たった一本の木に八十種もの植物が寄生していたことがある」と、生島重一氏は『アマゾン叢書第一巻』で述べている。

「マットをリンパするには、一本一本倒すことはできないから五反（千五百坪）くらいをいっぺんにやります」

リンパとは「清潔にする」という意味のポルトガル語

だが、転じて” 敵を掃討する “ ” 森林を切りひらく ” という意味に用いる。 ” リンパ ” を連発する彼らにとって、密林は掃討作戦という戦争に他ならない。

「五反の木を一本一本オノで切り口を入れていくのです。そうして、その五反のいちばん端の大木を切り倒します。

大木には板根があるから、その上を切るのですがね、板根の高さは四畳もあるでしょ。それであたりの小さな木で丸太をつくり、蔓でしばってやぐらを組み立て、その上にあがってオノをふるうわけです。二人一組でオノで叩くと昼どきにデーレンデーと太鼓のような音が轟いて三キロ先まで届くほどです。その大木が倒れると同時に、五反の切り口をいれた木がすべて将棋倒しになって倒れるのですよ」

ミリミリという音が始まると、道具を抱えて大急ぎで逃げ出す。五反の木は地響きを立てて碎け散る。ひとかかえもある木が地面に反射して飛ぶ。レンガのように固く、クワの刃が折れるほどの地面に、枝が五畳も突き刺さる。嵐で猛り狂う波のように木と木がぶつかりあって木粉を散らし煙のようにあたりを覆う。その瞬間、摩擦熱のために梢煙のような臭いが鼻をさす。

「ところがなかなかうまく倒れてくれんです。上のほうで蔓がめちやめちやに何本もの木を結びつけているでしょ、下を切ってこつちへ倒そうと思っても蔓にひっかかって大木がぐるんと回って全然違う方向に倒れたりするんですよ」

思いもかけぬ方向へ倒れてきた大木の下敷きになって死者が出ることもある。一九六一年（昭和三十六年）に、入植早々の日本人が亡なっている。

ワニのことをジャカレーというが、樹皮がワニの体のようにならず、硬く重い、ジャカレーウバーという木がある。直径一呎、長さ五呎でも重さは一トン以上あるから、高さ三十呎のこの木は枝も含めて十数トンはあるだろう。普通乗用車十台分以上のものが空から落ちてきたことになる。

眼球や脳は飛び失せ、体はあの固い土中にめりこんでいた。即死であった。

「ブラジル人の労働者は地響きがおさまるとヘーイ！ヘーイ！と声を出しあつてバラバラの方向へ逃げた仲間の無事を確認しあっています」マツトの木は、将棋倒しでなければ倒せない。そのため、用材にできるような木を一本手に入れるためにも、五十呎四方の木をリンパしなればならない。

下刈りをして二カ月目にリンパ、さらに二〜三カ月倒木が枯れてから山焼きを迎える。山焼きは十月中旬、雨期の前までにおこなわねばならない。「十畝（三万坪）なら十人がヤシの木の枝でつくったタイマツを持ち横に並んで火をつけます。風の方向に火をつけていくのですがね、半分までつけるともう、ごうごうという火の海と音で五十呎も近づけなくなりますよ。なめてくる火の海は津波のようにおおいかぶさってくるから、こっちは逃げ

出しますが、なにしろ大木がゴロゴロしているの、それによじのぼり、はうようにして命がけです。あれはほんとにこわいやら情けないやら」アマゾンの木は水分が多く油分が少ないという。そのためだろうか、倒していない密林は決して山火事をおこさない。「火がおさまってからながめると、ものすごいウルブー（ハゲタカ）が飛びまわっている。行つて見ると、大蛇の大集会ですよ。それがからみあって死んでいて足の踏み場もないほどなんですから」

伐採したあとの木の山には蛇ばかりでなくたくさんの動物が棲みつくという。

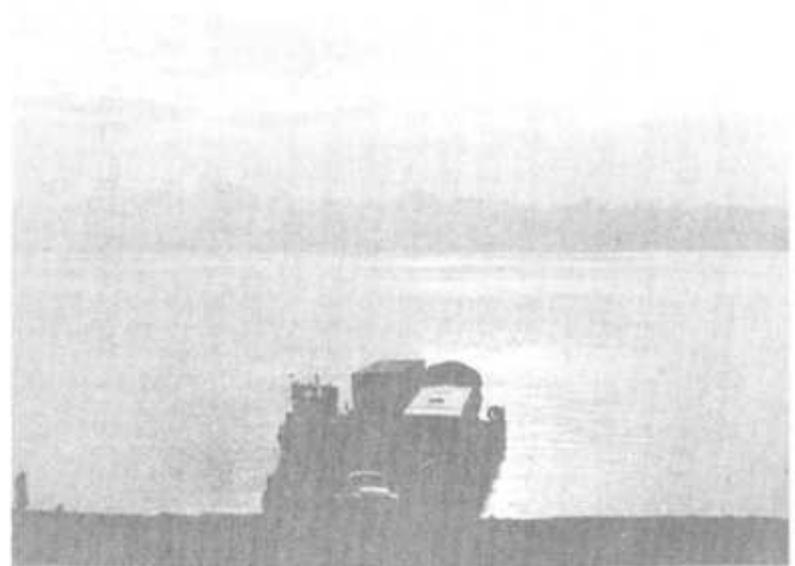
伐採、山焼き、根や焼け残りの木を片づけて、ようやくそこに作物を植えるのである。

やせた土壌の耕地は、焼いた灰が養分となり肥料なしで約三年間使うことができる。これがアマゾンの基本的農法である焼畑農業である。

## 第10章

### アマゾン最果ての新世紀

リオブランコとポルトベリョの群像



マデイラ川を渡る

ソ連カゼが四千キロを飛んでくる

静寂としたアマゾンの森林は、人間の斧が触れるとたちまち咆哮をあげて猛り狂うが、そのいっぽうで莫大な富も生んだ。マナウスの観光名所、アマゾナス劇場にそれは象徴されている。

外観はネオクラシック・スタイル、内部はフランス、イタリアなどのインテリアで贅を尽している。建築資材はすべてイタリアの大理石を使っている。ロンドンでいちど組み立てられたものを分解して船でマナウスに運び建てたのである。今日の金額で百億円近い建築費がかかっ

たといわれる。パリのオペラ劇場などから興行団が遠征し毎晩のようにオペラが上演された。

この劇場が完成したのは一九〇二年（明治三十五年）のことで、マナウスは当時大歓楽地としてにぎわい「一九一一年（明治四十四年）当時は全市の六十四軒が売春婦に關係のある家屋であったと記録が残っている」（池田重二著『アマゾン邦人発展史』）というほどであった。

この大景気をもたらしたものが天然ゴムで、これは自動車の発明に伴うタイヤ用ゴムの需要から生じたものだ。カヌーいっぱいの子ゴムが、今日の価値で二百万円にもなったという。アマゾンで定められている現在の最低給料が三〜四万円であることを考えれば、莫大な儲けであった。

だが、アマゾンゴムの大景気も一九二〇年代には火が消える。ゴムの苗がシンガポールやセイロンに持ち出され、東南アジアのゴムが隆盛となったためである。かつて辻小太郎氏が「ゴムの仇をジユートで討つ」といったのはこのゴム泥棒のことを指しているし、ピメンタ・ド・レイノもゴムの仇討ちだったといえるだろう。

アマゾンに日本人が入植して今年で五十年であるから、日本人はこのゴム景気にまきこまれていない計算になるが、実は多くの日本人がいた。「ペルー下り」と呼ばれる人々である。今年、ペルーは移住八十年を迎えた。つまり、アマゾナス劇場が完成する三年前に最初の日本人がブラジルの隣国・ペルーへ来ていた。この人たちの何

人かは、ゴムの富を求めて海拔五千以上のアンデス山脈を（ほとんど徒歩などで）越えてアマゾンへと下ってきたのである。

ゴム採集で儲けた金は、賭博と女に使われたといい、賭博で今日の金で二億円を手にした者もいた。（奥アマゾンはボリビアやペルーも含まれるので必ずしもブラジルとは限らない）。マナウスで、私はただ一人のペルー下りの老人がいると訊いた。八十九才の山根さんという私と同名の老人である。いまだにレガトン船を持って航海していることがわかり、小型ボート・タクシーでマナウス港を探しまわって会うことができたが、山根さんはスペイン語（ペルーの言語）まじりの日本語で、詰したくない、と語るばかりだ。やむなく引返してからさらに調べたところ、もう二人、アクレ州のリオブランコに古野さんというペルー下りの人が住んでいて元気なはず、という。たった一人のペルー下りということになる。

私は、クルゼイロ航空のボーイング737型機でリオブランコに飛んだ。

リオブランコはマナウスから西南へ千二百キロ、アクレ州の首府で六十キロも行けばボリビアにはいるというブラジルアマゾンの最果てである。とはいっても人口六万人の中都市。町から二十二キロ地点には、一九五九年（昭和三十四年）に開かれたキナリー植民地がある。

当初、十三家族が入植したが交通不便などの理由から

去る者が多く、今年の四月に入植二十年祭を行ったときはわずか三家族、私が訪ねた八月中旬には二家族になっていた。キナリーは以前見捨てられた土地のように書かれたところで、今年の二十年祭にマナウスの高松源次郎領事すら出席しなかったほどだ。

だが、時代は大きく変わっていた。

八年前に、リオブランコからサンパウロへ通じる道路が開通し、サンパウロにソ連カゼが入ったというニュースが届いた翌日には当地にソ連カゼが来ている、というほど人の交通がふえている。

浜口寛さん（六十才）と和子夫人（五十二才）には八人の子どもがいるが、三人の娘はすでにサンパウロなどに嫁ぎ、長男の博典さん（二十六才）はブラジル人教師と結婚して、三代目も生まれていた。

浜口さんはアクレ州で最初にコーヒー園を始め（一九六二年）いまは養鶏も手広くおこなっている。コーヒーは三万本、鶏は一万三千羽、毎日五百ダースの卵をリオブランコ市へ出荷していた。

### キナリー卵のニセモノが出現

「昔は陸の孤島と言われましたよ。日本からベレンまで一カ月。ところがベレンからここまでは二カ月かかってね。蒸気船は薪がなくなると船を止めて二〜二日薪を伐採するというありさまで」

子弟の教育の心配もあつてほとんどの人が脱耕していった。だが、ここはマナウス近郊などに比べてはるか肥沃な土地がある。アマゾン取材ではじめてコーヒー栽培の話聞いたが、それは土の豊かさによる。キナリー植民地からはほとんどの日本人が出て行ったが、逆にサンパウロ州からは続々と（日本人も含めて）コーヒー栽培のためにアクレ州につめかけている。ただし、サンパウロとの距離はまだまだ遠い。距離は約三千七百公里、日本列島は北海道の端から九州の端まで直線で二千百キロなのだからその遠さは想像がつくだろう。「乾期の道のいい時で八日、雨期になると十五日は運の良いほうで、三十日以上かかると思わないと」

途中のポルトベリーリョクイアバ間・五百キロが未舗装で、雨期になると動けなくなるクルマが続出し、軍隊のトラクターが一台ずつ引っぱるがたちまち千台くらいがじゅずつなぎになる。運転手は露営しなくてはならないので近くの村の食料がすっかりなくなった、などというところがニュースになる。

後にポルトベリーリョで私は日系二世のセイトシ・タケダさん（二十五才）というトラック運転手に会っている。メルセデス九・五トン、百四十七馬力エンジンのトラックの持主だ。

「米、プロパンガス、カンヅメ、ナベは必ずもって来る。去年の雨期には十六キロ進むのに十七日かかったね。止まってしまうと、クルマの外で食事つくってヘッジ（ハ

ンモック）を吊って眠るんだ。積荷の食糧を食ってしま  
うこともあるし、ピストルや銃で山ブタやシカ、パツカ  
を撃って食べている人もいるな。途中でクルマが故障し  
たらインヂオに千七百円ほど払って見張りを頼んで町ま  
で助けを呼びに行かないと」彼は、こうして四千<sup>キ</sup>近く  
を一人で走ってくるのである。再び浜口さん　―「です  
から、サンパウロから運んでくる卵は腐っているものが  
まじってしまうんでしてね」

キナリーの浜口製卵が信用を得るのは当然である。朝、  
リオブランコへ卵を卸しに行く博典さんに同行した。彼  
は卵の直売も行なっていたが、客はみな「キナリー？」と  
確めていた。このごろでは、サンパウロ産の卵まで「キ  
ナリー」と言つて売るのが出始めたという。もつとも、  
鶏の飼料の一部はサンパウロから買わねばならない。運  
貨が一キロにつき四十二円かかるので、十トンで四万二  
千円支出が増えるのである。あの悪路が舗装されるとサ  
ンパウロ直送の卵にかなわなくなる。そのために、いま  
コーヒー園を拡大しているのである。

「やがてここはコーヒーの中心地になるでしょうね。米を  
植えても二畝にも伸びるし、肥料など使ったことありま  
せんから」

熊本県出身で、有明海で海苔の養殖をしていた。漁協  
の理事まで務めていた。が、一夜の実風でイカダが切れ  
て流出、翌年は暖冬異変で腐る。日本では運がわるいか  
ら、地球の裏でやり直そう、それも日本人のなるべくい

ないところだと考えた。

暑いと思ったアマゾンだが、ここはフリーアジン（アンデスおろし）の名所だ。アンデス山脈が近いためである。ふつうは三十五度の気温が六度に下ったことがある。一年に一回は屋根を吹き飛ばす竜巻が来たものである。ずいぶんひどいことも言われた。が、セアラエンサー（セアラからの内国移民が当地は多い）という気性の激しい人たちの中で、ケンカひとつせず「融和と親睦だけを考えてきた」結果、浜口家は信用と尊敬を集めていた。

ブラジル人との間に混血の子孫もできて、銀行の信用もいまの事業を支えている。

二十年目。時間はかかったが、運は向いてきたようだ。いや、運は自分でつくりあげるものだった、といえるかもしれない。一九七八年（昭和五十三年）には、マナウスを訪問した皇太子夫妻に謁見することができたのもこの浜口夫妻である。

「私は今からですよ。ブラジル人の娘や孫までがトウチャン、ジイチャンと呼んでくれてね、とても幸福です。希望あつての苦労はいいもんです。これからはコーヒー植えてがんばらなくては」

私は、アスゾンで何度、希望、夢という言葉を耳にしただろうか。それも五十、六十才の人たちからである。日本なら定年退職を迎えて、老後の心配を始めている年代の人たちからである。

## ペルー下り老人の誇り

「おお、そうかの、日本から？　日本からおいでなすつたかの、それはえらいこと」

浜口さんのリオブランコ入植よりも先にリオブランコに定住していた日本人がいた。ペルー下りの古野功さん（八十三才）である。

「わしはな滋賀県彦根市の生まれ、いま、ほれ新幹線の駅があるだろう、そう米原よ」

古野さんは、リオブランコ市より六キロほど離れたサンフランシスコという村に住んでいた。住まいは板張りの質素な家だったが、隣が娘さんの家で、食事などはそちらですませている。孫や曾孫に囲まれての日々である。

“ペルー下り”というと哀しいイメージがつきまとう。私は以前にやはりボリビアでペルー下りにインタビューしたことがある。その人の話にもあつたが、彼らはペルーの農園主に奴隷のように扱われ、文無しで逃亡。銃を持ち馬に乗った追っ手から逃れて、寒さと空腹に耐えながら五千路近いアンデス山脈をこえてアマゾンへと下ってきた。アマゾンにはゴム景気で、そこで働いて“金貸り”を手に入れた別の地へ。ときに三百人の馬に乗った山賊に加わるなど、波乱万丈の体験者ばかりである。そうして時代が去り、気づいたときは老いて孤独になっていた。これがおおよそのペルー下りのストーリー

なのである。

私も、古野さんをそういう人と考えていた。

が、いきなり「新幹線」が出てきたのである。日本のことは何でも知っていた。ブラジルの邦字日刊紙「サンパウロ新聞」を郵便で購読しているためだった。

古野さんは、一九一七年（大正六年）に神戸を出港した。同郷人にペルーに移民としてはいり、アマゾンゴムで金をつかした。こたま稼いで帰国した者がいた。古野さんはその人とともにペルーへ向ったのである。目的は、二千元儲けて瓦ぶきの屋根の家を建てるためだった。が、おきまりの逃亡で、三年後の一九二〇年（大正九年）にはいまのリオブランコへ着いていた。

アンデスをこえてアマゾンへおり、空腹で倒れそうになつていたとき、ある人からスープをごちそうされた。「あれはうまかった。あんなうまいもん今までに食べておらん。何のスープかと思つたら鍋に猿の頭がはいつての、それでもうまかったですよ」

もうそんな経験はしたくなかつたのだろう。それに一九二〇年といえばゴム景気は終焉しようとしていた。古野さんは、リオブランコで名だたる野菜づくりの名人になつていた。当時のアルバムがある。白の上下の背広にネクタイ、髪はきれいに七三に分けている好男子である。

休みの日には、町のカジノへ行ってルーレットやカードに熱中したという。女の子もだいぶ泣かせたようだし、淋しい病気をもらった話など武勇伝も多い。

三十五〜六才のとき、十九才のドンナ・チーリアとい

うブラジル娘と結婚。二階建ての農家の手前に牛が数頭  
いて、そこに古野さんの姿、二階の窓から奥さんが顔を  
出している写真がある。

もうすっかり変色してボロボロの写真だが、ほのぼのと  
したものが伝わってくる。二人の子どもを抱いたまだあ  
どけない奥さんの写真もあった。

「結婚ちゅうもんはわからんの、奥さんはもう死んでおら  
れる」

結婚して二、三年目に奥さんはなぜかマナウスへ出て  
二度と戻らなかった。古野さんは男手ひとつで娘さんを  
育てたようだ。隣に住む娘さんは牧場主と結婚、古野さ  
んはその娘一家と余生を送っている。もう曾孫もできた。



古野氏の妻と子どもたち

満州事変のとき、日本へ軍資金を献納して時の大蔵大臣から贈られた感謝状をはじめ、一九七八年（昭和五十二年）日本の園田外務大臣から贈られた表彰状と銀盃まで、古野さんの自慢は多い。が、古野さんが誇りをもつて見せてくれたものはブラジル国民としてのドキュメント（身分証明書）と選挙人登録カード、老齢年金の支払い明細書（コンピュータ処理された書類）であった。

リオブランコに六十年暮らしたという誇りは、日本人として生きぬいたことではなく、ブラジル人になりきることでできたということであった。

辻小太郎氏からの書簡、ベルテラを出される戦後移住者が書いた「わたしたちいちどう五家族古野様のお世話になることになりました」という一九五五年付の書簡（ベルテラからリオブランコ移動は実現しなかった）など、彼がこの地へ来た、来ようとした日本人の世話を尽してきたことがうかがえる証拠を、私は半日かけてすべて見せていただいた。

「やはりのう、日本人もこここの人間になるつもりで住まなきゃいかんのう」

それは力強い言葉であった。

## マラリアになって一人前

「そこで座って待っててくれや」

私は最後の訪問地、ロンドニア州のポルトベリーヨへ

やってきた。リオブランコから五百キロ、マナウス方向へ戻った町である。サンパウロにも近くなって、三千二百キロあまり。人口八万六千人。ポルトベリョから十七キロ地点にトレゼニア・セッテンブロ入植地があり、十四戸の日本人家族がある。

私は、空港からタクシーで入植地の須藤巖さん一（五十二才）宅を訪ねたのだが、清夫人（五十四才）と巖さんの母上・ハルキさん（七十五才）が対応に出てくれて、「今日は日曜日だから、お父さんは麻雀に行ってるんですよ。帰りは夜でしょ、きつと」

というのである。おそらく、レストラン・アサヒにいますと訊いて再び十七キロの道を町へとタクシーで戻る。

レストラン・アサヒでは四人の日本人が、たしかに雀卓を囲んでいた。娯楽の少ないアマゾンでは麻雀は欠かせない。パレンチンスの川上夫人も「高拓生仲間が集まると麻雀ばっかし、そのうち見ているだけじゃ損しちゃうと思うって私も始めたの」と語っていた。

まだ日は高い。私は突然の訪問である。今日は日曜日である。そこで、「待っててくれや」となった。「すぐ終るから」。待った。そのうち私は眠くなる。移住地の朝は六時前に始まる。夜はインタビューが十二時、一時と続く。こんな毎日が続いているのだ。しかも思いの他、飛行機や船は時間通りに運行されていて、七年前とは大ちがいであった。予定通りの旅はかえって疲れる。ええい、ここはアマゾンだ！と眠ることにした。

「さあ、行こうや」と須藤さんに起される。もう外は真っ暗である。

「お客がきてもかまわないんだ。ここはアマゾンだからのん気でいいやね」

本当はインタビューはできるだけ十分にしたいので、のん気では困るのであるが。

移住地へ戻る小型トラックは、町から三〜四キロで未舗装道にはいる。

「この道だって昔は雨が降れば野菜かついで町まで歩いて運んだもんだ」

須藤さんは小がらで眼鏡をかけた風貌はおとなしいインテリふうなのだが、話を訊いている限り、アマゾンで会った日本人のうちで最も野趣あふれる男性であった。

トレゼ・デ・セッテンブロへの入植は一九五四年（昭和二十九年）である。道路が悪くトラックもなかったため午前二時に起床して野菜を町まで運ぶという生活が六年。一九五八年（昭和三十三年）ごろから養鶏が加わり、今日ではアマゾンでは最も稼いでいるところとして知られている。牧畜もさかんだ。

国際協力事業団ベレン支部の『管内概況』によれば一戸平均の”農業粗収入”は二千三百八十九万三千円で、アマゾンではトップである。

「ポルトベリョじや家族一人にクルマ一台あるほどだと、マナウスで訊いていた。私は、その話に開発しつづいた村を想像していた。須藤さんのお宅に着く。」

「三男の明（十六才）がマラリアにやられてね。ポルトベリーヨじや手の施しようないっていうので、飛行機でサンパウロへ運び、大学病院で手当をうけてようやく帰ってきたところなんだ」

マラリアがある？ 私は、あわててカバンからベレンで買ったマラリア予防薬をとり出すとゴクリと飲んだ。明君以外にはいないのでしょうか？ もうマラリアは珍しい病気だそうですね？

「うちの労働者は一人とも寝込んでるよ。明日、医者へ行けと言つてあるんだ」

私は、あわててもう一錠追加して飲みこんだ。それにしても、さつきからずいぶん蚊にくわれている。

後日、ベレンへ戻った私は夜中に吐き戻して気分わるく発熱、関節や筋肉の痛み、寒くて眠れぬーという症状が出た。エイダイ・ド・ブラジルの浮津護代表に「それはマラリアだ」と言われ、山内登氏（汎アマゾン日伯協会会長）には「ポルトベリーヨに行った？ あそこから戻ってきたばかりの男がマラリアで寝ているぞ、間違いない」と、断定され、「でもよかった、これでアマゾンの一人前だぞ」と励まされることになる。山崎太郎氏は、私をスーカム（マラリア撲滅局）へと連れていって下さる、というさわぎであった。

ポルトベリーヨは、やはりブラジル、アマゾンの最果てである。生活の向上は著しいがいま開拓のどまん中、という緊迫感が迫っていた。須藤さんのお宅から五十

と離れていない沼には、ワニが夜闇に赤い目玉を光らせていたし、水蛇（スクリー）に咬みつかれた青年もいた。

” 豹の乳 ” をウイスキー代りに

「入植して三〇四年目で着るものなんかボロボロでなくなっちゃった。それで鶏のつがいを買ってきて卵を産ませ、自分たちで孵化させて養鶏の基礎をつくったんだ」  
「事業団の日本人医師が巡回してきて、ここは医者より食いのものがあるって言われたものよ。体力が消耗していたから、マラリアで一割は亡くなった、いまも悪性マラリアはひどい」

そういう時代、疲れた体を癒す酒も不足した。ピンガも買えなかった。

「消毒用エチルアルコールに粉ミルク大さじ一杯、砂糖少々入れて水で倍にうすめて飲んだものさ。これをレイチ・デ・オンサ（オンサの乳）といってね」

そのうち蒸留酒の自家製造が始まる。

「米とイースト菌でドロクをつくる。このドロクをごはんを炊く釜に入れて、イゲタのスノコをわたす。その上に広口のドンブリを置く。釜の上には大きなナベでふたをするんだが、この中に冷水を入れておく。下から火で温めるとドロクのアアルコールが蒸発してナベの底につき、冷やされて滴となってドンブリに落ちるしくみさ。飲みたい一心でつくって、かなりうまかったね」

一升のドブロクから一合の焼酎がとれた。須藤巖にちなみ「巖酎友の会」ができ、宝焼酎よりうまいと喜んだ。何事も自分たちでやらねばならない。労働者を監督するのと同じことだ。

「こういうところで弱気でおったらいられないんだ。労働者どうしがケンカして、やめろやめろといってもやめない。殺しあいになったら困るから、おまえらクルマで轢き殺してやると突っこんで寸前で止めて、縄でふんじばって、町の入口まで運んでぶん投げたよ。やはりケンカをやめないから、出ていけ、出ていかんと撃ち殺してやると、ピストルで道まで追い出してケツをけつとばしてやったこともあるわ」

泥棒がはいって鶏がよく盗まれる。

「非常呼集で三十分もかからずコロニア（移住地）じゅうの男が銃もって集まって、トランシーバーで連絡とりあいながら巡回さ。バンバン威嚇射撃をして出てこーい！と言ったら出てきたね」

アマゾンでは虫がこわい。

「コップに甘いものを入れておいたら毒蜂がいたんですよ」と言うのは、七十五才のおばあちゃんである。

「それを知らないで飲んだら舌を刺されて、痛かったあ、ついこのあいだですよ。これ、何回も塗っていたら痛みとれましたよ」「これ」ーそれはぞつとするものだった。アルコールを入れたビンに毒蜂や毒蟻や毒グモやサソリ……見つけ次第漬けておく。そのエキスを舌に塗

り続けたのである。毒は毒をもって制す、自家製解毒剤である。

密林の掃除人といわれる軍隊蟻がときおり移住地を襲う。

「夜、寝ているとチクチク刺されて目が覚めるんです。床から天井、いたるところまっ黒の蟻の大群なんです。ベッドのまわりに水をまくところまっ黒には来なくなるから、そのまま十五分も待っていけばいなくなります。あれがきてくれると、ゴキブリ（長さ十センチ）からクモまできれいに食べてくれるからいいんです、そういえば、このごろ来ないわね」と、これは清夫人である。須藤さんは、「最初は驚いていたが、もうしよっちゆうくるのだから、驚いてはいられないやね」と言い、蟻も役立てば蛇も役立つと、「ジボイア（ボアの一種）は、とっつかまえてきて箱に入れてネズミを食わせていると慣れてくる。そいつを二〜三匹、いつも倉庫に放し飼いしておくんだ。ものすごいネズミがいるので、ネコより役立つね」

二匹の大蛇のことなのである。

この日、一キロほど離れた「お隣り」の門脇家で、娘のさゆりさん（二十四才）の誕生パーティーがあった。十六才〜二十八才の青年男女十三人が集まっていた。ここでは十四戸の子どもたち全員が兄弟のようにしているという。なんとも表情が明るい。

勇ましい親たちを支えてこの移住地を豊かにしているのは、この子どもたちでもあった。

朝四時起床、町の野菜市場へ手伝いに出て午前十一時に帰宅。シャワーを浴び昼食をとって午後一時から五時半まで学校。六時半に帰宅し九時まで翌日の野菜の出荷準備、遅い夕食を食べ、午前〇時〜一時まで勉強。このハードスケジュールを私は信じられなかった。「ほんとですよ」とくっつくたくなく笑う子どもたちは「学校でいねむりしているから」と言う。だが、本当だった。いったい、この真執さは何なのだろう。日本の同年令の子どもたちにもこういうことが信じられるだろうか。トレゼ・デ・セツテンブロは、沸煮するような情熱が老人から子どもまでうずまいていた。

## エピローグ

「三十分で魚が三百<sup>キ</sup>獲れるんですから、信じないでしよ、だれも信じないんだが」

ポルトベリーヨ最後の日、それは私にとって今回の取材のしめくくりの日でもあった。須藤さんは、私をある滝へ連れていってくれた。滝、と訊いて私の頭には華嚴の滝が浮かんだ。高いところからひとすじに落ちる水。だがそこは、落差はせいぜい四〜五段、その代り川幅が一<sup>キ</sup>はあるという滝だった。アマゾン河は、とうとうと流れるものと思っていたが、このような乱暴な流れが上流にはあった。乾期になり、上流へと遡ってくる魚たちは水量のへったこの滝つぼに次々と押しよせる。まるで

魚が水のようにここにうず巻く。エサもつけず、釣り糸を投げれば魚がひつかかってくる。もはや釣りでもなんでもなくなってしまう。一時間で三カ月分の食糧が手にはいるのだともいう。

アマゾンでは何もかも、日本式脳味噌がうち砕かれる。ポルトベリヨ近郊で金が出た。その金をねらってガリンペイロ（金や宝石を採掘するプロフェッショナル）が三千人集まっていた。町には「一週間で金が二キロとれた」という噂まで飛び交っていた。ゴールド・ラッシュであった。

ポルトベリヨからマナウスまで舗装道路が貫通していた。八百七十六キロ。黒田信夫君（二十二才）というマナウス大学生のクルマに便乗させてもらい私もハンドルを握った。八百七十六キロの間に、六回、クルマごと渡し船に乗らねばならなかったが、その間町はひとつもなかった。時速百三十キロで密林を切り裂いて走り続けるといつか、空を飛んでいる気持ちになる。

アクセルを踏み続け、五時間、十時間。この空間の広さは、時間の大きさにつながる。アマゾン最大の資源とは「時間」だったのではないか。

アマゾンにアンタ（バク）という動物がいる。夢を喰うという動物である。アマゾンの日本人はあのバクと同じだという。未来のことばかり夢みている、現実の足元を見ていないという。

だが、アマゾンには一億年変わらない大自然がある。

それは自然と呼ぶにはあまりにも広く深く長い。空間が時間と溶けあってしまうように巨大な自然は時間そのものである。その巨大な時間の中で、人間は永遠に近い未来に包まれる。夢をもつ。希望を抱く。

少くらしい生活が辛くても、夢を抱き続けることのできる人生と、今日とせいぜい明日のことだけにしか目の届かぬ人生と、どちらがいい人生だろうか。

どちらがいいかなど、そんなことを私は決められない。ただ、アマゾンの日本人はその前者を選んだ。また、夢ばかり見ていたのではなかった。この五十年、アマゾンの日本人はアマゾンに根をおろして着実に歩みを進めてきたことを今回の取材で知った。

犠牲が大きすぎた、アマゾンへの移民政策は失敗だった、金儲けだけをねらって来たにすぎなかった――すべては過去である。ここには未来しかない。たった五十年である。ひとつの人生が終わっても、それは子に、孫に続いていく。まだ結論を出すべきではない。

アマゾンの開発のスピードはすさまじい。地球の酸素の三分の一を供給する森林が消えてしまわないか、という危惧がある。

「そう。だから近いうちにブラジルは開発を制限し、世界へ酸素を供給する代償として各国から酸素代金を徴収するようになりますよ。それを各国が断るといふなら、アマゾンの世界と心中だ」

文明と非文明、開発と自然の相克はやがてこういう次

元にもまでいくだろうと、ブラジル人となった日本人が語っている。アマゾンにはアマゾンだけのものではない世紀が始まろうとしている。



すでにパラ州で建設が開始されたアマゾンアルミプロジェクトは、日伯合弁ですすめられているが、やがて日本はアルミの輸入の半分をアマゾンに頼ることになる。ブラジルが日本を次の時代のパートナーとして手をさし伸しているのは、アマゾンのみならずブラジルに根をおろした農業移住者を見ているからである。ブラジルに七十一年、アマゾンに五十年、ガラランチードと呼ばれるようになったその意味は、未来に向けて重い。

私は、すっかりアマゾンが好きになってしまった。マ

ナウスへ向う八百七十六キロの道は突然、滑走路になった。ポルトベリヨからマナウスまで、私は飛行機の操縦をしている気分だった。だが気づくと、本当の滑走路を走っているのだ。セスナ機が一機、転っていた。あとでわかったのだが、トラックと着陸してきた軽飛行機が衝突したのだった。

アマゾンでは、信じられないことがおこる。それは、毎日十秒の狂いもなく一分半おきに運行されている山の手線に揺られている人間には耐えられない快感である。

アマゾンにはアマゾンの価値規準がある。魚を釣るのは道楽ではなく生きるためであり、月に二回も三回も片道四千キロの道をトラックで走るのは冒険でもスポーツでもなく、生きるためである。アマゾンの日本人も、その価値規準の中で生きてきた。

住居や耐久消費財の所有量、食事の内容、レジャーの種類……：そういうものだけで日本の日本人と、アマゾンの日本人を比べて論ずるのは易しい。だがいくら差があらうと、それは時間が解決する問題だ。

私は、本書を通じて、そういう表面的な比較をするのではなく、時間をこえたものの比較をしたかった。それによって「日本」の「日本人の生き方」をふりかえりたかった。

果してそれができたかどうかは、まだ時間を待たねばなるまい。

なお、本文中に登場する方々の年令は一九七九年（昭

和五十四年)十月末現在のものである。トメアスー植民地は、アカラという名を使われた時代があったが、トメアスーに統一した。また物価については、一クルゼイロを八・四円(一九七九年八月の公定レート)として計算し、なるべく日本円で記した。

《参考文献》(順不同)

『中南米』(山本進著)、『ブラジル事典』(サンパウロ新聞社編)、『悲しき熱帯』(レヴィーストローズ著)、『新しいブラジル』(斉藤広志著)、『探険の世界史・南米の謎をさぐる』(マーシア・ウイリス著)、『カスタニヤール邦人開拓五十年の歩み』(汎アマゾン日伯協会カスタニヤール支部編)、『アマゾン邦人発展史』(池田重二著)、『南アメリカ』(マーストン・ベイツ著)、『アマゾン探険記』(W・L・ハーンドン著)、『アマゾン・偽りの楽園における人間と文化』(B・1・メガーズ著)、『アマゾン先生・世界の無医村で三十二年』(細江静男著)、『AN INTRUDER TO BRASILE』(C・ワグラー著)、『世界の民話・アメリカ大陸(1)』(小沢俊夫編)、『世界の地理教科書シリーズ8・ブラジル』(帝国書院刊)、『北伯開発懇話会調査報告書』(ブラジル日本商工会議所刊)、『日本人ペルー移住の記録』(杜団法人ラテンアメリカ協会)、『アマゾン』(トム・スターリング著)、『世界の民族・アマゾン・パンパス』(平凡社刊)、『アマゾンの歌』(角田房子著)、『裸族シャバンテ』(宮崎信江著)、

『邦人の発展地ブラジル』（大島喜一著）、『邦人活躍のブラジル』（田中誠之助著）、『崎山比佐衛伝』（吉村繁義著）、『陸上の生態』（J・L・クラウズレイ・トンブソン著）、『奥アマゾン探検記上・下巻』（向一陽著）、『ブラジル』（ピエール・モンベーク著）、『ラテンアメリカ』（高野悠著）、『ブラジルの日本人』（田宮虎彦著）、『原始林の中の日本人』（若槻泰雄著）、『ラテンアメリカ』（小学館刊）、『世界の旅・メキシコ・中南米』（中央公論社刊）、『オーパ！』（開高健著）、『ブラジルの旅』（尾和儀三郎・藤崎保夫著）、『アマゾン叢書・全五巻』（生島重一著）。この他、各領事館、国際協力事業団、各移住地発行の資料、および約八十冊の雑誌記事を参照させていただきました。

## 著者紹介

山根一眞（やまねかずま）一九四七年東京生まれ。独協大学ドイツ語学科卒業。大学時代より週刊誌などのフリーライターとなり、一九七二〜三年の八カ月間、南米八カ国を訪問するなど二十五カ国を取材旅行。

著書に『中古車商人』（交通タイムス社）、共著に『ドキュメント永大処分・管理倒産の内幕』（講談社）『新宿経営学』（ダイヤモンド社）などがある。ルポライター。

現住所・東京都中野区東中野二―二三―一五。

アマゾンで日本人はガランチードと呼ばれた

著作者

©山根一真

発行者

日向博美

発行所

国際青少年自然科学センター

印刷所

有限会社 野村印刷所

発売元

株式会社内田老鶴圃新社

東京都千代田区九段北一―二―一

電話 東京(二六五)三六三六代

振替口座東京三一六三七一番

定価

九八〇円

発行日

一九八〇年一月二十日

0020-20001-0505